

---

# 流星のロックマンX ~もう一つの世界へ~

SHOOTINGSTAR

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマンX～もう一つの世界～

### 【著者名】

NO267P

### 【作者名】

SHOOTINGSTAR

### 【あらすじ】

メテオGを食い止めてから約1年、スバル達は6年生になつてい  
た。卒業するまであと5ヶ月、彼らは有意義な生活を送つていた。  
しかし、突如現れた謎の青年によつてスバルとミンラは異世界へ飛  
ばされてしまう。

そこでスバル達が見たものとは？

全ての出来事が絡み合い、運命の歯車が動き出す。そして、無慈悲  
な破壊者が眠りから目を覚ます。

\* 現在、第4章：スバル救出編を連載中です\*

## 第1話、転校生（前書き）

僕は、このサイトに初めて投稿しました。  
なにかと分かりにくい部分があるとおもいますが、どうぞよろしく  
お願いします。  
それでは本編どうぞ！

# 第1話、転校生

メテオGを止めてから1年、スバルは6年生になつり、卒業するまで後5ヶ月になつていた。

星河家のいつも通りの朝、相変わらず、スバルは朝が苦手だ。

『オイ、スバルいい加減に起きろ！学校に遅刻するぞ！』

「うんあと少しだけ」 ZZZ . . .

ハア

この、いつまでたっても起きないツンツン頭の少年が星河スバルだ。  
そして、一生懸命スバルを起こしているのが相棒のウォーロックである。

『そりやあの森山とかいい女か来るんじゃねえのか』

「はつ！ そ、うだつた！ ！」

ウォーロックが『委員長』という言葉を発したとたんに、スバルは起きあがった。長年、委員長と付き合っているスバルだ。彼女の恐怖は身にしみているのだろう。

「アーニー タカヒコ」

今は11月下旬だ。もうすぐ12月になる。寒くて当然だろ？。

『早く準備しろ。チコクしても知らねえぞ』

「うふ

スバルは身支度をはじめ。青いパジャマをその場に脱いで、私服に着替える。のこのこ顔を洗っている暇もない。

着替えを10秒で済ませ、ドタドタと一階へ降りる。転ばないように気をつけねばならなかつた。

「おはよう、母さん」

テーブルに向かいながら、皿洗いをしている母の星河あかねに、朝の挨拶をする。

「おはよう、スバル」

あかねは、温水の水で皿を洗いながら、挨拶を返す。

スバルはイスに座り、用意してあつたパンを口に運びながら聞いた。

「父さんは？」

「WAXAに行つたわよ、今日は会議があるらしいから

スバルの父、星河大吾は宇宙飛行士で行方不明になつていたが、メテオGの中にいたところをロックマンであるスバルに助けられたのだ。いや、正確には助けられたのはスバルの方だ。大吾の力がなければ、メテオGの内部爆発から免れることはできなかつたであろう。

スバルは超特急で朝食を済ませる。しかし、口の中が渴いていたスバルは、お茶をガバガバ飲みこんでいた。おかげでトイレに行きたくなる。我慢して、学校で漏らすと英雄の名折れだ。

ピーンポーネン

トイレに駆け込んだと同時に玄関のチャイムが鳴る。彼にとつて地獄行きの列車がプラットホームに到着したのだ。

「ほら、来たわよ。急ぎなさいー。」

そうとは知らないあかねはトイレで用を達しているスバルを急かす。

「ロック、来ちゃったよ……どうぞうせ。」

弱々しい声でスバルはロックに対し、ルナへの恐怖心をあらわにしながら喋りかけた。

『起きないお前が悪い！』

ウォーロックの正論にスバルは返答が出来ない。とうとう覚悟を決める。

「ロック……僕は今日、無事に家に帰りつけるか分からぬけど、僕も男だ！覚悟を決めるよ！」

ズボンを上げながら、ハンターの中に居るウォーロックに告げた。

『そんな大げさの事なのか?』

「おっそーーい、レディを待たせるなんていい度胸ね！！」

「いや、あの、ちょっと寝坊しちゃって・・・」

いつも通り遅れて家から出てきたスバルは、委員長もといルナに説教を喰らっている。ルナが先頭に立ち、それに従う様にゴン太、キザマロ、ジャックの三人が居る。彼らはルナへの恐怖心のあまり助け舟を出せずにはい。

「あなた、いつもそればっかじゃない?反省してるの?」

「し、しますします」

スバルは「たすけてー」と口配せする。だが、彼らもトバッチリを喰らいたくはない。スバルのやられ様に可哀想になつたキザマロが、ようやつと、自らの危険を顧みず、ルナの説教からスバルに救いの手を差し伸べる。

スバルからしてみれば、彼の一言はナイチンゲールのようなものだつた。

「委員長、急がないと遅刻になりますよ」

あの委員長でも時間という魔物を従えることはできない。悪態を吐きそうな顔をスバルに向ける。

「仕様がないわねえ～スバル君？放課後、覚えていなさいよ？」

かくして一同は走ることとなる。途中、ゴン太の腹がグググと鳴り、「腹減つた～」などと呑気な事を言い出し、その場に座り込んだが、ジャックから拳骨をもらい走りだすゴン太であった。

スバルは、助け舟を出してくれたキザマロに小声で「ナイス！」と言った。無論、ルナには聞こえない声で・・・

学校にはギリギリ間にあつた。個々の椅子に座り込み、呼吸を整えている。

「ふう～流石に疲れましたね～」

「そうだねえ～」

スバルとキザマロがそんな話をしていると、一人の近くで話しているクラスの男子生徒の会話が空気を経由して、二人の鼓膜に響き渡る。

「なあ、今日、転校生が来るらしいぜ」

「えつ～？まじでか、どんな奴かな？」

「さあな。噂によれば、その転校生を見た奴は全員凍りついたらし  
い」

「まるで、メテコーサだな」

「クラスの男子生徒一人がそんな話しをしていたのが聞こえてきた。

「転校生がくるのか。凍りつくんだって、何者だろ?」

スバルは、刑事ドラマの主人公がする素振りをしながらキザマロに  
言ひつ。

「そのようですね。凍りつくんですか。タダものじやあないでしょ  
うね」

対するキザマロは、眼鏡をクイッと動かしながら言ひつ。良くあるパ  
ターンだ。

ホームルームのチャイムが鳴り、もじやもじや頭が特徴的な育田教  
師が入つてくる。

「はーい、みんな席に着けー」

今までしゃべつていたり暴れていた生徒たちは着席した。全員が着  
席したところを確認すると再び先生は口を開く。

「今日は転校生が来ている。紹介しよう。入つていいぞ!」

教室の扉が空いた瞬間、クラスのスバルを含め全員が凍りついた。

噂通りの結果だったということだ。その状態は、まるでメテューサの眼光を喰らつたかのようだ。

「ベイサイドシティから来ました響ミリソラです。よろしくお願ひします！」

## 第1話、転校生（後書き）

初めてでしたが、どうでしたか？

この意気でジャンジャン投稿しますのでこれからもよろしくお願いします。

更新は明日になると思います。基本的に毎週土曜に更新する予定です。

感想お待ちしております。

## 第2話、WAXAへ（前編）

前の話は少し短いように感じたので今回は長くしたいと思つた。  
それでは本編どうぞ！

## 第2話、WAXAへ

朝の氷河期はとっくに過ぎた放課後、スバル達は疲れ果てていた。その理由は一十分程前にさかのぼることになる。

帰りのH.Rが終わった時、廊下に立ったがえしてた男女のミソラファンが、待っていましたと言わんばかりに教室に駆けこんだ。ミソラの席は、一番後ろに用意されていて、我先にと教室にダイブする。

「ねえねえ、どうしてこの学校にきたの？」

「今度の新曲はいつ出るの？」

「サインくださいー！」

スバル達は週直だつたため、その応対におわれていたのだ。そして先ほどファン全員を追い返したのだ。

「疲れたあー」

ジャックは特に動いていたのでかなり疲れているようだ。

「育田先生には感謝しないといけないわね」

実は、あの数のミソラファンを追い返すことができたのは先生の協力があつたからである。どのような方法かといふと、それはいたつて簡単な物で、彼らの、彼女らの生物としての本質を利用したのだ。

「お前ら、そろそろいい加減にしねえと、校長呼ぶぞ」

育田は、平然とした口調で彼らに言った。ミソラファンは慌ただしく教室からでていく。ここに校長はキレたらすぐ怖いらしい。あの数の生徒を追い返せるのにも理解できる。

「でも、本当にす」「よね~ミソラちゃんの人気」

スバルは親友との再会を喜びながらミソラに話しかける。

「うん、ファンの人がたくさんいてくれるのは嬉しいけど流石にあの数は疲れるよ」

お返しの愛想笑い。アイドルからの愛想笑いにスバルは心を躍らせる。

「さて、週直も終わつたしそろそろ帰りましょ」

ルナは、チョークの粉で汚れた手をパチパチ言わせながら、友人たブロガーちに威厳を持つて言った。ルナは、その性格から目立ちたがり屋で、生意氣だ。まあ、そこが、彼女の可愛いところといえる。

余談ではあるが、この後、作者は痛くないストレートでルナから殴られた。

筆頭ルナを先頭に立て、一向は歩き出す。ルナは、玄関まで来た時に、思い出したような面持ちでスバルを睨んだ。

「そりいえばスバル君、朝の事は忘れてないわよね?」

「ゲッ！」

彼らの中に朝の恐怖が蘇つた。

「まあいいわ、明日は絶対に寝坊しないよ！」

あのルナがあわつり流した。これは、ギネスブックに載るほど珍しいことだ。よほど疲れているのだ。

また、余談になるが、電波変換をしゃうな勢いのルナから「ルゴン」アイを喰らつた作者はしばらく体が動かなかつた。よくやられる作者だ。

何だかんだありながらも、一回は他愛もない話をしながら学校を出た。

「せういえばミソラちゃんはどこに住むんですか？」

キザマロがミソラに聞いた。決して触れてはならないパンドラの箱にキザマロは、触れてしまった。彼に罪はない。彼の好奇心と興味心がいけないので。

「スバル君の家だよ」

「…………」

皆の視線はスバルに向いた。

「おい、スバルそれはねえよな！」

ゴン太は、何とも言えない顔でスバルを見つめる。

「そ、そうですよー！」

驚愕のあまりにキザマロは、顎ががくがくとしている。

「…………」

もはや、ジャックは

スバルは男達の視線よりもルナの殺気が怖くてたまらなかつた。

「そこをおどきやー！」

「「「うわあー！」」（スバル以外）

ルナはスバルを取り囮んでいたキザマロ、ゴン太、ジャックを強制的にどかした。

スバルは怖くてたまらなくうらり一目散に逃げた。

「ちよつと待つてよー」

スバルを追いかけるミソラ。

「じりー待ちなさいー！」

それを追いかけるルナ。

「…………」

とり残された男子達はただただ黙つていていた。

数分後にスバルは自宅の前で息が上がつていた。

「ハアハアふう、やつと逃れられた」

「もお、速いよお、スバルくん」

「『めん委員長が怖すぎて』

スバルが、心からの感想をミンラに言った。

「そんなことよりおばさんから聞いてなかつた?」

「いや聞いてないよ。」

この時スバルは、内心で「母さん知つてたのかよ」と心のツイッタード呟いた。

『オイオイ、ミンラがいるつてことはあいつもいるつてことか?』

「ウォーロック?」

ハンターの中から、ウォーロックが暴れ出した。スバルは疑問符を浮かべる。

『ポロロロンよく分かつたわねウォーロック』

「ハープ！！」

親友のウィザードとの再会にスバルは、感嘆する。

『お久しへり～』

ハープはもともとFM星人として地球にやってきたが、今はミソラのウィザードである。ミソラはハープと電波変換することによって「ハープ・ノート」になることができるのだ。

『だあー！！よりによつてこんな奴と一緒に住まなきやいけねえんだよ！！！！』

『あらあ～こんな奴で悪かつたわね～』

ハープはウォーロックの腹に頭突きを食らわせた。

『ぐへええ～』

「「はつはつはつはつ！！」」

二人は一体のコントに笑っていた。

PPP PPP (メール着信音)

「メールだ、誰からだろ？？」

スバルはハンターVGを覗き込んだ。

「暁さんからだ」

「なんて書いてあるの？」

ミソラはスバルに尋ねた。

「今からWAXAに来てくれだつて」

「なんでだろ？」

「ああ？」

「私も行く！」

「うん、行こうWAXAへ」

スバル達は家に一度帰ると身支度を整えWAXAへ向かった。

WAXAに行くにはウェーブライナーに乗っていかなければならぬ。しかもWAXAとサテラポリスは同じ建物にあるためパスポートがないと入ることができないのだ。

1時間後

「久しぶりにWAXAに来たねえ～」

「そうだね～、さつ、はやく行こう」

「うん」

「やあ、久しぶりだね二人とも～」

「「」」んにちは暁さん」

暁シドウ、彼はサテラポリスのエースで彼のウイザードであるアシッドと電波変換することによって

「アシッド・エース」になることができる。一年前、犯罪組織「デイーラー」との戦闘で「グレイブ・ジョーカー」の自爆を食い止めようとして爆発に巻き込まれ行方不明になっていたが、先日、怪我を完治してサテラポリスに戻つて来たのだ。

「さあ、上に行こう～ヨイリー博士が待つてゐる」

ヨイリー博士はジョーカーとアシッドを作つた天才科学者だ。ちなみに他の人の名前を呼ぶ時は必ず語尾に「ちゃん」を付ける（サテラポリスの一部の隊員は例外だ）

場所は変わり、57階

「こんにちわ、スバルちゃん、ミソラちゃんー」

「こんにちわヨイリー博士ー。」

「せつそくだけスバルちゃん、エースPGMを貸してくれないか  
しら?」

「いいですよ。でもどうしてですか?」

エースPGMとはメテオGからのノイズの影響を受けないように作  
られたプログラムで、流星サーバーにアクセスすることによつてノ  
イズチョンジをすることができる。

「実はメテオGが消滅したことによつてノイズがほとんど発生しな  
くなつたの」

『確かに、最近ウイルスとバトルしてもぜんぜんノイズが貯まらな  
つかたからなあ~』

「やうだね」

「そういうことになるんじやないかと思つて、擬似流星サーバーを  
作つておいたの」

『「擬似流星サーバー？」』

「流星サーバーを模してつくったサーバーよ」

「そんなことができるだなんてやつぱりWAXAはす、」

「今のH-SPGMではアクセスできないからバージョンアップが必要なの」

「あの～」

「…」（ミソラちゃんの事すっかり忘れてた…）

「せっかく何を話してるんですか？」

「大丈夫、ミソラちゃん用にも作るから、その時説明するわ！」

「…はい」

「じゃあしばらく貸してもらつわね。あなた達は帰つて休みなさい。急に呼び出しちゃつてゴメンね。」

「「わよなうひ」」

「またね」

一人はWAXAを出て行った。

## 「ダマタウン

「ハア～今日は疲れたね～」フランちゃん

「うん、帰つたらもう休もう。」

「もうだね・・・ん？」

「どうしたの？」

「いや、何か視線を感じたから」

「せやへ行こ」

「・・・うん！」

一人の様子を遠くで見ている者がいた。

「あれが地球を二度も救つたロックマンなのか？・・・へどがでる  
！」

一人は迫りくる脅威をしらずにいた

## 第2話、WAXAへ（後書き）

感想待つてます。

次は火曜日になります。それでは、「きげんよつー」

### 第3話、翌朝

昨日、二人は疲れたのである。家に帰つてから数分も立たぬうちに寝てしまった。

そして翌朝

「ふあ～よく寝た……まだ起きてないのか。今、何時だ？」

スバルは目覚まし時計を手に持つた。

「まだ朝の5時じやないか！？」

昨夜一番早く寝たのはスバルだった。ちなみに寝た時間は8時だ。そのおかげで珍しく早起きた。

スバルは一度寝する気になれないのをばらへ起きてこることじた。

「早起きは二文の得つていうほど……何もすむことがないよな～

「スバル君、朝から憂鬱だね～」

「作者さん～」

「やうやくね

「あつ……、ダメダメなさ～」

「いや、別に謝らなくていいよ、まあ初出演だからね。」

「セツニエバビツヒの小説を書いたと思ったんですか？」

「流星のゲームをやつて、いろいろ自分なりの話の展開を考えたりやつてね。それを誰かに見て欲しくなつたわけ」

「これから話の展開はどうあるんですか？」

「それはお答えできないな。ネタバレになるからね。ちなみに俺はそういうことにに関しては秘密主義だからね！」

『人の好きな人をばらしたのにか？』

「ウォーロック！ いつの間におきてたの？」

『作者がでてきたところからだ』

「あのよーなんでウォーロックが俺の一一番知られたくない事を知つてんだ！」

『……秘密だ…』

『いや、なんでセツニ秘密主義なんだよ…』

「作者さん……ばらしたつて？」

「別にばらしたわけじゃないんだけど……ただ俺の友達が付き合つてゐつてことをいつただけ」

「それだけ？」

「それだけ……」

だから、なんでお前が知ってんの！」

教えないと書いてあるでしょ？

真似すんな！」

ねえ、おまえの口うるさい。おまえの真似で

それはかなう

教へるな

ししし  
れうか

「だめだ！ 絶対にだめだ！」  
下手したら警察のおやつ

『ハアゝしょうがねなゝ』

「おつとーもう」んな時間かー……………じゃあ俺は失礼するよ

גָּדוֹלָה

## 作者がいつた後

「ねえ、なんなのさつきのあれは？」

「それは、  
・  
・  
・  
・  
・」

「はい、なー。」

『「まだいたのー！」』

「絶対に………いりなよ」

わ、わかつた、わかつた（怖い）！

そう言い残すと作者は消えていった  
スバルは再び時計を見た。

「六時半だ。下に行こう。みんな起きてるだろ？」

1  
階

「ねせやへ、ゆゑど、父れん。」

「おはようスバル」

「まだやがりいくん?  
」

「まだ寝てるわよ

ミンラは先日コダマタウンに引っ越ししてきた。なぜスバルの家に居候してゐるのかと云うと、本人曰く別の理由もあるようだが、やはり一番の理由は

彼女の両親は不運なことに他界しているのだ。

しかも一人とも、まず初めに父親が、その後に母親が、つまり、ミンラは孤児なのだ。

ゆえに一人でいるのは寂しいである云うといふスバル母の提案により、スバル家に居候、いや、越てきたのだ。

「おつとーもうこんな時間か！」

スバルの父、大吾はWAXAに勤めているために急いでるのだろう。なにしるこそこからはかなり距離がある。

「僕も学校に行く準備をしないとー！」

「？、スバル今日は土曜日よ。学校は休みのはずだけど・・・」

昨日はなんだかんだで大変だったのでも、今田が土曜日だと云うことを忘れていたのだろう。

「そうだったね！」

『オイオイ、スバル大丈夫か？お前が休日を忘れるなんて・・・しかも今日は早起きだし。雪でも降るんじゃないのか？』

「まだ11月だから降らないよ」

ナイス突っ込み！

「じゃ、行つてくる」

「「いつてらしゃい」」

「あつ、私もパートに行く準備しなきやー！」

大人達には、忙しい朝だ。

『久しぶりにウイルスバースティングしね～か？体がなまつてんだ』

『そいつとウォーロックはビーストスティングの練習をはじめた。』

「そりだね。でもミソソリちゃんが起きてからにじよつー。」

『それもそりだな . . . . .』

「ダマタウン某所

「星河スバルの力量はどれぐらいかな～？ふつふつふ、楽しみだ」

謎の男の周りにはウイルスがざつとちらりと体はいた . . . .

### 第3話、歴朝（後醍醐）

感想待つてます。

## 第4話、久しぶりのウイルスバストイリング（前書き）

今日は戦闘です  
それではどうぞ

## 第4話、久しぶりのウイルスバステイング

「トランスコード シューティングスター ロックマン  
「トランスコード ハープ・ノート」

一人は電波変換してウイルスを探しにいった。  
もともと、スバルは一人でウイルスバステイングをするつもりだった  
たが……  
こうなった経緯は数分前に遡る……

数分前

「おはようスバル君！」  
「おはようミソラちゃん」

二人は快活な挨拶を交わした。

「おばさんとおじさんは？」  
「もう仕事にいったよー」  
「ふーん、そう」  
「？」

ミソラは満面の笑みを浮かべた。  
スバルは相変わらず鈍感である。

「今からウイルスバステイングに行こうと思つんだけど……  
「私も行く！」

スバルが尋ねる前にミソラは即答した。

それにはスバルは少し動搖した素振りを見せた。

「でも、朝ご飯まだなんじや . . . . .」

「あつー…そりだつたね。食べ終わるまでまつてて」

スバルはミソラの笑みに少し見とれた。

そして今に到る . . .

スバル達はウイルスを探したのだがなかなか見つけることができず、やつとこさ一匹みつけることができた  
しかし . . . .

「メ、メットリオ」

スバルは落胆の表情を隠しきれない

『フンー! こんなカス、俺がハツ裂きにしてやる! ビーストスイング!!』

ウォーロックはおもいつきり自分の爪をふりかげした。  
ウイルスはうめき声を上げながらデリートされた。

「大丈夫だよスバル君、もうちょっと探そう  
「うん . . . . そりだね . . . . そりじよつー.」

ミソラは落胆しているスバルを励ました。  
スバルはその笑顔に元気をもらつたようだ。

『それにしてもよつー . . . . なんでこんなに探してんのに見つ

かんねエ～んだ』

ウォーロックの一言にスバルは再び頑垂れた。

『ちょっとは考えなさいよー』のバカラックー』

『つーーづ、うつせヒー』

ハープの正論にウォーロックは反論できなかつた。故に、ただ怒鳴るしかなかつたのだ。

そんな中、二人(二体?)の様子を眺めている者がいた。

「よし、お前ら . . . . 出でこいー」

謎の男はバトルカードに似たカードを上に掲げると、そのカードの中から大量のウイルスが飛び出した。

それに、先程、ウォーロックがデリートした「メットリオ」とは比べものにならないくらいに強力なウイルス達だ。具体的に言つと . . . .

エレミーラ、ハンマリー、ムーキュブなどだ。

「あそこにいる連中を . . . . 殺せ!」

男がウイルス達に命令を下すと、次々とスバル(ロックマン)達を殺し向かつた。

そのウイルス達の動きは、ただ与えられた命令を遂行にこなす機械

のように颯爽と . . . . .

「あれ？突然、雲行きが怪しくなってきたよ」

『！スバル、あれはウイルスの大群だ！』

ウイルスが大勢いるのだ雲に見えても可笑しくはないだろう。  
そして、「雲」はこちらに向かってきているのだ構えない訳にはいかないだろう。

「うえ～気持ちわりい～！」

その「雲」はウイルスがしき詰まつていて、吐きたいくらい気持ち悪いのだ。

「ミソラちゃん、くるよ～」

「うん！」

スバルはロックスターを構えながらミソラに注意した  
ウイルスが彼らの目の前に着地した

「喰らえ～ロックスター！」

「ショックノート！」

目の前のウイルスはテリートできたものの、次から次へと流れる滝

のようにウイルスが降つてくるので  
迅速に対応しなければ攻撃を喰らってしまう

「バトルカード ヘビー キャノン！」

スバルは一発で敵をデリートできる「ヘビー キャノン」を装備し、  
ウイルスにその強靭な力を向けた

「ヘビー キャノン」は、普通の「キャノン」に比べ威力がかなり高  
く、一回り重量が重い。取り回しは悪いが、その分、敵を目の敵に  
できる

流石のスバルも百体近くなつてると疲れが溜まつてきた

「ハアハア、ぐつぐつぐつぐつぐつぐつぐつぐつぐつぐつぐつぐつ  
ミソラちゃんは大丈夫？」

「…………私は大丈夫…………はつ！、スバル君後ろ！」

「へつ？」

スバルの後ろにはハンマーを振りかざしたウイルス、「ハンマリー」  
がいた

「ぐつ！」

スバルは攻撃するよりも防御態勢をとつた  
攻撃するには遅すぎたのだ  
しかし、

「「ガラシー」

「キーハハ———」

ウイルスはうめき声を上げながらテリートされた

「スバル大丈夫か！」

「暁さん！」

スバルの前には電波変換した暁、「アシッド・エース」が立っていた

「でもどうしてここに？」

「毎回WAXAに呼び出すのは悪いと思つてなあ～バージョンアップしたエースPGMを届けに来たんだ  
が、そしたら、お前達が降り注ぐウイルス達と戦つていたんだよ」

回想

「スバルの家は . . . . 確かこの辺だつたよなアシッド」

『 . . . . . 』

「うん?、アシッド?」

暁は道に迷っていた。

（お前何歳だよ！）という感じでアシッドは呆れていた。  
何しろ、スバルの家は田の前にあるのにきずかないのだから呆れて  
当然である。

「しかたない、公園に行って、人に聞くか . . . 」

『「！、シドウ、特殊メガネをかけて見てください』

「えつ！、あつ、ああ「

特殊メガネはスバルの持つビジラライザーと同じ電波が見えるメガネだ

「ああつ！、スバル達ウイルスと戦つてゐるじゃないか！！」

『しかもあれは異常な数ですね、加勢した方がいいのでは？』

「そうだな、やはり、ヒーローは遅れてでてくるもんだな！」

『 . . . . . 』 (幼稚だ)

現在

「 . . . . . つという訳だ」

「 . . . . . 」

「うん？どうしたんだ二人とも？」

「あの、H-E-S-P-G-Mを . . . . . 」

「ああつ . . . これだ！それから . . . . . 」

『スバル行くぞ！』

「うん！、ハアアアア！……ファイナライズ！ブラックエース！」

暁は説明したところを遮られたのを根に持つた

「おい……ちょっと……」

「ノイズフォースビックバン ブラックエンドギヤラクシー」

ノイズフォースビックバン ブラックエンドギヤラクシー、これは  
ブラックエース最強の必殺技で、  
黒いエネルギーボールの中に敵を閉じ込め、それをソードで斬つて  
大爆発を起こさせる技だ

周りにいたウイルスは全滅した。

## 第4話、久しぶりのウイルスバステイング（後書き）

なんかダラダラになつたので2話にわけます。

「 . . . おい！」

おお君は確か . . .

「俺をもつとだせ！」

大丈夫だ！出番はある。それに君を毎回だしてるじゃん  
「話の終わりだけじゃないか！」

それじゃまた来週！感想待つてます！

「話を逸らすな！」

ああ～つむとい . . .

## 第5話、伝えたい事（前書き）

更新遅れてすいません。中3なんで受験勉強が忙しいものでして…  
毎週更新は難しかかもしれません。それでも読んでくださる方には感謝です。

今回は、ロックマンがブラックエンド、ギャラクシーでウイルスを一掃した後の出来事です。それでは本編どうぞ！

## 第5話、伝えたい事

対ウイルス戦から10分後、スバル達は公園にいた . . .

「「メテオ（流星）PGM？」

スバル、ミソラの声がはもつた。

「ああ、これは今までスバルが使ってたエースPGMを改良したものだ」

『そんなら名前変えなくてもいいだろ！エースPGMC（Custom）なんかでいいだろ！』

ウォーロックにそんなネーミングセンスがあったとはおもえない。だが、そんな事は気にせずに、暁は正確に答える。

「単に改良しただけではない、これはジョーカーPGMを結合させ、本来、エースPGMでしか発生しないノイズチェンジと、ジョーカーPGMでしか発生しないノイズチェンジが両方できるようになつた。そして、ファイナライズ、ブラックエースとレッドジョーカーどちらとも変身可能になつた」

「ノイズは貯まるんですか？」

スバルはこのPGMの核心をつく、本来、エースPGMはノイズの影響を受けないために作られたプログラムだ。

「バトルをやつていれば普通に貯まる、このメテオPGMは周辺に若干ノイズを発生させることができるんだ」

若干、つまり害にならない程度のノイズを発生させる事によりバトルでノイズが貯まりやすくなるという事だ。

「じゃあ、ミソラにも渡しておこう」

「私も変身できるんですか？」

「変身どころよりパワーMAXだな」

パワーMAXというのは、ドリコンボールの、スーザンヤ人のようなものだ  
ちなみに、先日言っていたミソラ用のPGMも完成したようだ

「一通りしゃべったな、じゃあ、俺はこれで」

「やよいひなうら」

「おうー」

暁がいつた後

「ねえ、スバル君今から展望台にいかない？伝えたい事があるの」

「うん ここよ。」

ウォーロックは『ああ～あそこに行くのかよ～』とだだをこねるが、ハープの飛び蹴りを喰らって何処かにつれさられていった

．．．変な話だがハープに足はあるのだろうか？

話を戻そう．．．

展望台

「ねえ、私達ここで初めて出会ったんだよね」

「うそ、僕が父さんを事故でなくして落ち込んでた時、ここにいたんだ」

「お母さんを亡くして泣いていた私に、『ブライザーになつて下さい！』って言つたんだ」

スバルはその頃を思い出し照れたように赤面した。

「．．．前から言おうと思つてたんだけど．．．」

流石のスバルもそこまでいくと事を察したようだ。先程より顔が赤い。

「スバル君の事が……」

ズガアーン

車が炎上している……良い雰囲気が台無しだ。

二人の注意はそちらに向いた。

スバルはビジラライザーをかけた。長年、この手の事件に関わってきたスバルだ、だいたいの推測は思いつく。

「つ……」

スバルが見たのは1年前スバルが倒したムーの電波兵士エランドだつた。数は5体。

「ミソラちゃん……」

「速くいかなとね

「後ででいいの？」

「今はそんな場合じゃない

「もうだね・・・行こう。」

二人は電波変換して現場に向かった。

## 第5話、伝えたい事（後書き）

ちなみにノイズエンジはエースが、リブラ、コーバス、キャンサー、ジエミー、

オヒュカスです。ジョーカーはキグナス、オックス、バルゴ、クラウン、ウルフ

になります。ブライは例外です

次回はいよいよ謎の男が姿を現わします。ちなみにオリジナルキャラクターです

感想まつてます

スバル達はエランド四体を倒し、最後の一體を追いかけていた

「くつ！－速い！」

『オイ－この調子じゃあいつまでたっても追いつかねえぞ－』

「分かつてゐる . . .

一年前、スバル達が戦つたエランドに比べ、現在、戦つているエランドは戦闘力が数段上である。

第一に装備が違う、一年前のエランドは装甲も薄かつたし武器も片手剣と盾のみだった。

しかし、今のエランドは体にそれなりの装甲が施され、片手剣はサーベルになり、盾は厚く中心に十字架の紋章が描かれている。強力な上に一回り大きいランスも追加され、丁度、16世紀の騎士のような装備になつていて。

「いっちからいくぞ！バトルカード！プラズマガン！」

プラズマガンはヒットすると敵を麻痺状態にするプラズマ弾を発射する、これは、敵を足止めする時に使われるバトルカードなので攻撃力は低い。

ロックマンはプラズマガンを使って足止めを狙うが、分厚い盾によりその攻撃は憚れてしまつ。

「なつ！！」

ロックマンの隙を見てエランドは巨大なランスで攻撃を仕掛けようとしてきた。

ランスはブレイク性能が付いているためバリアやシールドでは防ぎきれない。

「ショックノート！」

ハープ・ノートの不意打ちを喰らい、エランドは後ろに仰け反る。

「今だ！バトルカード！ブレイクサーべル！」

エランドはブレイク性能が付いているサーべルの攻撃を直に喰らい、その場でテリートされた。

「ありがとう、ミソラちゃん」

「どういたしまして」

先程の戦闘で手助けしてもらった事の礼をスバルはミソラに言つ。

「オーライ！」

向こうから暁が電波変換したアシッドエースが駆けてくる。  
どうやら先程の車体炎上で、通報があったようだ。サテラポリスの男性隊員が炎上した車の辺りを調べている。暁はその応援に来たよ

うだ。

「お前達で事件の要因である電波体は『テリート』したのか？」

『ああ、かなり手こずつたがな』

ウォーロックが自慢げに答える。

暁は残念そうに「そうか……」と言った、本人は「ヒーローは遅れて登場する……」というのがポリシーらしくて、スバル達が既に片していたことで自分の出番が無くなつたことによる事で残念がつてているのだ。

スバルとミソラは、そんな暁を見て苦笑するしかなかつた。

だが、そんな雰囲気も長くは続かなかつた。

「……あのナイトメア5体を倒したのか……流石は地球を3度の危機から救つたロックマンといったところだな……まあ、所詮は試作兵器のナイトメアだがな……」

「つ……」

いつの間にやら暁の後ろに見覚えのない17～19歳がらみ青年が立つていた。服装は茶色のボロボロのマントを着て、顔の下半分はマスクをしているため見えない。瞳の色は漆黒の黒で、髪の毛は銀髪だ。髪型は少し天然パーマがかかつてあり、全体的に髪がたつている。髪がたつていてるといつてもスバルのよつに特徴的な髪型ではない。

そんな容姿の青年にスバルが問う。

「え、え、と、君は？」

「…………」

何も答えない。

青年は静かに暁の方を向くと……

「…………だけ、白パト！」

「な、なんだと……」

暁はサテラ・ポリスのエースだ。でも、この変な青年に白パト扱いされたのだ、エースとしてのプライドが許せばずがない。

「お前…………」

「聞こえなかつたか…………だけとこつてこるー」

「…………あ、ああ」

殺氣をこめた眼光で怒る暁を黙らせた。そういうつた実力者だ。

「…………ていうか私達の事見えてるのー」

ミソラは青年に問う。

だが、その答えはスバルが返してきた。

「何言つてゐるだよミソソリちゃん、だつてこの人電波体じゃ……な  
い！」

普通、電波体は周波数というものを発しているため、その周波数で遠くにいる電波体の存在も確認できるのだが、この青年の場合は電波体でないため、そのような周波数も感じられないのだ。

『どうじこつたおめえ！』これはウエーブロードだぞー電波体でない奴がのれるはずがないんだ！』

ウォーロックが怒鳴りながら問つ。

「…………」

だが、やはり青年は答えない。

『なんなんだこいつは？…………』

ウォーロックが悪態をつく。

青年は何も言わずにいたが突然、腕を天に向けた。

「…………？」

全員が疑問符をうかべる。

青年は「パチン……」と指を鳴らした。

すると . . .

「「え……」」

スバルとミソラの下に大きくてドス黒い穴が空いた。

「「うわあああ——」」

地面に穴が空いたのだ。当然ながら下に落ちる。

「お前いったいスバルとミソラに何をした!」

残された暁は青年に怒鳴り問うが、やはり何も答えない。

『シドウー』

どうしたことか、いつもの冷静なアシッドは今は慌てている。

「どうしたアシッド!……」

『 . . . ロックマンとハープ・ノートの反応が消えました . . . 』

「何! お前まさか!」

暁は青年を睨みつける。

「白パートは知る必要はない! 失せり!」

「なつ！・・・ぐがつ！・・・

青年は暁の前に颯爽と移動し、バトルカード、マニアーハンドのひとつものを使って暁を氣絶させた。  
ほんの3秒程度で勝負は決まった。

暁が氣絶したことを確認すると青年は黒い穴の中へ消えた。  
青年がそこから消えると黒い穴も無くなつた。

実は、先程のエランドもウイルスも青年、つまり謎の男によって仕組まれていたのだ。彼はスバル達が自分に反抗しないようにエランドやウイルスで十分に体力を奪つた上で自分の世界に連れていったのだ。

つまりエランドやウイルスは罠だつたのだ。

## 第6話、罷（後書き）

ちなみにあの車はリアルウェーブです。炎上するはずがありません  
なのでバトルカードを使つたんだよね？謎の青年君！

「…そうだ、あの車には誰も乗つていなかつたからな  
いや、誰も乗つてないからつて火をつけることはいけないよ  
車の持ち主、迷惑だよ

まあ、どうでもいいけどね。じゃあ、また来週

「…どうでもいいのかよ！」

## 第7話、異次元世界

ザ――――（雨の音）

ザバ――ーン（波の音）

「 . . . . . はつ ！」

スバルは目を覚ました。その時に飛びこんできた風景は、鉛色の空、絶え間なく降り続ける雨、ビュービューと吹いている風によって自分の目の前で荒れる波、雨によつてグツチヨリした砂浜、そして、スバルの後ろには誰も住んでなさそうなボロボロの母屋があつた。リアルウェーブではない本物だ

「 ミソラは . . . どう？」

そこは、スバルには見慣れない所だつた。スバルの電波変換は保たれているので雨による冷たさこそ感じないが、そこは何か冷たい雰囲気が漂つていた。空にはしっかりとウェーブロードがあるが、スバル達の世界にあるものに比べて、すごくもうそうだ

「 . . . あれ、僕は確か黒い穴の中に落ちていつたと思うんだけど . . . . 」  
「 . . . 」  
「 . . . 」  
「 . . . 」  
「 . . . 」  
「 やんはー！」

スバルは辺りを見回した。すると向こうにピンク色の小さな存在が見えた、幸いな事にミソラは自分より数メートル離れたところにいた

「 ミソラちやん！ ！」

スバルはミソラを見つけると彼女のところに向かつて走りだした。  
しかし

「ぐつ・・・・・体が重い・・・」

スバルはその場に倒れこんだ。それと同時に電波変換も解除される

冷たい雨がスバルの小さな体をつつ

「ぐはつ・・・・ミソラちゃん・・・」

スバルはミソラの大事をはいつくばってでも確かめに行こうとする

「はあはあ・・・・ミソラちゃん・・・無事でよかつた・・・」

あれから何分たつたであろうスバルはミソラの所にやつとかつとの  
思いでついた

ミソラは、今は氣絶している、どうやら先程のスバルと同じように  
穴から抜けでた後、ここに落ちた衝撃で頭をうつたようだ。電波変  
換はとかれでいる

スバルはミソラの無事を確認すると、その場に仰向けになつた  
しかし、そこでスバルはおかしなことにきずく

「つー・・・ビジライザーもかけてないのにウエーブロードが見えてる

普通、生身の人間は電波を見ることはできない。しかし、今のスバルにはビジラライザーもかけてない、電波変換もしていない、なにに見えているのだ

「どうして……！」

突然、スバルの背中に明るい光が当たる、その明るい光は車のライトだった

車はスバル達の所にどんどん近づいてくる

「…………」

車はスバルの前で止まった

それは随分と古い型の車だった、スバル達の時代では車は電波化、所謂リアルウェーブだ。車の他にも、

電車、建物、学校にある桜の木までもが電波でできている

だが、その車は今では在りえないガソリン車だ。もくもくと煙を出している排気口がそれを物語っている

リアルウェーブの車は車輪がなく宙に浮いているが、それは車輪付きだ。それらのすべては23世紀では在る筈のないものだった

車のライトに照らされたせいか、それとも、もくもくとれる車の排気煙を吸つたせいか、ミソラが田を覚ました

「う、うーん……スバル……君？……うわっ！眩しい！」

田覚めてすぐに明るいライトを見たのだ脳しくなつて当然である

そんなミソラを知つてか知らずか、車の中から背の高い男が出てきた

そして、その男は明るいライトに照らされながら「」と言つた

「待つてたよ . . . 君たちを . . . 」

## 第8話、プレールビーチ

20代前半に見える男性は金髪でブルーの瞳190cmはあると思われる巨漢ではあるが、とても爽やかな顔をしていて性格が顔にあらわていると言つてもいいだらう

しかし、そんな男をいかにも怪しいという感じで見つめるズバルとミンラ

「そ、そんな怖い目で見ないでくれよ・・・」

爽やかな顔をした男は怪しい視線を注ぐズバルとミンラに苦笑する

「ま、まあこんな大雨なんだから・・・お茶でも飲んで温まりなよ・・・」

そういうと男は車を止めた横のボロボロの母屋に案内した

「うわー・・・ボロすぎじゃん」

ミンラが、そのあまりのボロさに絶句する

「すまないね、あんまりここ使つてないからさ」

男は蜘蛛の古巣をはらいながら言つた

「俺はルーカス、よろしくな!」

ルーカスという男は快活に自己紹介をした。それにつられたズバル

ミソラも自己紹介をする

「あ、僕は星河スバルです」

「繩子さんです、もう少しお願ひします」

『俺はウオーロックだ！』

『ボロロン、私はハーブ』

卷之二

「一体が突然ウイザードONになつて出てきたので一人は驚いた、ちなみに今までずっと出て来なかつたのでスバルとミンラは一体の事をすつかり忘れていたのだ

雨漏りがどじろどじろで、ピチャピチャと音を鳴らしてこの。この母屋がとてもボロイことが良く分かる

「ま、そこに腰かけてくれ、飲み物は何がいい？」  
オレンジジースがあるけど」「コーヒー、お茶、

ルーカスは、埃かぶつたテーブルと、イスに座るようにいつた

「私、コーヒーで！」

「僕はお茶でお願いします」

「OK、任せとけ！」

もはや、さつきまでのルークスに対する態度はいつたい何だったのだろうか、二人は完全に懐いている

「ホイ、できたぜ！」

ルークスが、コーヒーとお茶を煎れてテーブルによつてきた

スバルとミソラにマグカップを渡すと自分も彼らと対面した席に座つた

「……」の「コーヒー、美味しい」

ミソラがコーヒーの味の感想を述べる

「だるー」の国の「コーヒー豆は世界一だつたんだぜ！」

あくまで語尾が過去形だ

「ああ～その前に、この世界の話をしなきやいけないな……」

ルークスが頭を搔きながら呟く

「この世界の話？」

スバルがルークスに問う

「うん、まあ……いいにいく話なんだけどさ～」

スバルは真剣に、ミソラはコーヒーを啜りながら聞いていた

「この世界の人類は滅んだ・・・」

「「え！？！」」

スバルはあまりにも驚いて椅子から立ち上がり、ミソラは瞬ついたコーヒーを吹き出した

## 第9話、滅亡した世界（前書き）

明けまして、おめでとうございます。  
久しぶりに投稿しました。  
内容的にグダグダです。歴史が苦手な人には、かなり辛いと思いま  
す

## 第9話、滅亡した世界

ルーカスは、人類滅亡までの世界の出来事をスバル達に語り始めた

「忘れもしない . . . 西暦2020年、4月9日、午後2時半、数千年に渡つて築かれた人類の歴史はたつた一発の光線で幕を閉じた . . . 」

それを聞いたスバル、ミソラ、ウォーロック、ハープの四人は、哀れむ様な、悲しむよう様な目でルーカスを見つめた誰も喋ろうとはしない。

当然ながら誰かが死ぬ、文明が滅ぶ、何かが亡くなるという事は悲しい事であると言えよう。例えそれが、当事者でなくともだ。

互いを憎み、殺しあう戦争も、勝利したその時は、喜ばしいかもしないが、後になつてみれば、自分達は、とり返しのつかない事をしてしまつたという後悔が生じてくる

ルーカスは、自分達、人類はもう滅んだ、厳密に言えば滅ぶ寸前の世界に自分は生きているのだ、という自覚はあるようだ。その証拠に、哀れみや、悲しみの視線を送られても、気にしていないようだつた

彼は世界地図を広げると、再び語り始めた

「1970年代から始まつた東の大國アメリカ合衆国と、西の巨大国ソビエト社会主義共和国連邦（ソ連）との直接の戦火を交えない厳しい対立が続いた。俗に言う、冷たい戦争、冷戦というやつだ。両国とも当時の最強兵器である核ミサイルの量産、非人徳的な研究、

植民地の拡大などを続け、ついには、あと1分で世界が終る、なんて事もあった」

ルーカスは、アメリカと、ソ連の位置を指でさしながら口を動かしている

「まあ、その時は何とか免れたものの、結局、世界は終わってしまった．．．争いを続けた人類の末路だよな．．．話を戻そーか．．．東西冷戦が終結したのは1995年、それまで対立していた両国は終戦

条約を結び、世界の平和を願つて国際平和機関「国際平和連合」を設立し、以後20年間は争いが起きない平和な世の中になつた．．．というのも、国連（国際平和連合）が管轄していた国際平和維持軍「K·P·M」が世界中の紛争や、テロリズムを武力で鎮圧したいたからだ、と、俺は思う．．まあ、そんな仮の平和も長くは続かなかつたがな．．．悪い一方的に話でまつた．．．

やつと終わったと思ったスバル達は安堵の息を吐くが、まだ話は終わっていないかつた

「じゃあ、続けるぞ、今が2023年だから、丁度3年前だな、俺はその頃KPMに所属していたが、他の隊員達とゴチャゴチャあつてね．．．部隊から抜けたんだよ、そして俺はここ、ボスニアに引っ越し、終末の日を迎えた．．．あの時、俺はテレビを見ていたんだ、そしたら突然、ニュース速報に変わって．．．『臨時ニュースをお伝えします！落ち着いて聞いてください、先程、ソ連から大量破壊兵器、DESTROYERが世界に向けて発射されたという報告がありました。これにより、皆さんは、できる限り地下深くに逃げてください！．．．』って感じでね．．．俺は地下のシェルターに逃げ込んだ、こうなる事を予想して前々から作つておいた

んだ。世界が機械の誤作動で滅ぶなんて切なすぎるけどね……ボスニアは、ものすごく小さな国だから、そこまで影響はなかつた。だから、俺はここで生きているってな訳よ……

ルーカスの言葉は笑つてゐるが、顔は笑つていなかつた

「ふう～ここまでの経緯は分かつてもらえたかな……って、あれ？」

スバルは理科が得意分野だが、社会はピッタリにダメだ。もの凄く疲れている、理系の人間にとつては、非常に厳しかつたであろう。他の面々もまたしかり、ウォーロックは完全にダウンしている、ハープは、『もう、無理……』といつ顔をしてゐる、ミンラも同じような感じだ。

ルーカスは速く喋り過ぎたのだ、その事に今更気付いたのだ

「わ、悪い……また、一方的に喋つてしまつた……俺は歴史になると燃えてしまつんだ。」

つまり、スバルとは逆の人間という事になる。ちなみに、作者も文系だそうだ

「さてと、それじゃあ……行くか！」

ルーカスが唐突に大声を上げたので、皆、驚いて彼の方を見た。

スバルが呟く

「行へつて・・・ビーバー.」

「決まつてんじやん!俺達のアジトだよーー.」

## 第9話、滅亡した世界（後書き）

現在の歴史とほんの少し似ている所がありますが、気にしないでください。

次は、話が少しだけ進むと思います  
それでは、また次回！！

## 第10話、プレール湾内海底施設

今にも黒い生物が出てきそうなキッチンの下の壇に小さな扉が四つあつた

ルーカスは、その中から左から一番目の扉を開けて、中の荷物を取りだした

案の定、その時にドス黒い生物が出てきた。

ボスニアは、南アメリカの赤道直下の国である。一年中を通して気温が高い、そのためか黒い生物のサイズもやけに大きい。

女性陣が驚くのは言うまでもないが、スバル、ウォーロックまでもが驚愕した。

『『『『ギヤ-----』』』

「オイ、そんな驚かなくてもいいんじゃねーか？」

「いや、普通、驚きますよ。こんなでかいの見たら」

スバルは虫は大丈夫だ、ウォーロックもたぶん大丈夫だ、ミソラはだめだ、ハープもまたそうだ。

しかし、ただでかいと言つても、常識を超えている。ルーカスの靴のサイズと同じくらいだ

ルーカスの靴のサイズは28、29cm……考へたくもない

ミソラは失神しそうだ

「ルーカスさん……早く潰してください……」

失神しそうになりながら、ミソラがルーカスに黒い生き物を撃退するようにいった

「この大きさの奴を潰したら、酷い事になると思ひぜ」

ミソラ、ハープ、スバルはアウトだ。ウォーロックはなんとか持ちこたえた、彼は、この気持ち悪い生物を見た事が何度もあった。しかし、ここまで物となると流石の彼でもダメだろう。

そんなこんなしている内に奴はどこかえ消えていった

「さつー気を取り直していくぞ！」

ルーカスは何ともない様子だ

先程、荷物を除けた所の床に、一人ぐらいは入れる扉があった。そして、そこを開けると、梯子があつて地下に続いているようだつたそこに一人ずつ入つていった

ようやく地面につくと、果てしなく地下通路が続いていた。若干、寒気を感じる所である

「ここは、フレール湾の下だから、少し寒いかもれない、それに、空気も薄い、まあ、当然だな、何しろここは海底だから」

ルーカスは歩きながら、こここの説明をした

そして、この辺りの地理について語りだした

「ボスニアは、北のパナマと南のコロンビアに囲まれた小さな国だ、東にカリブ海、西に太平洋といった二つの海に挟まれた国である。ここ、フレール湾は、三角形に欠けた形になつていて、湾を出るとカリブ海になる。昔は海賊なんていう危ない輩もいたがな。ボスニアは、コーヒー豆や、パイナップルなんかが良く獲れる、そのおかげで、今、やつていけてる訳だ」

ルーカスが一通り話しあると、ウォーロックがあからさまに質問した

『そういえばよお、この国の電波技術はそんなに発展してんのか？ スバルがビジラライザーをかけて無くとも電波が見えるつて言うからよお』

ウォーロックがその質問をした時、ルーカスの目がキランと光った。スイッチが〇になつた

「ふつふつふ、知りたいかい？」

『ゲッ！』

「先程、冷戦の事について話したよね、冷戦っていうのは戦争だけじゃなくて、宇宙開発、電波技術開発、ロボット技術開発、などのハイテク産業の競争もあつたんだ、おかげで、たつたの二十年で、電波が見えるようになつたり、ウェーブロードが整備されたり、ウイザードができたりしたんだからね・・・人間はほとんど居ないけど・・・」

流石にこれには全員驚いた。何百年もかけて作り上げられた電波技

術をたつたの一十年で電波が見えるまでに発展するとは、冷戦の激しさが目に見える、電波技術の面ではスバル達の世界よりも何年か上を行つて いるのだ。

今日でも、冷戦によつて得られた宇宙技術は今の時代の基礎となつて いる。あくまで現世の話だが。

「おつ！ 着いた、着いた！」

目の前には、小さなドアがある、これは自動式のようだ

ルーカスはエロカードを取り出すと読み込み口にそれを通した

「このドアわね、実は26枚のカードがないとトラップはクリアできなんだ、これは、そのマスターカード、これ一枚で全部のトラップをクリアできるようになつて いるんだ。」

ルーカスは奥に進みながら説明した。確かに、一つの部屋を出る度にカードの読み込み口があるのはそのためであろう。トラップがどういった物なのかは気になるが。

施設の最奥部に来ると、一人の男がパソコンを弄くつてた

「おい、連れてきたぞ！」

ルーカスがその男に呼びかけた

## 第10話、フレール湾内海底施設（後書き）

冷戦というものは、現在の歴史と少し違います。そして、ボスニアという国は存在しません。空想の産物です。次回は明日投稿すると思います  
それでは！！

## 第1-1話、行動目的

パソコンを弄くれていた男はこちらを見ると自己紹介を始めた

「俺のコードネームはジャッカー、職業は軍事技術者」

ジャッカーという男はてつとり速く自己紹介を終わらせると再びパソコンを弄くり始めた

「こいつ、前に任務に出た時のコードネームをそのまま使ってるんだよ、こいつが技術者に成る前の話だけど・・・」

ルーカスが代わりにジャッカーの自己紹介をした

「そんな、どうでもいい話は置いといで、さつさと目的を話したらどうだ、ルーカス」

「ああ、分かつてゐる・・・ええと・・・」

ルーカスが何から喋ればいいか迷つてゐる間にジャンカーが口を開いた

「もういいルーカス、俺が話す、お前ら、ＫＰＭの事は知つてゐるな

「は、はい・・・」

スバルが代表で返答した

「今、奴らはここの国に駐留している、あいつらの思惑を阻止してくれ

「は、はあ . . . 」

スバル達は呆けた顔をしながらしぶしぶ答えた、突然、意味の分からぬ事を言われたのだから呆けて当然だろつ

ルーカスが付け足す

「君達がこっちの世界に来る前に見覚えのない誰かと接触しなかつたかい？」

ルーカスの質問に全員がうなずく、見覚えのない誰かというのは恐らくこっちの世界につれてきた張本人の事だろつ、つまり、あのリアルウェーブの車を炎上させた青年の事だ

「やはりそつか . . . 」

「あの、誰なんですか、あの男の人は？」

スバルが現実世界（これからはスバル達の世界の事を現実世界、ルーカス達の世界を異次元世界と呼ぶ事にする）で会った謎の青年の事について聞いた

「恐らくＫＰＭの隊員だろう . . . 」

『『『「えつ！－！」』』』

これで何回目だろうか、再び四人から驚愕の声が上がる

『オイ、そのＫＰなんたらという軍隊は平和維持の部隊なんだろつ、

どうしてそんな事をする必要があるんだ?』

今度はウォーロックがルーカスに聞いた

「奴らの本当の目的は何なのかは不明だが、これだけは言える、奴らの今のターゲットは、お前達だ、特にスバル、ウォーロック、お前らは以前、オーパーツを使用したことがあるだろう?」

「はい . . . それと何か関係しているんですか?」

「ああ、お前ら、ムー人という種族がいた事は知っているだろう?」

その時、四人とも一人の少年を思い浮かべた、赤い瞳に、ボサボサの銀髪、辯の力を否定するムーの末裔ソロだ

「ムー人は戦いを好むものと、好まぬものに別れた、好戦的になつたムー人は自らの大陸を空に浮かべた平和を望んだムー人は隠れながらも平和に暮らした . . . これが後世に引き継がれたムー人の歴史だが、実は、ここで語られてない事がある、それは、好戦的なムー人が滅ぶ前に、一部の人間がこちらの世界に流れ込んできたということだ、当時、彼らの間では異次元空間説というのが持ち上がつていた、そして、ムー大陸が海の底に沈んだら、生き残つた好戦的ムー人の一部はこっちに逃げてきた、その子孫は今でも生きているが数は少なくつて いるな . . . それと、異次元への行き方だが、その際に用いるのがオーパーツ、それを一度使うと以後一千年以上は自由に通行できる、その事を知つたPKMの連中はあつちの世界にあるオーパーツを使って何かを企んでいるんだろう、だが、オーパーツだけでは意味がない、オーパーツの力を覚醒させるには、スバル、ウォーロック、お前達が必要な訳だ」

ルーカスは一人に真剣な眼差しで言った、まるで、これからはお前達を狙つてくる連中がいるぞと言つていいようだつた

スバルはその事を聞いて、ゴクリと唾を飲んだ

「今までどうりに戦つて勝てる相手じゃない……もし、勝てないと悟つたら、その時は全力で逃げてくれ、頼んだぞ」

二人とも了承したようだ、コクリと頷いた

しかし、そこでスバルが一つ質問をする

「でも、どうして都合よくここに落ちることが出来たんですか？落ちる場所は敵が決めるから、あつちにとつて有利な所に指定できると思うんですけど……」

理系のおかげか、相変わらずスバルは洞察力がいい

「ふつ、そんなのあいつらのサーバーに入出してちょーっと細工すればいいだけの事だ」

スバルの質問にジャッカーが答えた、なるほど、この男のコードネームがジャッカーという意味が分かる気がする

ルーカスが再び口を開く

「もういいかな？」

「はい」

「よし、じゃあ今日はゆっくりしてくれ、明日に備えてね、部屋に案内しよう」

ルーカスが先頭に立つて歩きだした

この時、スバルは胃の部分にムカムカを感じていた

## 第1-2話、日常とは離れた朝（前書き）

最近、受験勉強が忙しいので、更新速度がとても遅いです。すいません。高校受験が終わったら、もっと早く更新できると思います。それと、PKM、あれは、正しい表記では、KPMでした。間違えて、すいません。

## 第1-2話、日常とは離れた朝

「」のアジトはずっと学校の廊下をずっとのばしたような物でその通路の横に幾つかの小部屋がある事で成り立っている。

ルーカスが先頭に立ち部屋を案内していた。

「右がスバルの部屋で、左がミソラの部屋ね」

扉はやけに不愛想で、ただ単に自動式のドアがついているだけだった。

「じゃあ、何があつたら呼んでくれ」

ルーカスはそつそつと、もと来た道を歩いていった。

「おやすみ、スバル君」

「うん、おやすみ」

簡単な挨拶をすますと、それぞれの部屋に入つていった。

スバルは部屋に入つてみると、病院で使われてそうな鉄製のベッドと、木でできた古机が置いてあった。上には電気が付けてあるが、電気なれば何も見えない状態だ。ここは海底なので窓なんて付いていない。そしてさらに、なんだか押し入れのようなくさいにおいがする。こんなにも鼻につくにおいがしていては夜に寝ることすらかなわない。全体的に、物置き部屋を無理矢理に寝室にした感じだ。

スバルはベッドに腰掛けると「ふう~」と一息ついた。そして再び部屋を見渡した。

何もない、異臭がしなくて、暗くなれば、閑静でとてもいい部屋なのに、とスバルは思った。

突然、ウォーロックがウイザードONになつて出てきた。彼の不器用で、乱暴な性格は、場の雰囲気を明るくする効果がある。まあ、そこがウォーロックのいいところなのだつ。

『なにしけてやがんだ？スバル』

相変わらず、彼は空気を読むことができない。だから、彼は訳の分からん質問ばかりしてくるのだ。

けれども、スバルはウォーロックと伊達に長い間、一緒に戦つてきた訳ではない。そういう、ウォーロックのがさつな性格は慣れっこだ

「だつて、今日疲れたじやん~」

考へてもみれば、今日はいろいろと忙しかつたはずだ。ウイルスの大群に襲われたり、車が燃えたり、謎の男によつて異世界に飛ばされたり、本当に、スバルにとつては忙しい一日だつた。

しかし、一日の反省も、ある事によつて遮られてしまう。突然、スバルはお腹の部分が痛くなり、横にならないとたまらないくらい、きつくなつた。

『オイ、スバル大丈夫か？』

「う、うん。大丈夫……もう寝よう

『そうしな . . . . .』

スバルは予め用意してあつた毛布を被り、静かに目を瞑つた。

ボスニア、某所

そこには、二人の屈強な男戦士と一人の可憐な女戦士がいた。部屋には大きな窓と、本棚、軍旗などがある。完全に将校の部屋だ。机にどつさりと貯まつた書類を除けばの話だが。

一人の男は立派な椅子に座つており、赤色のベレー帽に将校の着る軍服と、幾つもの勲章を下げている。

もう一人は、鋭い目つきに白い髪の男、以前、スバル達を異世界へ連れてきた張本人だ。

女の方は、赤い髪に割とルックスのいい顔、背は高く、スタイルがとてもいい、だが、可憐な見た目とは裏腹に、眼光がするどく、戦士としての覚悟が現れている。

いずれの者たちも年齢はそうとう若く、17～19歳くらいだ。普通なら学校にいって勉強している年齢である。

月明りに照らされながら、レッドベレーの男が銀髪の男に語りかけ

た。

「やはり、まだ見つかっていないようだな」

銀髪の男が将校に対しての敬意を振るわず、荒い言葉で答える。

「ああ、じつに連れてくる際に思わぬ邪魔が入った、おかげで、座標ポイントが狂つたよ。」

「ルーカスの仕業だな」

「そうだろうな、あん畜生、現れでは消え、現れでは消え、まるでルパン三世だ」

当然だ、外に出ることなんて全くないのだから。

「はつはつはつ、まあ、とにかく速めにあいつらのアジトは見つけ出すべきだな」

「いや、その必要はない。俺に考えがある。」

それを聞くとベレー帽の男はニヤリとした。

「期待してるぞ、ロゼット」

ロゼットと呼ばれた銀髪の男は「任せろー」という顔をして部屋を出て行つた。

「ジン、これ今日の分の書類とテキストね」

スタイルのいい女が机の上に書類をどさつと置くとハンターVGを取り出して、テキストデータを送った

「はあああ・・・」

ジンと呼ばれたベレー帽の男はため息を吐いた。

女はそれが終わると、ロゼットの後を追っていた。

「たく、女とは分からん生き物だ」

彼の唯一苦手な物、それは女性だ。

所変わつてその翌朝・・・

ミソラとルーカスとジャッカーの三人は厨房で朝食を摂っていた。朝食とは言つても、あまり豪華な物ではない。何かの肉を焼いただけのものだ。理由は、いつもKPMに見つからないように隠れて暮らしているため、町に買い出しに行くのは月に一回くらい、その時に日常必需品や食糧を買い込むのだが、その食糧が昨日で底をつてしまい、早朝、町に買い出しに行つたルーカスがKPMの哨戒兵に見つかってしまつて、命からがら逃げてきたのだ。おかげで何も買つてきてない、だから、何かの肉を焼いたのが朝食なのだ。

ルーカスとジャッカーは、旧軍人なのもあつて食べるペースが速いが、ミソラも同じように体力を使う仕事、歌手をやつてるので、二人に負けないくらいのペースで食べ終えた。

ミソラが何かを焼いた肉についてルーカスに質問した。

「「」の肉おいしいですね、何を焼いたんですか？」

「知りたいか？」

ルーカスがあまり喋りたくないなさそうな顔をした

「蛇だ . . . . .」

「へ、蛇！――――――！」

ミソラにとつて、それは初めての経験だった。まず、蛇を焼いて食べる小学生なんてそうそういない。いたら一度会つてみたい。蛇の味がいいとは到底おもえないが、何事も見た目で判断してはいけないのだ。

「ジャングル戦の時なんか食糧がないからな、蛇や蛙、魚なんかをとつて食べるんだ。でも焼いたりはしないよ。敵に居場所を教えるようなものだからね。ジャングルにはビルやマムシ、マラリア菌をもつてているハマダラ蚊なんかの危険な虫も住んでる、だから、それらの対処法を身につけるために訓練中はサバイバルナイフ一本と、ほんの少しの携帯食をもつて、ジャングルの中で訓練するんだ。あの頃はかなりハードだった、そつだろ、ジャッカー」

今まで会話に参加していなかつた無口のジャッカーにルーカスが話しかけた。

「ああ、そうどうだつた。ジャングルなんて一度と行きたくないな」

いつも冷静で真面目、そのくせ、強がりな面を持つジャッカーがそういったのだ。ジャングルが人間にとつてどれだけ過酷な場所かが想像できる。ミソラはジャングルに対して、少し怖さを感じた。

「いやー、あの時は本当に驚いたよ。顔をあげたら、目の前にワニがいたんだからさ」

ルーカスとジャッカーは昔話で盛り上がっているが、ミソラは二人の話を聞いていて、だんだん、背中に悪寒を感じてきた。一人がどのような所に行ってきたのかが、目に映るようだ。

ミソラの顔がどんどん強張つてきているのを察して、ハープがハンターから出てきた。

『ちょっと一人とも、ミソラが怖がってるじゃない！いい加減にしてよ！』

だが、屈強な軍人である彼らにはハープの小さな声は聞こえず、二人でわいわいとやっている。

ハープはため息をついた。

『はあー・・・』

「いいよハープ、私は大丈夫だから・・・」

いろいろやっている内にスバルが部屋に入ってきた。顔には汗が滲みでていて、ひどく痛そうに左のわき腹を押さえている。

「あ、スバルくん、おは . . . 」

スバルはその場に倒れこんだ。倒れこむと、左の脇腹を押さえながら、じたばたとして、喘ぎ声を上げている。

「ちょ、スバルくん？」

「まづい、急性盲腸炎か？」

さつきまで大笑いしていたルーカスが急に真剣な顔になつてスバルに近寄つた

## 第13話、ボスニア

「鎮痛剤を打つか . . . 」

ジャッカーが注射器と鎮痛剤を持ってきた。彼の表情は、なぜか明るい。

「いや、いい、俺がやる」

ルーカスが慌てた表情で、ジャッカーの方を向いた。彼は今にもスバルの綺麗な肌に注射の針を突き刺そうとしていた。やけに楽しそうだ。まさかとは思うが彼は人に注射をしたがるタイプなのだろうか。いや

そのような事はないと信じたい。

ルーカスがジャッカーから注射器を取り上げると、さっさとスバルの左腕に針を刺した。

ジャッカーはルーカスに注射器をとれた事により、非常に怪訝な顔になつた。

「このまま放つておく訳にもいかんな . . . ジャッカー、何か案はあるか？」

怪訝そうな顔をしたままジャッカーはルーカスの問いに答える。

「この状態だと手術が必要だろ？ . . . 仕方ない、市外の病院に連れていくか . . . 」

「だが、この国で流行つてゐる感染症で病院が満員なんぢゃないのか  
？受け入れる余裕があるとは到底思えんが・・・」

この国の政府は半ば転覆しかかつてゐる。それによつて感染症の拡大を食い止めることができず、国全体が、感染症にかかる状態なのだ。そのために、援助としてＫＰＭが派遣されたのだが、逆に彼らによつて国が都合の良いように利用されているのだ。簡単に言うなら、悲惨な状態という事だ。

「大丈夫だ！」

ジャッカーが根拠のない安心を述べる。当然ながら、スバル以外の全員が反論する。

まず、ミソラ

「大丈夫なはずないでしょ！スバル君苦しんでるんですよ、変な事言わないでください！」

ハープ

『ミソラの言つ通りよ！スバル君に万が一の事があつたらどうするの！』

ウォーロック

『スバルは俺の大事な相棒なんだ！お前らでなんとかできないのか！』

ルーカス

「全員に同じ……」

ジャッカーが、「まあまあ、落ち着け」という動作をすると、とても余裕な表情をした。

「俺に知り合いがいるんだ、行けば分かる」

反論側の代表で、ルーカスがものを言つ。氣のせいだろうか。ルーカスとジャッカーの立場が逆転している氣がする。

「場所は分かるのか？」

「ちつとばかし遠いが、道は分かる。山の中にある小さな病院だ」  
反論側は納得しきれてない表情だが、他にあてもないので、ジャッカーの言う事に従つた。

「電波変換なんてしたら敵に見つかってしまうから、車での移動となる。厳しいかもしぬないが、敵に見つかってしまうよりかはましだ」

電波変換を行うと、周波数が特定され、一発で敵に見つかってしまう。この世界にもノイズウェーブというものもあるが、ＫＰＭの管理下にあるため使用はできない。よって、車での移動が一番妥当なのだ。

彼らはスバルを運びながら、地上へと向かつていった。

薄暗く、閑散とした地下通路を抜けると、昨日とは違つて青空が広がつていた。太陽はそんなに高くはないが、波は穏やかで、海水浴にでも来た気分だ。

砂浜を抜けて、防砂林の所に一台のジープが置いてあった。険しい地形の多いこの国には丁度いいのだ。

「少し揺れるからきついかもしけないが、病院に行けばすぐ治して貰える。気にするな」

ルーカスが後部座席にスバルを寝かせると、心配そうな顔をしていたスバルを励ました。

「私が連いているから大丈夫だよ

ミソラもスバルを励ます。スバルの頬が少し赤くなつた。

「よし、出すぞ！」

ジャッカーの合図で車が動きだした。運転しているのはルーカスで、その隣にジャッカーが座つている。

後ろにはスバルとミソラが座つている。

スバルの頭はミソラの膝のうえだ。つまり膝枕だ。スバルは鎮痛剤のせいか眠くなつたようで、瞼を閉じると寝入つてしまつた。

ミソラはスバルの頭を撫でながら、前の一人に気付かれないように、

彼の頬に軽くキスした。

『ん？ミソラ、今何かしなかつ・・・グフツ！』

ウォーロックがミソラの妙な行動に反応したが、ハープによつて気絶させられた。彼の鈍感さには呆れる。

ハープの強力なタックルで車が大きく揺れ、驚いた前の二人が後ろを向いた。

「おい、どうかしたのか？」

「大丈夫です！」

ルーカスがミソラに安否を問うが、先程の事を知られたくないないので、何も起こらなかつたという素振りをしたのだ。思春期なら誰でもあることだ。

車が防砂林の中を抜けると、やたらと寂しげな街並みがあつた。人っ子一人いない、中小くらい工場が並んでいて、道の真ん中に鉄パイプやドラム缶などが転がつていて。昭和の下町を酷く悲惨な状態にしたと言つてもいいくらいだ。左の方を見上げると、火力発電に使う丸いタンクや、石油コンビナートが見えた

この国は、周辺諸国に比べ電波技術がそれ程までに高くなく、石油燃料に頼らないとやつていけないぐらいだつたのだ。現在でも行われているようだが、国が復興したら必要なくなるであろう。いずれ、彼らは職を失う事になるということだ。

「ああつ！－！」

突然、ルーカスが大きな声を上げて車を止めた。

「どうかしたんですか？」

ミソラがルーカスに車を止めたことについて聞く

「先程、この国に感染症が蔓延している事をいつたよね？」

「はい・・・」

「予防薬を打つとかないとね」

この国に広まっている感染症というのは、エイズのように体の免疫が低下する病気である。エイズは患者の血液をあびるか性交でしか感染しないが、この感染症は空気感染するため極めて危険なのである。

予防薬は手に入りやすいのだが、注射器のほうが逆に手に入りにくく、限られた者でしか予防する事はできない。ルーカスがどうのようにして予防薬を手に入れたのかは分からぬが、できる限りの対策はしておいた方がいい。感染症にかかるないようにするための唯一の方法だ。

ミソラは自分の左の腕を捲り上げルーカスに出した。

「つーーー」

鋭敏な針がミソラの肌は静かに貫いた。注射といいのは、いくつになつても痛いものである。

注射針を抜くと赤い健康な血液がでてきた。そいつをガーゼで拭き

取り、絆創膏を付けた。

使い終わった注射器を一度と使う事はない。理由は、他の病気に感染する危険があるからだ。せっかく予防接種をしたのに、別の病気につかってしまっては元も子もない。

スバルにも同じような操作を施した。普通、寝ている途中に腕に痛みが走つたら、誰だつて飛び起きるはずだが、スバルは未だに鎮痛剤の副作用が続いているのか、ピクリとも動かない。ピクリともしないとは言つても、別に死んでいる訳ではない。単に寝ているだけだ。

それらのすべてを終えると車は再び走り出した。

サイドガラスから見える車外の光景はとても良いようには思えない。中心部に近付くのに伴つて、工場や住宅などは、どんどん酷い有り様になっていく。終いには、かつて栄えていたのだろう中心街はボロボロの「ゴーストタウン」になっていた。

「……………酷い」

ミソラは心の底から死んだ町を嘆いた。ルーカスはそれを聞いて、少し表情を曇らせた。

「IJの町はな……見捨てられたんだよ……国ね」

「そんな……なんで……なんですか？」

常識的に考えて、政府が倒れかけの町を見捨てるなんて有り得ない話である。

ルーカスは苦惱に満ち溢れた顔でハンドルを「バン！！」と叩いた。

「ijiの町はijiの国一番の工業が進んだ町だった。すべてが終わるまではな！！」

ルーカスは、自分のやっている事の無力感から相当に苛立つている。

「国は、国民達を捨てて、自分達だけ助かるつとしたんだ。結果、こんな大混乱時代を招いたんだ！」

国政は、国民あつての政治だ。自分達中心の政治など、国政ではないのだ。これが、今の国のかたちの言葉だ。かつてのフランスの女王であるマリー・アントワネットは自分達中心の國づくりをしたために、市民達の反感を買い、ギロチン台に送られたのだ。この場合も同じだ。国を守ると言つて置きながら、言葉とは矛盾した事を行つた。それによつて市民が蜂起して、国家は転覆した。人類の哀れな歴史の繰り返しだ。

ルーカスが先程よりいかは少し落ち着いたように話しだした。

「ijiの町の地方議会は生活が苦しくなつた市民を助けるため政府に助けを求めた。政府は援助すると言つたが、裏では国外逃亡の準備を進めていた。それが国民達にばれると、連中は白を切つた。それによつて市民が武装蜂起して国を倒したが、その後の政策がうまくいかず、今、このように成つてゐる訳だが、もともとは國のせいだ。おかげでこんなになつてゐる訳だか……」

「おー！」

突然、目の前に服がボロボロで瘦せこけた老爺が飛び出してきた。

老爺は倒れこむと、呻き声を上げると  
その場に倒れこんだ。ピクリとも動かない。どうやら死んだようだ。

「 . . . . . これが國の正体だ！！」

ルーカスはミソラに言い聞かせるより、声を上げた。

老爺の遺体を轢かないように避けてその場を通り、車は先を急いだ。  
病院は山の中にある。

## 第1-3話、ボスアーニア（後書き）

来週に持ち越します。すいません。  
それと、感想とか評価とか書いてくれると嬉しいです。  
これから参考にしたいと思いますので。

車は視界が悪く、道路がはつきりしてない、山道を走っていた。

とても、人間が素っ裸で入れるような所ではないが、熱帯地方に存在するジャングルかと言うと、そうでもない。車が走っている道とは外れたところに、折れ曲がった道路標識があつた。大きな木々が立ち並んでいるこの森に、それはポツンと佇んでいた。木を比で現わすと3くらいで、道路標識は1、つまり、3:1と書つたところだ。

今まで書いてきたことを噛み砕いて言つならば、ものすごい数の樹木が生い茂つていて、昔は道路が整備されていたのだろうが、今はその後片もなく、人間が一度そこに迷い込むと、一度と出られなくなってしまう樹海を走っているという事だ。日本にある富士山の麓の樹海を想像して貰えると分かりやすい。

しばらく薄暗い山道を走つていると、やつと出口が見えてきた。

薄暗い森の中を抜けると、規模がかなり大きめの住宅地が広がっていた。

ルーカスによると、麓にある工場町と、山を一つ越えた所にある住宅地、その先にある中央の市街地で構成されていて、この都市の名前をサンビア市といいうらしい。ボスニアは国の半分が山になつていて、大きい町といつたら、このサンビア市と、中央市街地をさらには抜けた所ぐらいだらう。しかも、サンビア市はこの国の首都だ。市街地を抜けると大きな渓谷があつて、更にそこを抜けて熱帯雲霧林を通つて行くと、もう一つの工場町に出るらしい。そこには貿易港もあり、今もなお、活氣の溢れる町だという。

住宅地に入ると、やつと人の面影が見えてきた。流石は住宅地、子供から老人まで実に様々な年齢の人々が住んでいる。先つきの潰れた町とは大違ひだ。

人間は、人の数が多ければ多い程、安心するという妙な精神がある。それは国民的歌手である響ミソラでも例外ではない。

「……こには先つきの町とは全然違いますね」

今まで黙りこくれていたミソラがルーカスに話しかけた。

「まあね。こいら一帯は奴ら（ＫＰＭ）の管轄下にあるから……」

「ＫＰＭって、一体何者なんですかね……」

運転で忙しいルーカスに代わってジャッカーが答える。

「それが解らないから今こうやって調べてるんだ」

ジャッカーがハンターV-Gをミソラに見せた。ハンターのエアディスプレイには細々しい情報が記されてあった。

「こいつはＫＰＭのパトロール隊のローテーションだ。盗むにはベラボウな時間が掛つたがな」

相変わらずどんな趣味をしているんだとルーカス以外の全員が内心で突っ込んだ。

「さつ！そろそろだぜ」

住宅地の中央部を抜けて、裏山に入るか、入らないかぐらいの所に規模の小さな病院があった。

「うーんでいいんだろ？」

ルーカスがジャッカーに聞いた。ジャッカーはエアディスプレイを操作しながら答えた。

「ああ、ここで問題ない……」

車を病院の浦口に止めた。浦口には医療廃棄物や、その他の「ゴミ」が幾つかあつた。いつもゴミ収集車が回つてくるのである。先程、ジャッカーが見せてくれた警備隊のローテーションの表と同じよう、に収集車が回つてくる。取りが記された表が張り付けてあった。

「掛け合つてこよつ……」

ジャッカーが浦口のドアから入つて行つた。

ジャッカーが浦口に入つて行つてから数分間の沈黙が続いた。スバルの寝息がやけに大きく聞こえる。

しかし、ジャッカーは、物の一分も掛らない内に浦口から出てきた。

「中に入つていいぞ . . .

まるで、ジャッカーが病院の主になつたような言い方をした。

中は、病院にしては薄暗い。浦口という事も関係しているのかもしれないが . . .

通路は狭く、一人で通れるのが一杯一杯だ。

いくらか奥にすすんで行くと、ベンチに腰掛けた一人の中年程度の男が居た。恐らく患者であろう。二人とも検査服を着用している。

奥の方から、もう一人の中年の中年が現れた。髪は白髪で、メガネをかけているが、その眼差しは鋭く、医を貫き通す。というような信念を持つてそうな感じだ。

メガネの男がジャッカーに語りかけた。

「急患つてのはそいつか？」

メガネ男はミソラにお姫様抱っこされているスバルを首で指した。

「ああ、 そうだが . . . 」

メガネ男はしばらく腕組みすると、 再び口を開いた。

「手術室まで来て貰おうか」

男が先頭に立つて道を先導する。 行きかけの駄菓では、 ナースの人としてすれ違わなかつた。

そこは、 まるで野戦病院のような所だというと大げさになるが、 とにかく、 暗いという事だけでも分かつて貰えるとよい。

「バトンタッチだ . . . 」

メガネ男がミソラに言つた。 スバルを渡せと言つことだらう。

ミソラは渋々、 抱えていたスバルをメガネ男に引き渡した。

「ここに待つといつもらおうか . . . 」

メガネ男はスバルを引き取ると、 その場に居た全員に言つた。

メガネ男が手術室に入つて行くと、 初めにルー・カスが口を開いた。

「おい、 ホントに信用に足る奴なんだろ? な? 」

それに答えるべく、ジャッカーが口を開いた。

「あんな奴だが腕は確かだ」

「キヤ————！」

ジャッカーがそのセリフを言った瞬間に表から悲鳴が聞こえた。

「　　？？？」

そこに居た者達は全員が疑問符を浮かべた。

## 第1-4話、病院（後書き）

お久しぶりです。

次回の更新予定は未定です。

なるべく早いうちに更新したいと思っています。

## 第15話、クレイジー

先程の奇声の根源を調べるため、ルーカスとミソラは待合室を出た。ジャッカーは居残りである。

ここに来るまでの通りは暗くて狭い、一回通つただけで妬けを起しそうなくらいだ。

本来なら、こんな獣道を通るのは御免被るが、状況も状況なので仕方がない。

この病院は裏口からの通路では、正面玄関に行くことはできない。よつて、もと来た通路を通らなければならないのだ。

「はあ～、ここホントに病院なのかよ」

あまりの道の狭さにルーカスが絶句した。

「でも、仕様がないですよ。ここでしか診て貰えないんだから」

ミソラが宥めるようにルーカスに言った。

「そりゃそうだけど・・・」

ルーカスの、持ち前の明るさがすっ飛んでいる。いつもに比べて元気がない。

ジャッカーが言うには、ルーカスは病院が苦手らしい。理由はジャッカーにも分からぬいそうだ。

曲がつては進み、積み上げられた段ボールを避けながら、電灯は付い

ているのに電気はついていない廊下を一人はひたすら歩いた。

接触の悪い電灯がビカビカと音をたてている。

「そういえば、俺、顔が知れ渡つてんだよねエ～」

ルーカスは、そう発言すると、変装用のマスクとグラサンをポケットから取り出した。

それらを着用した彼は、まるで指名手配犯のようだ。というか、彼は一様、指名手配犯だ。

「 . . . . . 」

ミソラは、その姿を見て言葉も出なかつた。ルーカスの事を知らない人が見たら、完全に挽くだろつ。

二人は浦口のドアを開け外に出た。

途端に、太陽の光が目に入つてきたため、思わず、ミソラは目を瞑つた。

ルーカスはグラサンを掛けているため、どうともない様子だ。

そうしながらも、一人は、足を進めた。

丁度そのころ . . .

「 Z Z Z Z . . .」

スバルの手術が終わるまで待っていたジャッカーは、寝息をたてて眠っていた。

そして、ジャッカーの前には、見たこともない男が立っていた。

場所は、病院の正面玄関 . . .

「な、何だと！？」

ルーカスは、驚きの表情を隠しきれない。ミソラも「何！？あの人！？」といった様子だ。

「仕方ない . . .」

ルーカスのサングラスが彼自身の吐息によって曇る。先程から、二人が驚愕しているのは、病院の待合室で、片手に包丁を持ち、暴れ

狂う男が居たからだ。

男は、仕切りに、「殺されるう——！」だの、「死ぬのは嫌だ——！」だの、訳も分からん言葉は発しながら、暴れている。

また、男の姿は、ボロ衣に、サンダル、ボサボサの頭に充血した眼は、ホームレスより酷い有り様だ。

そして、二人の驚いている点は、もう一つあった。それは、病院の正面は、まともで、中の待合室はとても綺麗だったからだ。あんな、獣道を歩いて来たのだから、無理もないだろう。

それは、置いといて . . .

ルーカスは中に入つて行つた。クレイジ な男を止めるつもりだろう。

中に居た者達は、かなり驚いた。当然だろう。暴れ狂う男と、グラサンかけたマスクマンが出て来たら、誰だつてビックリする。

男の包丁が、ルーカスに向けられる。しかし、ルーカスは、それを、見事にかわし、男の腹部に思いつきパンチを入れた。

男は、その衝撃で、その場に倒れこみ、氣絶した。周りからは、感謝の気持ちや、褒める気持ちを現わす喝采がわいた。それを見ていたミソラも同じように、パチパチと両手を何回も合わせていた。

手術室にて . . .

スバルを手術してくれた眼鏡の中年医師が、無事に術式を終え、手術室前の待合室に向かつた。

自動ドアの開いた先で彼が見たのは、寝息をたててているジャッカーの姿だった。

「良くこんな時に寝れるな . . . ん！？」

眼鏡の医師が、背後に誰かいるのに気が付き、後ろを振り向こうとするが、その刹那、鉄パイプか何かで後頭部を殴られ、医師は氣を失つてしまつた。

医師を殴つた男は、彼の体を抱え、どこかえ消えていった。

待合室に戻ったルーカスとミソラは、居眠りをしていたジャッカーに気が付いた。

「おい、ジャッカー起きろ」

ルーカスの少し気合のない声が病室に響き渡る。やはり、彼は病院が苦手なようだ。

「ンンン…んっ！？」ルーカスビックした？お前、病院苦手じやなかつたのか？

何分か経った後にジャッカーがようやく目を覚ました。だが、ルーカスはその事よりも気なついている事があった。

「おい、これ麻酔針だよな」

ルーカスが、ふるえる手で鋭敏な針をジャッカーに見せせる。

「そりだが…それがどうした？」

ジャッカーは不思議そうな目でルーカスを見つめる。

「お前の首の所に刺さつてたんだよ」

「何…？どう言つ？」とだつまり、俺はその麻酔針のせいで眠らされただことか？

「俺に聞くよ。お前だから知っていると思つてさ」

そう言つてゐるルーカスの目は泣き眼だ。ジャッカーに怒鳴られたからではない。長時間病院の中に居たので、彼の精神的スタミナがもう、耐えきれなくなつてゐるのだ。

突然、後ろの方からドタドタと慌ただしい足音が聞こえた。

三人が後ろを振り向くと、息せきつて走つてくるナースの姿が見えた。

その途端、ルーカスは倒れそうになる。どうやら彼の病院嫌いの原因は、ナースにあるようだ。

豊富な胸を踊らしながら近づいてくるナースを見ると、ルーカスは氣を失つてしまつた。彼にとって、ナースはトラウマだつたようだ。

「星河スバル様のおつれ様ですね。ブラック先生を見てませんか？」

まだ若いナースが、息を切らして声を掛けてきた。

「ブラック先生？」

なにやら妙な名前の医師にミソラは首をかしげる。

「ブラック先生ってのは、ここで一番の天才外科医だ。さつきスバルを手術したのもその先生だ」

ジャッカーが、ルーカスの顔を叩きながらミソラの疑問に答える。

「いや、知らないけど……どうして？」

突然、ルーカスが立ちあがりナースの質問に答える。そこにいた皆は内心、（回復はや！）と突つ込んだ。

「先生の姿が見えなくて、星河様が目を覚ましたたと、うのに……」

「えっ！？スバル君、目を覚ましたんですか？」

ミソラが驚いた声でナースに問う。

「あっ！ひょっとして彼女様ですか？部屋に案内しますのでお一人で……ウフフフ！」

それを聞いた途端、ミソラは顔を赤くした。何やら良からぬ事を考えてそうなナースだ。

「行つてやれ。ミソラ」

「はい！」

ジャッカーがミソラに笑みを混ぜながら言つ。ルーカスはと、うと、また氣絶してしまつた。ジャッカーは呆れて無視している。

「見つけたら教えてくださいね！」

そう言つて、ナースと共に何処かへ行つてしまつた。

「なあ、可笑しいと思わないかジャッカー」

「ああ、俺の予想では、恐らく医師はさらわれたと思つ」

回復の早いルーカスの質問に驚く間もなくジャッカーは答えた。何故、彼がそのような推測をたてたか？それは、彼のポケットの中に一枚のメモ用紙が入つていた。

メモ用紙には、大きな文字でこう書かれたあつた。

【よこせ】

この文字だけで誰だつて分かる。彼は何者かによつて誘拐され、身代金をよこせという事であることを．．．さつき、この事を持ち出さなかつたのは事を大きくすることを避けるためだ。警察やＫＰＭに通報するなど、彼らからしてみれば自殺そのもだ。

「お前が寝ていた時間から考えて犯人は近くに居るはずだ」

ルーカスがジャッカーの推測をもとに犯人の居場所を推理する。

「身代金をよこせと言うくらいなのだから、潰れた町、いや、潰された町の住民だろうな」

「市街地はまずないだろ？、犯人には目立つすぎる。となると、犯

人が居る場所はあながち決まつてくるな

「「秘密の地下道」」

病院の浦口に一人の男がいた。ルーカスとジャッカーだ。二人は自分  
のハンターを見ている。

「おい、まだか？まだ終わらないのか！」

ルーカスがジャッカーに怒鳴り声に近い声で言う。病院の発作は治ったようだ。

ジャッカーは怒鳴られても平然とハンターを眺めている。

「もう少しでダウンロードが終了する。ロードが遅いのは我慢してくれないか。これ試作だから」「

いつでもどこでもどんな状態でも彼は冷静さを欠かさない。ルーカスはない一面を彼は持つている。

「試作だからっていくらなんでも遅すぎやしないか？もう一時間経つぞ。犯人に逃げれてしまう」

「見つかるよりかはマシだろ?」

突っ込みのネタが無くなってしまったのかルー・カスは黙りこくつた。先刻から彼らは何の話をしているのかというと新たなPGMの話だ。そう、スバル達の装着しているのと同じような物だ。試作はあるが十分な機能を発揮するらしい。名前は「ステルスPGM」だそう

だ。何でも、電波体時に発せられる周波数が敵に探知されたりされなかつたり . . .

「よし、終わりだ！早速、電波変換しよう！――」

ジャッカーがルーカスに目配せしながら言つ。

「なんか、電波変換すんの久しぶりだな」

「ああ . . . 最後に電波変換したのは、俺達の最後の任務の時だな . . .」

突然、二人の空気が重くなつた。ジャッカーは言つてはいけない事、つまり、禁句を発言してしまつたようだ。ちなみに、二人は電波変換が可能だ。素となるウィザードも持つていて。

「ま、まあ . . . は、早くしないと逃げられちまうぞ」

ルーカスは気を取り直したようだ。

「あ、ああ . . .」

ジャッカーも何とか気を取り直したようだ。

「さあ、行くぞ！――」

「「電波変換！！」」

同時刻、ボスアニア某所

「 . . . . . 」

ジンは今にも雨が降り出しそうな空を部屋の窓を通して眺めている。彼の右手には懐中時計が握られている。時計の中には綺麗な女人の写真が貼つてある。女が苦手のはずなのに奇妙なものだ。

「まだ悔んでんの？」

突然、後ろから声をかけられ驚く。振り返ると、昨日、書類をジンに押し付けた女が立っていた。

「 . . . ノックくらいしろ . . . ハリー . . . 」

女の名前は、エリーゼ・ヒリダヌスといつ。愛称でエリーと呼ぶのだろう。

「あんた . . . 泣いてたの？」

ヒリーがジンに向かつて冷やかし込みの言葉を送る。

ジンの顔は急に赤くなる。

「な、泣いてなんかいない！」

「そんなに恥ずかしがらなくともいいんじゃない？私がお姉さん代わりで抱いてあげるから

「同じ年の奴に言われたくない！……お前、俺の性格知つて言つてんだろ！」

「ちよつとは落ち着いた？」

ジンはますます顔を赤くする。知らぬ間に慰められていた事を恥じたのだ。

「べ、別に……それに、悔むだろ……悔み続けなければいけないだろ！」

「あんたが世界を滅ぼした訳じやないでしょ？」

「俺があの時、あのポジションに居ながら DESTROYERデストロイヤーの発射を止められなかつたのは事実だ……

「世界が滅んだのはあんたの責任じやない。あんたがこれからやんなきやいけないのは、この国を一刻も早く復旧せしむことじやない？違つ？」

「そうだ……その通りだ！」

「やつと、元気を取り戻したみたいね。じゃ、これお願ひ！」

エリーは片方の手に持っていた小包を机に置いた。

「ま、またか . . .」

「これがあんたの仕事でしょ？」

### ボスアーライフライン地下道

ここの中を一台のトラックが走っている。トラックを運転しているのは20代後半の男だ。表情は少し焦っているように見える。

その男の隣には行方不明になっていたブラック医師が座っている。気を失っているようだ。

そのトラックの後を追うようにして、ルーカスとジャッカーが走っている。今、彼らは電波体だ。並みの人間には敵わぬスピードでトラックを追い詰めていく。

電波体一人のボディはロックマンと同じ青色だ。バイザーの色は黒く、全体的に鋭利を思わせる体つきだ。今の彼らはイグザム・グラージャ、世界的にも使われていた軍用ウイザード「イグザム」と兵士が電波変換することで「イグザム・グラージャ」となる。武装は軍用バトルカードを主体にして戦う。通常の装備は「レグザガン」と呼ばれるライフルを使用する。また、人間の状態の時に使う武器も使用可能なのだ。KPMがイグザムを造り出し、軍用目的とした世界初のバトルウェイザードである。

トラックとの距離を十分に詰め、ルーカスはバトルカード、スコープガンを用いて、後ろの「タイヤ」一つをパンクさせる。見事な狙い撃ちだ。

トンネルの壁にぶつかり、トラックは身動きが取れない状態になる。その中から医師を抱え男が出てくる。

男は逃げようとがルーカスのスコープガンに足元を狙い撃ちされ恐怖のあまり足がすくんだのか、医師を離しその場に倒れ込む。

「動くな！」

ジャッカーがレグザガンを男に向かながら言った。

男は立ち上がり手を挙げる。

「手に持っている手榴弾も捨てろ！」

男は手榴弾を手に隠し持っていた。諦めて投げ捨てるとする振りをし、ピンを抜いて彼らに投げつけたが、あまりにも高く上がり過

ぎてしまつ。

そこをすかさずルーカスがスコープガンで狙い撃ち、空中で爆発してしまう。彼にはスナイパーの素質があるようだ。

「無駄な抵抗はせんことだな・・・それに、さつきの投げ方、お前まへ素人そふとだろ?」

男は図星を突かれた表情をした。ジャッカーの予想は的中したようだ。

「何故誘拐したのか、その理由を聞かせて貰おうか・・・正直に言つたほうがいいぞ。その方が身のためだ」

ジャッカーの長い尋問の始まりだ。

## 第17話、追跡（後書き）

久々に更新しました。もう一方のほうばかり更新してたので、次からはこっちをメインにしていきたいです。もちろん完結はさせます。クライマックスまでのだいたいの筋はかんがえてるので。感想おまちしております。感想かいてねえ

## 第1-8話、真相そして…

男は観念したようにその場に土下座した。それを見たルーカスとジャッカーは驚いた表情をする。一人とも赤い血を持つ人間だ。土下座状態の男に銃を向けるような趣味は持ちえていない。

「申し訳ないです。私の妹が近年流行っている感染症に罹り、苦しい、苦しいと言っているので思わずとんでもない事をしてしまいました。お金もないし、職もない。それゆえあります。どうか申し訳ない。本当に申し訳ない」

男は拳を強く握りしめ、唇を噛みしめ、今にも泣き出しそうだ。そんな彼に一人は話しかける言葉が思いつかなかつた。

「そんな事だらうと思つた・・・」

今まで氣を失つていたブラック医師が、話に割り込んできた。

「おい、大丈夫なのか？」

ジャッカーが医師を心配したように言つが、彼はジャッカーの問いかけを無視した。体は問題ないという証拠だらう。

「で、でもあなたは・・・」

男が弱々しく喋る。顔つきを見ても分かるが、少し弱気な性格だ。しかし、自分の妹を苦痛から救つてあげたいという意思は本物だ。

「自分で言つのも何だが、俺は診察するだけでベラボウな金を持つ

ていく腐れた奴じゃない。ブラック医師ってのは、俺の風貌が……まあ、それは置いといて、あだ名だからな！漫画と勘違いしないでくれ

それを聞いて、男は安心したような表情をした。

「さひ、俺を呼んだってことは患者がいるんだり<sup>ハジハ</sup>、そこに連れて行つてくれないか？」

男は、ボロボロに泣きだした。彼を浚つた傲慢な自分を許し、妹を救つてくれるというのだから男にとつてこれ以上に嬉しいことはないだろう。

医師と男は一人で並んで歩きながらトンネルの奥に消えていった。

「一件落着だな！」

ルーカスが、はりきつた声でジャッカーに言つ。

「そうだな。一時はどうなるかと思つたが……そういうえば、俺達何か忘れていないか？」

「ああー、そうだよー！確かに、ナースが言つてた『先生を見つけたら連れ戻せ！』って」

「いや、少し違うと思つんだが……」

「呼び戻した方が良くないか？」

「問題ないだろ？ そのうち帰つてくるわ

ルーカスは、少し考えた後、結論を出した。

「戻ろうー・彼らが待つていてる」

「ああー！」

同時刻、ボスアニア某所

何処の地下かは分からぬが研究室とその隣に独房がある。房の中には、赤い瞳を持ち、ボサボサ頭の銀髪の少年が閉じ込められている。

研究室の中で誰かが話し込んでいるのが聞き取れる。

「どうだ、あの少年の様子は？」

スラリと背の高い男が中年程度の白衣の男に上目線で話しかける。研究室には一枚の写真が飾られていた。白衣の男が妻の横に立ち、彼女との間にできた三歳くらいの娘を抱っこしている写真だ。表情はとてもニコニコしている。

「駄目です。全く在り処を吐こうとしません。やはり、投薬では限

界があるのかと」

白衣の男の答こたえにスラリとした男は冷酷かつ、大胆に答こたえる。

「ならば肉体的に拷問するしかないだろ？」

白衣の男は少年を庇かばつよつにして話す。

「あ、相手は子供ですよー。何もそこままでしなくても……それに、この事が上の連中にはれたうどつするんです？」

だが、スラリとした男は依然と、意見を変えようとしなかった。

「お前そんなことで怯えているのか？相手が子供だろうが何だろうが、絶対に在り処を聞き出す！マーの少年なら在り処をしつているはずだからな」

「し、しかし……」

スラリとした男は、うろたえていた白衣の男を冷たい目でギロリと睨みつける。

「貴様ー、これ以上俺に逆らつたら命はないと思えー。お前の家族とも会えなくなるぞ」

白衣の男は怖くなつたのか逆らつのをやめた。

「や、やつですか……」

「できる限り投薬は続ける。壊れない程度にな」

「 . . . はい」

白衣の男はやり切れない表情で返答した。

「今から拷問してみるが、効果はあまり期待できそうにないな . . .

「

そう言ってスラリとした男は研究室を出て行った。

病院の受付窓口

「なんで連れ来なかつたんですか？」

二人はナースに怒られていた。先生が誘拐されたことを知つていながら黙つていたことと、その先生を連れて来なかつたことだ。

その光景は、一人の息子が母親から怒られているようにも見て取れる。

ルーカスが一生懸命言い訳をする。

「いや、だつてさ……なんか仲良さそうにしてたし、あの空気を壊すのはＫＹだし……」

ルーカスは自分の根性でなんとか立っている。そんなルーカスの言い訳をナースは受け入れなかつた。

「そんなの知らないわよ！私はあそこで連れてきてと言つたんだけど！麻薬中毒者が暴れ出したつて大変だつたのに！まさか、忘れていたとかないわよね！？」

ナースの口調がどんどん強くなつてきている。お見事に図星にはまり、二人はギクッとする。ちなみに、麻薬中毒者というのはルーカスが倒した狂人のことだ。

ジャッカーは無理矢理に話題を逸らそうとした。

「そ、それよりもスバルに会わせてくれないか？め、田を覚ましたんだろ！？」

「駄目！」

「なんで？」

「駄目つたら駄目！－－話を逸らしたといつ事は図星つことね？」

ナースの見事な洞察力に一人は冷や冷やするばかりであつた。

病室では . . .

四人でわいわいしていた。スバルが無事に手術を終えたことを、ミソラ、ウォーロック、ハープは喜んでいるのだ。

『いや～しかし治つてよかつたなスバル』

ウォーロックが豪快な笑い声を挙げながら言つ。

「うん、これでやつとこの小説の主人公に戻ることが出来たよ」

すまないスバル君！それはこの作者の能力が低いがためだ。勘弁してくれ。確かに、最近、ルーカスとジャックの描写が多くなりつつあった。というか、あの一人の描写しかできないものもあるのだが、だつてそうだろ！スバルの手術しているところの描写なんてハイレベルでできねえよ！

「そうですよ、私とスバル君のラブラブな描写とか書いてくださいよー」

「ハ、ミソラちゃん！？」

スバルは驚いたような声をだす。

「えつ！？いや、そのこれは……その……」

ミンラは真っ赤になりながら、どんどん語尾が弱まっていく。勿論、スバルの顔も太陽のように真っ赤だ。

『ひでえな作者！逃げやがった』

無茶言わないでくれ！俺がこの小説進めなかつたら誰が進めるんだ？えつ！なんか文句あんのか？こら！ああん！？

『現実とはまるで違うな』

ちよつと調子に乗つてみただけだ。まつ！それは置いといて……

そんな訳でスバルは三日後に無事、病院を退院した。その間、ルーカスとジャッカーは病院の掃除をさせられたそうだ。

## 第1-8話、真相そして…（後書き）

病院編はこれで終わりです。

次からやつと本番に入ります。毎度、毎度更新遅くてすいません。  
それでも、応援して下さる方々には感謝です。  
できれば…その…感想を書いて貰えるとうれしいです。  
感想、それは作者にとつて元気の源です。よろしくお願ひします。

「べどーーー！」

口、ロゼット！？

「感想、感想と何度も何度も」

いや、なんかすいません。ホントすいません。

## 第19話、ひと時の時間

雨が降っている浜辺に一人の女の姿が見えた。女は透明のレインコートで雨が直接体にあたるのを防いでいる。その女はずっと海の向こうを見ている。雨風で荒れた海をずっと見ている。彼女は海が好きなのだ。朝日が登るときの海、嵐で荒れた海、嵐が過ぎ去ったあとで、夕日が沈む時の海、星空が輝、波の音だけが聞こえる静かで、それゆえに、綺麗で美しい海。彼女はどの海も好きだ。彼女の初恋の相手こそ海なのだ。海こそがこの世のすべてである彼女は考えていた。我々、人類の他にも沢山の命を生み出した母なる海、それこそがこの世のすべてなのだと。その原則は、世界が崩壊した今でも変わらずに、彼女の心の中だけに残っている。

今度は、ぬかるんだ砂浜に腰かけ、低い視点から海を見た。

何一つ変わらない。

幾らどのように視点を変えて見ても海の美しさは変わらない。例え人間がこの星から消え去っても海は変わらず在り続けるのだ。

「最近、雨ばかりだね」

眠りかけていたスバルにミソラは唐突に話しかけた。いくらなんでも、ずっと海底施設の中にいたら気がめいってしまう。そこで、スバル、ミソラの二人は地上のボロ小屋で<sup>くつろ</sup>覓いでいた。

雨じゃなければ、快晴の海をおがむことができただろうが、赤道の国は雨季だの乾季だの関係なしに一年中雨が降る。

この前の快晴はマグレだろ？

仕方がないので、二人は小屋で過ごすことにしてたのだが、何もない古小屋に娯楽があるはずがない。

先日のこともあり、疲れが十分にとれていないスバルは、次第にうとうとなってしまったのだ。

声をかけられ、驚いたスバルは寝ぼけていて、なにやらボソボソ言った後、ぐつたりとなり寝息をたててしまう。

ミソラは、すうすうと気持ち良さそうに寝ているスバルの寝顔を見て、心臓の鼓動が高鳴り始める。

一人の男子に恋心をよせるといつのは、じつことなのだろ？

ミソラは、ずっとスバルの寝顔を見ているが、鼓動が速まるばかりだった。

数分経つてもスバルは目を覚まさなかった。ミソラの鼓動は高まる

ばかりだ。

ふと、彼女は思った。「寝ている間なら、ちょっとしてもばれないだろう」と……

ミンラは、高まる鼓動を押さえようとしながら、スバルの顔にゆつくつと近づく。

バタン！！

小屋の扉が突然開いた。強い風と、それに乗つて雨粒が中に入つてくる。扉の開いた衝撃で、ビックリしたのかスバルが顔をあげた。

当然、ミンラの顔が近くにあることをスバルは気付かない。

「「……」「

「うわわわわ……ミンラちゃん」「メンー」

知らぬ間に唇は重なりあつていていた。次第に二人とも赤くなつていぐ。

スバルは赤面しながら、ミンラに謝る。ミンラも当然ながら赤い。鼓動を押さえるよつてにしてミンラは黙つ。

「べ、別に……謝らなくていいよ……その……あの……」「嬉しかつたからー」

「」

これを聞いて、スバルはいつも倍に赤くなり、汗を流す。大方な方のミソラでも、あまりにも突然の出来事にいつもの自分を維持できていない。

「ス、スバル……君？」

「な、な、何？」

「あのね……」

「ゴホン！！」

後ろから、女性のわざと咳き込む声が聞こえて、より一層驚く二人。ミソラは扉と対面して座っているが、さっきの事で全く気付かなかつたのだ。

スバルはゆっくりと後ろを見る。

レインコートを着用した女性は、20代で、若々しい。フウドによつて顔はかくされていてよく見えないが、白人ではないことは確かだつた。

スバルは得体のしれない女性に話を聞く。

「だ、誰ですか！？」

女性はレインコートを無言で脱ぎ、置いてあつた傘立ての中に無理矢理押し込む。

二人は、その行動から怪しい奴と判断し自分のハンターを構えるが、  
生憎ウイザードは外出中だ。ハープが気を利かしてバカロックを強  
靭なキックで何処か連れ去つて行つたのだ。

それ故、二人は戦う術<sup>すべ</sup>がない。本能的が万事休すと判断し、二人は  
逃げ出したい衝動に駆られる。

「心配しないで！あなた達の敵じやないわ。味方よ！」

女性がそういうが、信用出来る筈がない。二人は完全に無視する。

「ちょ、ちょっと聞きなさいよ！・・・はあ、ルーカスとジャッ  
カーに会わせてよ・・・」

二人の態度が突然に変わつた。一人の名前を聞いて正直に味方と判  
断したようだ。

「態度変えんの速！！」

二人の態度の変わり様に女性は思わず突っ込む。

今に見て思うが、なかなか美しい顔立ちをしている。肌の色は黄色<sup>おうしょく</sup>  
に近い。混血だろう。

知つてゐるだろ？が。混血の多い中南米は、思わず見とれてしまつ

ほどの美しい顔を持つた女性は多く暮らしていて有名なのだ。

見とれるのは、その一人も例外ではない。スバルだけでなくミソ「今まで見とれてしまふほどにだ。

要するに美しいの三文字なのだ。

女性は一人に質問を始める。

「あなた達が流星のロツクマンショーティングスターとハープノートね？あの変人どもと会わせて欲しいんだけど、お願ひできるかしら？」

スバルが代表で物を言つ。

「いいですよ！知り合いでですか？」

傘立てにレインコートを突っ込むこの女性も十分な変人なのだがそこは触れないで話す。

「そうよ。昔からのね・・・」

「おいおい来るの遅すぎだらう。そんなに手間がかかったのか？」

ルーカスが混血の女性に呆れた声で話しかける。スバルとミソラはここに狭い梯子はしを通つて、ここまで連れてきた。

さつきのルーカスの態度からしても古くからの知り合いというのは本当の様だ。

ジャッカーが面倒くさそうに彼女を紹介する。

「あのクソ野郎はリーゼだ。エージェントとして働いて貰つてる」

「よひしぐね！」

綺麗で透き通つた声と笑顔にスバルは頬を赤くする。ミソラはしかめつ面で非常に気に食わなかつた。デレデレしているスバルの足を思いつきり踏みつける。

「痛いーー!!、ミソラちゃん!-?」

あんなことがあってもスバルの鈍感さには呆れるほどだ。ミソラは知らんぷりをして、怒つた足取りで部屋を出していく。ちなみに、ハンターの中に戻つたバカロックは、笑いをずっと堪えている。

スバルは踏みつけられた足を押さえながら、ミソラのあとを追つ。

「はは、青春だなー」

ルーカスが笑いながら言つが、結局はルーカスもそれに入るのだ。

「さて、本題に入るけど、やつぱりオーパーツは山の中にある奴ら

のアジトにあつたわ。これがその地図よ」

キリツとした顔に変わつたリーゼは、テーブルの上に奪つてきた地図を置く。

「流石だな。敵の本拠地から地図を奪つてくるとは」

ジャッカーが褒め言葉を言つたが、悲しくも褒め言葉は無視される。

「はつはつースルーか・・・」

更にリーゼは話しを進める。

「警備はかなり厳重になつてゐるわ！普通じゃ侵入するのは不可能よ。新配備されたナイトメア達や、ウイルス、警備ウイザードなどがウジャウジャ居る」

リーゼの言つ事にジャッカーが一々反応するが、ルーカスまでもが無視する。ルーカスは話しを進める。

「それはそうだろうな。彼らひとつオーパーツは切り札なんだからな」

「今夜、オーパーツは貿易港に運ばれるみたい。狙うならそこねー・

「残念ながら、隙はその時だけのようだな。ジャッカーが敵から盗んだつて言つローテーションのリストとこの地図を見る限り、見つかつたら終わりだな」

「それなら俺に・・・」

またしても、ジャッカーが言つてくるが彼を構う氣はない。

「三つのオーパーツは研究室の中で厳重に保管されているわ！搬入する時に奇襲をかけるしか方法はないね。ゲリラ的なやり方だけど仕方ないわ」

「青春をエンジョイしているあいつらにも伝えておこう。今夜出發するとな」

「もういい！勝手にしやがれってんだ！－！」

無視し続ける一人にジャッカーはキレた。しかし、それさえも無視される。可哀そうなジャッカーだ。

## 第20話、ステルスPGM（前書き）

復活しました！！久々に流星を執筆しました。  
それではどうぞ！

## 第20話、ステルスPGM

コンクリートでできた床が「ツツツツ」と鳴る。ジャッカーはスバルとミソラの部屋に急いでいた。ルーカスが突然、「今夜、出発だ！」などと言いだしたのでプログラムの最終調整を急いで済ませ、今、二人の部屋に速足で向かっている訳だ。前にも話したと思うが、プログラムというは「ステルスPGM」のことだ。だが、あれは製作段階だったため十分な機能が發揮できていなかつたのだ。実用化できて新たに加わった機能もあり戦闘面で大いに役立つプログラムとなつた。その「ステルスPGM」をスバルやミソラにも装備させるためハンターを貸して貰いに行つていいのだ。

「ふう～やつと着いたな・・・しかし、ここの中は長いな・・・いや、今はそんな事を言つていい場合じゃない」

廊下が長いことを愚痴つてゐる場合ではないのは確かだ。気を取り直し、ドアの前で入室の許可を聞く。

「スバル、すまないが入つてもいいか？」

「・・・いいですよ・・・」

何やら声が重たい、何かあつたのだろうか？

「入るぞ！」

瞬時、スバルの声の重さに戸惑つたが、一つの事に時間をかけてはいられない。マスターカードを取り出して自動ドアを開き、中に入

つた。

スバルは思いつめた表情をしていた。緊張しているのか若干、手が震えている。それを見たジャッカーはおおよその見当がついたが、事は急を要する。それに、彼にはウォーロックという相棒がいる。彼に任せておけば問題はないだろう。ルーカスやジャッカーの持っている第一世代のバトルウェイズード、イグザムは人格プログラムを持つていない。敵に感情移入しないためという目的もあるが、そこまでウェイズード自体が発達していなかつたのだ。現在の第三世代のバトルウェイズード、「ライガ」は改良により戦士の頼れる友となるべく人格プログラムが導入され戦闘能力も上がっている。

「取り込み中すまない。少しだけハンターを貸してくれ、都合によりウェイズードオンになつてしまつが、いいか?」

早口でジャッカーは喋つたがスバルはついて来れてる様だった。ウォーロックがウェイズードオンになり、スバルは自分のハンターを無言で差し出した。

「すまない」

そう言つて、ジャッカーは急ぎ足で部屋を出て行つた。

「……はあ~」

スバルが緊張混じりの溜め息を吐く。いつまでもウジウジして始まらないスバルをウォーロックは持ち前のガサツさで励ます。いや、励ますというよりは、ただ自分の疑問をスバルにぶつけると言つた方が正しいだろう。

『何をせつから溜め息吐いてんだ？そんなに緊張するとか？』

スバルは浮かない顔のまま淡々と話す。

「……ロックには分からぬよ。僕はロック見たいに経験も豊富じやないし、知識も全くな。それに、今回はメテオGやムー大陸の時とは違うんだ……僕の力でミソラちゃんを守りきれるか分からぬいし、不安にもなるよ」

確かに今回の敵は一筋縄ではいかないだろう。いつ、何処から狙われているか分からぬ上に敵との戦力差があり過ぎる。経験の少ないスバルからしてみれば不安や恐怖心で心がいっぱいのはずだ。正直な話、スバルはルーカスの口から出発と告げられた時は怖かったはずだ。緊張して当たり前であろう。だが、この壁を乗り越えなければ敵の陰謀を阻止する以前に自分達の住む世界に戻ることができないのだ。異次元のゲートが閉じてしまつた以上、再びオーパーツの力を使ってゲートをこじ開けなければならない。しかし、肝心のオーパーツは敵の手にある。しかも、そのオーパーツを兵器利用するためには使用経験のあるロックマン、つまりスバルを全力で見つけ出し連れて行くはずだ。事態はスバル達にとつて完全に不利な状態にある。

ウォーロックは突然、真剣な顔でスバルに語りかける。

『スバル、それは違うぜ』

「……えー？」

いつも横暴で不真面目なウォーロックが真面目な顔したのでスバルは驚く。

『俺達は好き好んでここ的世界に入ってきた訳じゃねえはずだ。俺  
だってこんな荒れた世界はとつととオサラバしたいぜ。つまり、俺  
達は巻き込まれたってことだ。だが、そんな俺らのために、俺らを  
もとの世界に戻すために動いている人間がいるじゃねえか！奴ら（  
KPM）の陰謀を阻止することは俺達をもとの世界に戻すとい  
うことにも繋がってるんじゃあねえのか？要するにだ。俺達は守られる  
側ってことだよ。確かに、お前は地球を三度の危機から救つた英雄  
だ。だからって、いつまでもお前が戦わなければならぬことはな  
いんだ。スバル、お前は自分とミソラを守ることだけを考えろ。そ  
のことが、あの一人に対しての恩返しになるはずだ。ずっと、お前  
が英雄じゃなくてもいいんだ……ああ、何か俺、変なこと  
言つちまつたな』

「ありがとうロック。僕は、自分を守る」とハーフリベンヤンを守る  
ことだけを考えるよ！』

『あ、ああ……』（なんか元気を取り戻したようだな）

ウォーロックもたまにはいいことを言つ。ガサツと戦闘力だけが  
取り柄じゃないということだ。

「えへっ！ハンターを貸すんですかあ～？」

「お願いだ！！頼むよ！！中身は見ないからさ」

ジャッカーはミソラに苦戦していた。ジャッカーは一刻も早くミソラのハンターを借りたい。ミソラはプライベートだけのハンターを渡したくない。一步も引けない状態だ。

「本当に頼む！！時間がないんだ！！」

いくらジャッカーが説得しようと女性陣は応じない。ハープがミソラに助つ人する。

『ダメよ！女子には誰にも知られたくない秘密があるんだから！』

「だから見ないつってんだる！！こちには時間がねえんだよ！！プログラムをテストロードしなくちゃなんねんだよ！！！」

だんだん、ジャッカーの口調がきつくなつてきた。このままではチギレそうだ。

「ブ、プログラム？」

「そ、ステルスPGMだ。<sup>プログラム</sup>説明している時間がないんだ！分かるか？時間がないんだぞ！おめえのプライベートなんか見てる暇なんかねえんだよ！」

「し、仕方ないですね・・・」

キレ気味のジャッカーの説得で何とか女性陣を落とすことができた。ミソラは不満そうな顔でハンターを差し出す。

「絶対に見ちゃダメですよー！」

ミソラが念押しでプライベートな内容を見ないようにジャッカーに言った。

「見ないうてー！」

ミソラからハンターを受け取ると、大慌てで部屋を出て行った。不満そうな顔をしていいミソラにハープは聞いた。

『良かったの？』

怪訝そうな顔でミソラはハープに聞き返した。

「何が？」

『だつて、あの中には男の人、特にスバル君には見られちゃまづい物が入ってるじゃない』

「スバル君は見ないよ。私なんかに興味ないんじゃない？」

実は、まだミソラはリーゼの笑みで一ヤツいたスバルを許してはいなかつたのだ。だが、恋人同士と言えるほどのことはしていないしかしと言つて单なる友達フレザーという訳でもない。要するに、奇妙な関係状態にあるのだ。ミソラは、この状態を速く脱却したいのだが、スバルがあの調子ではいつになるかは分からぬ。

そして、数分が経過した . . .

部屋についているスピーカーからアナウンスが入った。このアナウンスは、ミーティングの呼びかけや、起床時の目覚まし代わりとして使われている。

『「ホン、え」と、出発する前に確認しておきたい事があるから、ミーティングルームに来てくれないかな？出来れば急いで』

アナウンスをかけるのは大抵ジャッカーなのだが、今回は珍しくルーカスが放送している。慣れていないのか少し声が上ずっている。

「いよいよだね。ウォーロック行くよー！」

『おうー。』

相棒一人組は元気よく部屋を出て行つた。はずだつたが、

「ハ、ミソラちゃんー！」

ほぼ同じタイミングで部屋から出てきたスバルとミソラ。田が合つてしまい瞬間に二人の間の時間が止まつた。

結局、ミソラがスバルと田を合わせないようにして、ドアからミーティングルームの方に走り出した。

「 . . . はあー」

『ドンマイ、スバル』

可哀そうなスバルに、ウォーロックはかける言葉はこれしかなかつた。

「よし、みんな集まつたね。」

ミーティングルームのモニターに映像が映し出されている。モニターの横には司会のルーカスが作戦内容を説明している。

「今夜、ここを出発して拠点の近くにリアルライザーのテントを張る。ここで深夜まで休憩を摂る。深夜一時ごろになつたら拠点の警備が薄くなるそうだ。警備員や警備ウィザードなどが休息や整備に取り掛かる時間だからだ。少数派のこつちには、いざ、戦闘となると不利だから隠密行動だ。でも、隠密に動くなんて訓練された人間でない限りきつい。そこで今回、役に立つのがステルスPGMだ！」  
ジャッカー説明よろしく！」

ルーカスに説明を振られて面倒くさそうにジャッカーは椅子から立ち上がり、スバル、ミソラ、ルーカス、リーゼのハンターそれぞれを持ち主に返すと、プログラムの説明を始めた。

「俺達は電波変換を行い、電波体になることが出来るが電波体はそれぞれ特有の周波数を発している。そのおかげで、目視では発見しにくい他の電波体を認識、発見することができる。周波数を変換することでエリアを移動することだって可能だ。しかし、この周波数が命取りになつてしまふんだ。各地に設置された周波数探知機、これによつて敵対する電波体の周波数をキヤッヂするとその情報が本部に送られ周波数の根源を絶たれてしまう。そうならないためのステルスPGMだ。こいつは探知機に発見されないように周波数を周囲に漏らさない役目を担つていてる」

ジャッカーが一通り喋り終えるとスバルが手を挙げた。

「何か質問かい？」

「他に機能はあるんですか？」

「それは今から話す。ステルスPGMはもう一つ特殊な機能を持っている。ゴーストインビジブル効果だ」

聞き慣れない言葉に全員の頭からハテナマークが飛び出した。

「ふつ、聞きなれないだろ？こいつは一種の光学迷彩のようなものだ。光学迷彩つてのは名前の通り体が透明になるんだ。だが透明になるだけで足跡や影は残つてしまつ。しかし、こいつは違う。透明になるだけでなく足音、足跡、影、全てなにも残らない。周波数は漏れないからエリア移動を行えば幽霊の気分が味わえるぞ。まあ、本当にになつてしまつたら意味がないんだが・・・ゴーストインビジブルだけでなく戦闘面でも役に立つ。人数の少ないこつちには攻撃を集中的に受けることが予想される。そのためにバトルカードのバ

リアやシールド、インビジブルなどが各十枚ずつフォルダ以外で使用が可能になる。個人の攻撃力を上げるためギガ+1やメガ+3などの効果でフォルダの中に組み込むことが出来る。全機能はこの四つだ。次は容量の面なんだが、こんなにたくさんの機能があるんだ。スバルやミソラ着けているメテオPGMとは違つて無茶苦茶に容量を食う」

この時スバル、ミソラは疑問に思つた。彼らにはメテオPGMのことは話してないはずだ。スバルが代表で質問する。

「ちょっと待つて下さい。なんでジャッカーさんはメテオPGMのことを知つてゐるんですか？」

ジャッカーはいつも通り平然と答えた。

「ちよいと拝見させてもらつたよ。君達が病院に居る時にね」

「いつの間に……」

「基礎概念は同じだ。元々は君達の世界に住んでる優秀な科学者が創つたんだろうけど、いたつて簡単だつたよ」

その時、二人は同じことを思つた。ジャッカーは天才なのではないかと……。ゴン太がここに居たら全く理解できないだろつ。

「話を戻そう。こいつは大食いでね。容量も半端ないが、ゴーストインビジブル効果、こいつはハンターの容量残量が持続時間になるんだ。そのため、戦闘に不要なデータはすべて予備のハンターに移させてもらつた」

ジャッカーは予備のハンターを手に持つて見せた。

「心配するな中身は見てない。俺は他人のプライベートに興味がないのでね。何か質問は？」

そこで初めてルーカスが手を挙げた。

「何だ？ルーカス」

「幽霊つているのか？」

「「「「」」」

ルーカスは皆から冷たい視線をおくられた。

## 第20話、ステルスPGM（後書き）

次回、敵の本拠地に突入です。  
二話に分けるかもです。

暑苦しく、視界の悪いジヤングルの中でリアルライザーでできたテントが張つてあつた。寝室付きのテントの中で夜が更けるのを待つてゐるのだ。スバル、ミソラ以外は交代で見張りを続けてゐる。現在、0時30分だ。今の見張りはリーゼだ。リアルライザーのテントはジャッカーの技術力によつて光学迷彩が施されているため発見される危険はないが万が一のことを考へると、見張りが必要だらう。手持ちのイグサムを使つて異変がないか索敵している。ゴーストインビジブルもオンの状態だ。

リーゼはハンターのエアディスプレイを見ながら大きくあくびをした。コツクリ、コツクリなつていく。しかし、それでは自分の役割を果たしたことにはならないので慌てて顔を叩き、自分で自分を起こそうとする。そんな時間が何分か続き、時計は午前1時を回つていた。

—  
Z  
Z  
Z  
•  
•  
•

リーゼは完全に眠っていた。たび重なる睡魔との闘いに耐えられなかつた彼女はイグザムを放置したまま夢の世界へ旅立つてしまつていた。

リーゼがいつまでも寝室に来ないので様子を見に来たルーカスはグレーゲーと寝ているリーゼを発見した。

「おい、起きたー。」

「ムニーヤ、ムニーヤ……もう、食べれない……」

「起きるつて……おーい……はあ~」

ルーカスは苦肉の策として、懷に入れていた唐辛子をリーゼの口に放り込むことにした。

リーゼの口をゆっくり開け、赤色の唐辛子を口内に押し込む。

何も知らないリーゼは放り込まれたそれを噉み碎いた。唐辛子は激辛だ。

「ギヤヤヤヤヤヤ――――――！」

激辛の唐辛子はリーゼの舌を焼きまわし、辛さに耐えられなかつたリーゼは悲鳴をあげ飛び起きた。

今のは悲鳴がどれくらいに響き渡つたかは分からないが、寝室まで聞こえたのは確かだ。叫び声を聞きつけたジャッカーが様子を見に来る。彼の頭は情けなくも寝癖が立つてゐる。しかも、髪が上に立つならまだいいが、全体的に左に立つてゐる。正直などころ非常に見栄えが悪い。

「ど、どうした！ 何があった？」

慌て氣味のジャッカーにルーカスは作り笑い話す。

「いや、心配ないさ~」

隣で口を押さえているコーネからして何かがあったのは明らかだが、

深追いはしなかつたジャッカーは面倒くさがりに寝室に戻つて行く。

「はあ～妙な」とするなよ。田が冴えちまつたじやねえか・・・」

ぶつぶつと愚痴をこぼしながら一階の寝室に駆けあがつた。

「全く、お前は何をやつてるんだ」

涙目リーゼに呆れた調子で話すルーカスの目は少し一ヤついていた。

「ほわあ、ほほひ、ほひふふふ！」

舌を焼かれた様な感覚のリーゼは水を流し込みながら物を言つため何と言つているのか分からぬ。

完全に呆れ切つたルーカスは聞き取れない言葉など聞く氣はない。そのまま無視した。

「緊張感なさすぎだらつ・・・」

ジャッカーはこいつそりと一人の様子を影から覗いていた。相変わらずの悪趣味だ。

「悪趣味じゃないぞ～・・・」

それから一時間が経過し、いよいよ突入開始時刻の10分前になつた。皆が緊張した表情だ。眠気を感じている者など誰一人いない。スバルやミソラは言うまでもないが、ルーカス、リーゼ、ジャッカーまでもが緊張気味の様子だ。とりあえず、リーダーとしてチームを率いるルーカスが全員に喝を入れる。

「みんな、緊張しているな。どんな時でもそつだが現場での緊張感は大切だ。程良い緊張感や恐怖心は体の動きを機敏にしてくれる。心が大きく影響するつてことだな。一番いけないのは慣れだ。特に、こういう場合による慣れは、死亡フラグを生む可能性が高い。慣れないう奴は恐怖感から死にたくないと思って迅速に行動できるが慣れないう奴は一つ一つの行動を面倒くさがる。面倒という気持ちは死に直結するんだ。スバルやミソラならば現場で慣れは感じないだろう。だが、このメンバーの中で、だるさを感じている人間がいたらあって言わせてもらつ。すぐにここから立ち去つてくれ。仲間を失ったくはないからな。面倒くさいから死にますなんて話にならん」

皆、彼の話を真剣に聞いている。これならば彼らの中から死人がでることはないだろう。そう判断したルーカスは、再び話し始める。

「……誰もいないようなだな。それじゃあ、緊張している俺達は敵が拠点としている廃ビルに乗り込む。

ここからずつと進めばいい訳だが、ジャングルだ。視界も悪いし、敵の警備網も厳しい。だが、俺達にはステルスPGMがある。こいつを使えば何不自由なく足を進めることができるものだ。廃ビルまでウェーブロードは一切ない。ジャングルを地道に進んで行かなくちゃならん。先頭はリーゼが行け、廃ビルまでの道ならわかるだろ

「ええ、なんとか」

リーゼは不意に話を振られ虚を吐かれた顔をするが、一瞬で落ち着きを取り戻しルーカスの問いに的確に応答した。

「オーパーツがなければスバル達をもとの世界に戻すことはできない。本来なら、彼らには待機してもらいたいところだが、使用経験のあるスバルにはオーパーツの気配を感じるはずだ。すまないが、君たちにも同行して貰う」

ルーカスが申し訳なさそうに彼らに言つが、心優しき一人はそれを許した。第一に彼らにとつて自分達に関係することを他人に全部押しつけるのは幼いながらいい気はしないのだ。彼らも、もうすぐ中学生に上がる。多少の気遣いも必要になるだろつ。二人は無言で頷くとルーカスは話を続けた。

「ありがとう・・・よし、俺達はやれる。ウイーアー・ナンバー・ワンだ。円陣組むぞ！」

今まで真面目な顔で話していたルーカスがいつもの気さくな彼に戻つた。真面目な話は彼には似合わない。

ジャッカーは円陣を組むと言われた、嫌そうな顔をし拒否しようとするとリーゼから強烈な眼光をくらい、仕方なしに円陣の中に入つた。

「生きて帰るぞ！」

「・・・おうーー」「」「」

リーゼがガイドとなつて先頭を行く。それに続いてルーカス、ロックマン、ハープノート、ジャッカーという蛇のような配列で進んでいる。言うまでもないが、ゴーストインビジブル（以下、G.I.と呼ぶ）もオン状態だ。だが、あまり気分の良い物ではなかつた。自分が透明になつてるので、自分の体がどうなつているのか分からぬいのだ。ジャッカーはそうでもないようだが、他の者たちは慣れな手つきで進んでいた。

ジャングルの奥にどんどん進んでいく。ここまで順調だ。川が流れている所まで来た時に、突然、先頭のリーゼが動きを止めた。

不思議に思ったルーカスはリーゼに問う。

「どうした？」

「ナイトメアよ。一体だけのようね」

葉の間から川の向こう岸にいる騎士の風貌をしたエランドが見えた。ナイトメア、スバル達には心あたりがあるはずだ。

ロックマンが驚いた声をあげる。

「あれって・・・」の前の奴じゃないか！」

それを聞いたジャッカーはスバルに質問する。

「心当たりがあるのか？」

その答えは驚いているスバルに替わってウォーロックが答える。

『俺達がこつちの世界に連れて来られる時に遭遇した奴だ。かなり手こずった。俺から見てもかなりの強敵だ』

AM星の勇敢な戦士であるウォーロックが言つのだ。強敵であるに違いないだろう。そのナイトメアがそれなりの数で配備されているとなると、戦闘になつて苦戦を強いられるのは言つまでもない。極力、戦闘は避けたい奴だ。

「どうするの？」

リーゼがルーカスに判断を仰ぐ。

「やり過（）さう。と言つても向（）つに行く気配のないナイトメアをやり過（）すとなると日が暮れてしま（）

日はまだ登つていない。それはさて置きルーカスは話を続けた。

「G.Iで何とかならないのか？ジャッカー」

「今の俺達は完全なお化け（ゴースト）だ。ナイトメアに気付かれることはまずない」

ステルスPGMの制作者であるジャッカーは性能スペックの面から考えてルーカスへの答えをだした。

「じゃあ、このまま突っ込むか

「やうね」

ルーカスの作戦に乗つたリーゼは再び行動を開始した。泥が混ざつている規模の小さいこの川は、浅すぎて魚はあまり住んでいない様だ。川を渡るときは普通、ジャブジャブと水しぶきがあがるのだが、G-Iの効果で水しぶきはおろか音すら発生しなかつた。便利であると同時に薄意味悪さを感じる。

問題のナイトメアだが、簡単に通り抜けることができた。何も知らないナイトメアは、彼らの居たところをずっと眺めている。

再び森の中に潜つて行くと、蜘蛛の巣を発見したミソラは声を上げそうになるが、堪えて蜘蛛の巣の下をくぐりうとした。だが、わずかに巣に当たつた気がしたが、巣自体は無傷だつた。日常と違う感覚のするPGM<sup>プログラム</sup>だ。ミソラは、それに慣れるのに時間がかかりそうだ。

KPMが拠点としている廃ビルは近い。この森を抜ければすぐそこだ。

## 第22話、拠点突入

ようやくＫＰＭ拠点の廃ビルまで来ることが出来た。時計の針は午前3時を回っている。そろそろオーパーツが搬出される時間だ。急がないとまずい事になる。休憩を摑っている時間はない。ナイトメア達を無視して進む。という訳にはいかなくなってしまった。ＧＩを長時間使用していただため全員もうとも効果が切れてしまったのだ。幽靈でなくなつた彼らは丸腰同然だ。

「おい、ジャッカー！なんとかならないのか！」

ルーカスが厳しい口調でジャッカーに当たる。

「容量が回復するまで待つしかない。最低でもあと一時間はかかる

「一時間！？そんなにかかるのか！他に方法は？」

「ない」

「あつさつ言うな！」

「何だと…」

ルーカスとジャッカーはこんな状況だというのに喧嘩を始めてしまつた。大人なのか子供なのか分からぬ連中だ。

「はいはい、喧嘩はよしなつて」

殴り合いを始めようとしていた二人をリーゼが宥める。二人とも互

いの拳を下ろした。

「G.Iが使えないんじゃ強行突破するしかないわね」

リーゼが腕を組みながら考えている。五人とも茂みのなかに隠れているが、身動きがとれずナイトメアに見つかるのも時間の問題だ。

「俺達にだけである数を？いくらなんでもそれは無理だ。それぞれの戦闘能力もそれほど高くない上にたつた五人で乗り込むなんて、各個撃破されてしまうのが落ちだ」

リーゼの考えにルーカスは乗らなかつた。隠密行動は今の彼らにとって難しいだろう。力にものを言う事も出来ない。そんな最悪の状態だ。だからと言つてここまで来て置いて引き返す訳にもいかない。三人は口論を始めた。皮肉にもさつき二人の喧嘩を宥めたりーゼが火種となつていた。

スバルはひとり考えて考えた。そしてあることを思いついたのか、ハンターの中に居るウォーロックに話しかけた。

「ねえ、ロック。メテオPGM使える？」

『あ？それがどうかしたのか？まさか、ファイナライズする気か！なかなか良い感じしてるじゃねえかスバル。最近、おもしれえ事がなくてつまんなかったんだよな。久しぶりに暴れるか！』

スバルはウォーロックにかなり小さな声でいったのだが、興奮したしたウォーロックの声はトーンがでかくなつていつた。それに気付いたミソラはすかさず彼に声をかける。

「何してゐるスバル君?」

「えつー・つわあー。」

かなり興奮しているウォーロックは勝手にハンターの中から出てきて、近くに居たナイトメアに飛びかかる。茂みが大きく揺れて異変に気付いたナイトメアは茂みの方に近付く。だが、茂みの中に居るスバル達は脅威が近付いていることを知らずにいた。

「ちょ、ロック!待つて!」

『ああん? なんでだよ』

突然、ハンターの中に戻されて欲求不満のロックはビーストスイングで気を晴らしている。

「まず、みんなに言つてから」<sup>ヒョウ</sup>

『はあー、じゃ速くしてくれ』

面倒そうな声を上げるとウォーロックは再びビーストスイングの練習を始めた。

「どうかしたの?」

不可解な行動をとつてゐるスバルにミソラは疑問符を浮かべながら聞いた。

「いや、ちゅうとね・・・あの、みんな聞いてくださいー。」

口論していた三人はスバルに呼びつけられたので彼の方を向いた。

「何だ？」

手前にいるジャッカーがスバルに聞く。

「提案があるんですけど・・・」

「あつ！スバル伏せろ！」

ジャッカーがとっさに大声をあげる。

「・・・えつ！？」

何の事だかわからないスバルは疑問符を浮かべる。仕方ないので、ジャッカーはロックマンを無理矢理伏せさせ、後ろに居たルーカスがライフル状のレグサガンをフルで撃ち続ける。スバルの後ろで一體のナイトメアが剣を振りおろそうとしていたのだ。

『うつ、ぐふつ、があつ、くつ！うあ・・・』

不意を突かれたナイトメアは、ルーカスのレグサガンをフルにくらい、デリートされる。

『どうした？』

巡回していた他のナイトメアたちが異変に気付き集まってくる。

「スバル、手短に言え！」

ジャッカーが急ぎ口調でロックマンに言った。

「あつ、はい！僕がファイナライズで囮になりますから、その隙に乗り込んでください！」

「分かつた！生きてかえれよ。おい、スバルが囮になるからその隙に乗り込むぞ！」

ジャッカーは大声でルーカスに言う。彼は少し驚いた顔をしたが無言で頷いた。

「じゃあな、必ず戻つてこいよー」

ジャッカーはそう言い残し、ルーカスに続いた。

「スバル君・・・」

「ミソラちゃん、僕は大丈夫だから速く行つて！」

「・・・必ず生きて帰つて来てよー！」

「僕はいつも無事に帰つてきてるよ」

アンドロメダの時も、ラ・ムーの時も、メテオGのときだってスバルは仲間との絆で強敵に打ち勝ち、無事に帰還した。

ミソラは名残り惜しそうにスバルにそう言い残すと、彼の方を見ながらルーカスの方に走つて行つた。

「・・・じゃあ

『これじゃあ死ぬことはできないな』

ウォーロックが渴を入れる。

「死ぬ気なんて毛頭ないよ！それより、ノイズの方は大丈夫？」

『問題ない。徐々に野まつてきている』

「じゃあロック、行くよー！」

『おおー..』

リーゼは事前に廃ビルを調査していたため、おおよその場所は分かる。リーゼは先頭を行くルーカスに耳打ちし、裏口から侵入するよう言った。

廃ビルの浦口ドアの前に来た時、彼らの前に二体のナイトメアが立ちはだかった。

『喰らえー..』

ナイトメア一體がロケットランチャーで彼らに向かって撃つてきた。

「ショック・ノート！」

後方にいたハープノートが放たれたミサイルに向かつて音符状のショック・ノートを撃つ。それは見事に命中し、ミサイルは撃破された。

「ミソラ、やるじゃないか！助かつたぜ！」

「私もスバル君に負けてられないですから」

ルーカスがミソラの行為を称える。ミソラは少し照れた顔した。

『くそつ！舐めやがって、おらあ！』

好戦的なナイトメア達は剣を抜きルーカス達に飛びかかる。

「バトルカード、マンティスダガー！」

「レグサガン、フルチャージ！」

ジャッカーはカマキリの鎌の様なバトルカードで、ルーカスはレグサガンで応戦する。スペック的にはナイトメアのほうが上だが、経験の差では敵わない。

三体のナイトメアは全員、デリートされてしまった。爆発の後から気絶したK.P.Mの隊員たちが出てきた。どうやらナイトメアはウイザードと電波変換することで誕生する兵士のようだ。

「よし、先を急ぐぞ！」

ルーカスがドアを開け、それに続いて中に入つて行つた。

## 第23話、ジョーカー（前書き）

今回は話の都合上、少し短いです。

## 第23話、ジョーカー

スバルは、ルーカス一向から離れウォーロックと共に戦っていた。

スバル（ロックマン）は押し寄せてくるナイトメア達に苦戦していた。この前戦った時は桁違いの強さだ。いくらブラックエースの機動性と攻撃力を持つとしても彼らの人海戦術には敵わなかつた。ノイズフォースビッグバンで敵を一掃しても無限のごとく出てくる彼らには太刀打ちできないのだ。

「はあ、はあ、さつきNFBを使って一掃したはずなのに、もうこの数……勝てる気がしない」

スバルは極度の疲れを感じ始めていた。ファイナライズは、通常の状態で戦うときよりも体力の消耗が激しい。いくら踏ん張つても三十分が限度だ。ノイズの力を物にするということは、それなりの対価がでてくるのだ。現にスバルがファイナライズをしてから三十分を切ろうとしている。体力が持たなくて可笑しくはないだろう。実際、体と心は密接に繋がり合っていて、一方が心に精神的ショックが伸しかかれば、その影響は体にも現れる。同じように体に苦痛や疲れが貯まつていけば、士気を下げてしまう。まさしく、彼は今その状態にあるのだ。

「くつーもう……だめだ……」

想像以上の激戦にスバルは耐えきれず、その場に倒れこんでしまつた。それと同時にウォーロックとのシンクロも合わなくなり電波変換ごと解けてしまう。だが、敵は手を緩める気配はない。ロックマンを倒すことが正義だと思っている彼らは、倒れたスバルのもとに

じりじりと寄つてくる。

『くそっ！スバル、立て！やられちまつぞ！』

内心、ウォーロックは後悔していた。自分があそこで乗り気な態度を見せなければ、こうはならなかつたはずだ。自分があそこで止めていれば、スバルがこんなに苦しむことはなかつたはずだ。もし、ここでスバルを死なせてしまえば、彼は向こうに居る仲間達に会わせる顔がない。せつかく、大吾も帰ってきて元の幸せな家庭に戻つたというのに、ここで逝かせてしまつては死んでも死にきれないはずだ。この世に未練を残してしまはねば。それに、ミソラとの約束も破つてしまふ事になる。おそらくルーカスは、俺が付いているから、スバルの囮作戦に乗つたのだろう。自分はなんて薄情な奴なんだ。地球上でできた大切な友人すら守つてやれないなんて。ウォーロックは自分が出発前に言つたことと真逆のことをしてしまつたことに後悔し、苦しんでいた。こうしている間にも敵をスバルの小さな生を奪い、正義を飾ろうと近寄つて来ている。ウォーロックは苦肉の策に出ることにした。

『おい、クソ野郎どもスバルを倒してえのならこの俺を倒してからにしろ！』

ウォーロックはスバルの前に立ち、彼らを睨みつけた。だが相手は電波変換を行い、強化された人間達、ウイザードごとに負けるわけがない。一人のナイトメアが嘲笑いながら言つた。

『ふん、ウイザード風情に何が出来る？丸腰の貴様が俺達に敵うとでも？だが、その雄姿は認めよう。そんな犯罪者など捨てて、俺達のところに来い！それなら命だけは助けてやるぞ』

ウォーロックは激怒した。今まで何度も命がけで戦ってきた。皆が朝日を見ることが出来るように。自分の大切な人達を守ることが正義だと信じてきたから。そんな皆のスーパーヒーローを「犯罪者」と言つたのだ。仲間のために戦うことのどこが「犯罪」なのか。ウォーロックは分からなかつた。

『てめえ、何が「犯罪」だ!! スバルは大切な友人や家族、そして地球のために戦つてきたんだ。本来なら、朝寝坊して学校に遅れ気味になつて、友達と笑いながら平和な生活をしているはずの人間が自分の人生差し出して必死で戦つてきたんだ。それのどこが「犯罪」だつて言うんだ!!!!』

『嘘が上手だなお前は。そんな綺麗事を並べて俺達が動搖すると思つたか? 白を切つても無駄だぞ!! お前らの犯した罪はすべて証拠として残つていて。お前がいくら喚こうとも犯罪は犯罪だ。それは逃れることのできない事実なんだよ!! シューティングスター・ロックマンはブラックリストに入つていて。ブラックリストに入つていて以上、制裁を与えなければならないのだ』

もはや何を言つても、何をやつても相手は聞き入れる様子はない様だ。英雄、流星のロックマンが犯罪者なはずがない。ウォーロックは、ずっとスバルと共に居たから分かる。彼は犯罪を犯す勇気もないし、他人に迷惑をかけたら謝るほど正直で素直な奴だ。そのことに嘘偽りはないと確信できる。

『お前はどちらに付くのだ? ウォーロック?』

『俺は、スバルを信じる。俺はお前たち見たいなクソ野郎とは違う。』

先程のナイトメアの一人が冷淡な声と表情でウォーロックに言つた。

お前らの味方にはならない』

彼の問いかけに対し、ウォーロックはあくまで自分の信念を述べ、敵に寝返ることはないと今こそで宣言した。

『……そうか、残念だ』

ナイトメア達は一斉に武器を振り上げ、その矛先をウォーロックに向け、今まで彼と議論していたナイトメアの一人の合図で、それは一斉に放たれた。

『……ん！？』

数秒経つてもウォーロックの体に激痛が走ることは無かつた。彼は恐る恐る目を開けると、そこにはナイトメアの兵装をしていない生身の人間たちの体が横たわっていた。百は超えていたはずのナイトメアが全滅していた。彼はハンターの中に居ることに気が付いた。そして、相棒の顔を見上げた。

『スバル！ それは！』

「大丈夫？ ロック？ ずっと見てたよ。僕は別に大丈夫だから」

相棒の体はいつも漆黒とは違い、紅蓮色に輝き、頬もしいくらいで、その場にじつしりと構えていた。

第23話、ジョーカー（後書き）

次回、お楽しみに

## 第24話、遺産を求める者達（前書き）

前回からかなり間が空いてしまいました。忘れてしまった方は、前回の話から良霊でください。

## 第24話、遺産を求める者達

スバル達が外で激戦を繰り広げている間にルーカス達は、オーバーパーツ遺産が保管されている部屋を探し当て、侵入したが、残念ながら運び込まれた後だった。搬送はリアルライザーのトラックがうことになつて、リーゼが言つていた。一向は急ぎ足でトラック搬入口へ向かつて、いる途中だ。

「搬入口は、確か、ビルの右にある庭だつたよな？」

ルーカスが走りながらリーゼに聞いた。

「ええ、そう。でも、道の所々は瓦礫で封鎖されていて限られた道しか通ることが出来ないわ」

「まるで迷路だな」

ジャッカーがリーゼの言つ事に乗つた。だが、残念ながら無視された。先日、リーゼに聞いたことがあるが、彼女はジャッカーのことが気にならないらしい。理由は、「うざい」だそうだ。どこが「うざい」のか分からぬが、つくづく可哀想なジャッカーだ。それともう一つ、彼は女性から嫌われる体质らしい。これもリーゼから聞いたことだが、「生理的に無理」らしい。作者から言わせれば、決して生理的に無理な方でもないとは思つ。体格も悪くないし、頭も良い。顔も、俗に言う「イケメン」だ。ルーカスとは違つて、クールビスな顔立ちだ。後は、性格だが、時々、妙な事を言い出すこと以外は良いところばかりだ。女性視点でどこが嫌いなのか問いたい。いや、女性視点というよりはリーゼ視点と言つた方がいいだろう。

ジャッカーがリーゼに無視されてから、ルーカス、リーゼ、ジャッカー、ミソラは、誰も口を開こうとはしなかった。ただ、黒いコンクリートの床に彼らの走る音が刻み込まれ、それが、うるさいくらいに廊下に響いていた。外での戦闘は激化していて、所々で爆発や、男達の怒声が上がっている。

一向の先頭を行くルーカスが手を塞いで一向は彼の指示通り止まつた。彼らは近くにあつた壁に身を潜めた。敵がいるのだ。ウイルスが一匹いる。どちらとも、ミソラには見覚えのないウイルスで、カマキリのようなウイルスと犬のようなウイルスだ。どちらとも、ミソラの住む世界には存在しないウイルスだ。

ルーカスは、自分のレグサガンに手をかけ、レーザーの充電量を確認する。ウイルス一匹はこちらに背を向け、廊下の警備に当たっている。ルーカスは、レグサガンがフルチャージし、壁から身を乗り出し、レーザーを放つ。気付いた時には既に遅く。一匹は、成す術なくテリートされた。

身を潜めていた三人は、ルーカスの後に続き、搬入口に向かった。

一方、目的の搬入口では・・・

搬入口へ向かうための扉は、一体のナイトメアによって封鎖されている。通るには、撃退するしかないが、そう簡単にやられないように、一体とも重武装が施されている。

そんな二体が居るのにも関わらず、体中傷だらけの少年は、堂々と廊下を歩く。

彼を見つけた二体は、武器を構え、警戒状態になる。

『貴様！何者だ！』

一体のナイトメアが、巨大な槍<sup>ランス</sup>を向けながら言つた。もう一体のナイトメアも剣を構えて敵対心を露わにしている。だが、少年は何の素振りもせずに、扉に近付く。

『と、止まれ！』

平然と歩いてくる少年に威圧感を感じたのか、槍<sup>ランス</sup>を構えたナイトメアはたじろぐ。

少年は聞きもせず、懐からハンターを取り出し、それを天にかざす。

『ー！』

次の瞬間、少年の辺りを紫色の光が包み込んだ。光の中からでてきたのは、オールバックになつた銀髪、紫色の鋭利なバイザーと肩や足にとりつけられた装甲、そして何者も寄せ付けない鋭敏な眼光。そう、ムーの末裔にして、最後の生き残り、ブライ、もといソロだ。

『貴様は！』

二体が驚いている間に、場を颯爽と駆け抜け、ナイトメアの装甲をもろともせず、ラプラスソードで斬りつける。

『「ううう……くそ~』

電波変換が解けていないナイトメアの一體は悪態を吐きながら立ちあがろうとする。無情なブライは、そんな彼を再び斬りつける。

『ぐわつ……』

抵抗することもできずに、ナイトメアはブライにやられた。電波変換の解けた一人は、ピクリとも動かない。ブライは、「ふん！」と見下した表情で吐き捨て、搬入口へ通ずる扉を壊そうとする。

「待て」

「…」

突然、後ろから声をかけられ、ブライは振りかざした剣を下ろした。

後ろを見ると、スラリと背の高い男が不敵な笑みを浮かべながら立っていた。男はブライに向けて口を開く。

「研究員が怪我をしていた所を見ると、助けられたことが屈辱だった。という感じだろうな。まあ、その研究員は私が始末したから問題はないんだが」

男が喋っている間に、ブライは、暗黒闘波をまとった剣の斬撃を飛ばす。だが、飛ばした所に男はいなかつた。

「何！？ ……ぐつ……！」

ブライは、気付くと氣を失っていた。ナイトメアに電波変換した男

は、氣を失つたソロを抱え、何処かに消えて行つた。

## 第24話、遺産を求める者達（後書き）

最近、かなり忙しいので、今まで通り、更新には時間が空くと思います。ですが、ご心配なく。夏休みに、流星連続投稿週間を設けております。ですので、その口までしばしお待ちを・・・

レッドジョーカーの力は強大なものだった。ブラックエースに比べて機動面は劣るが、攻撃面と防御面では、スバルが予想していた以上に頼もしかった。紅蓮のロックマンはその獰猛さでナイトメア達を蹴散らしていく。ノイズフォースビッグバンのレッドガイアイレイザーは爆発と衝撃で耐えられる者など誰一人いなかつた。この力は、スバルにとつての希望だった。そして、その希望がかない。しそうきが生まれた。士気も体力も倒れていた時とは比べられない。

ナイトメア達は、自分たちの予想が裏切られたことを歯噛みした。ロックマンがレッドジョーカーになつてから勝機を失つたのだ。その場で誰もが考えもしなかつたスバルの反撃が始まつたのだ。圧倒的な力を見せつけられ、成す術なくやられていく。彼らにとつては、こんなにも屈辱的なことはないだろう。自分達が信じてきた正義が破れ、犯罪者に良い様に翻弄されているのだ。態勢を立て直そうにも、隊員たちの士気は下がつていき、逃走する者すら出でいる始末だ。だが、彼らは氣付いていなかつた。この力は、ロックマンが変身したことによって増幅したものではないということを。力の正体は、スバルの信じる絆の力だ。

「ブラックビルディング！！」

ロックマンが左手を地面に叩きつけると、その場所から黒金の遮蔽物が生える。それで、ナイトメア達が向けてきた弾丸を弾くことが出来た。

『くそッ！！ 一体どうなつているんだ！ 何なんだあの力は』

ナイトメア隊の隊長が悪態を吐く。だが、その間にもスバルは足を進め、隊長の近くまで近づいていた。

その強力な力が何処から溢れてくるものなのか彼らは知らなかつた。いや、忘れていた。その関係は、身近にあるものでつい、見落としてしまいそうだ。だが、それ程までにかけがえのない物は他において無い。

『おらあー。』

ナイトメアの一体が、巨大なランスで紅蓮のロックマンを突こうとすが、強力な装甲の前にはビクともしなかつた。キックでナイトメアを押し倒すと、ウェーブロードに駆けあがり、飛んでくる攻撃をかわしながら隊長の前に降り立つと、隊長に向かつて堂々と宣言する。

「僕が、どうして強いか教えてあげよう。仲間や友達を信じる心、絆の力だ！」

だが、隊長は不貞腐れた顔をするとその言葉を煙たがつた。

『酔舞い事をぬかすな！！』

そう言つて隊長は剣を振りかざす。スバルはその剣を腕の装甲で受け止め、ロックスターで隊長の態勢を崩すと、背中にあつた二機のジェネレーターを射出し、左手に貯めたクリムゾンをレーザーとして放つ。その上で飛ばしたジェネレーターのレーザーで場をまんべんなく塗りつぶすと、大爆発が起こつた。とてもではないが、そこにいた全ての隊員は強靭なレーザーと爆発に耐えることが出来なかつた。<sup>ノイズフォースピックパン</sup>NFBのレッドガイアイレイザーが炸裂したのだ。

一方、ルーカス達は搬入口の扉をくぐり、オーパーツの入ったリアルライザーのトラックを探索していた。当初の作戦案ではオーパーツが保管されているという研究室を探して、搬入する隙を狙うのが目的だったが、G.I.の効果が切れたことによって進行度は遅れ、結局、トラックを探すことになつたのだ。こんな事態になつたのは全てジャッカーセイだとみんなして決めつけていた。だが、彼には罪はない。ステルスPGMの性能について全て作戦説明の時に話していたのだ。文句を言われるべきはジャッカーではなくPGMの方だ。

「おい、トラックなんて見当たらないぞ！」

ジャッカーカーは、腰をかがめながら小声でリーゼに言った。対するリーゼは非常に苛立つた面持ちでジャッカーカーに返答する。勿論、小声で。

「知らないわよ！こんなに遅れたのは、あんたのせいでしょう！」

その応答にジャッカーカーは腹を立てた。前列でも述べたが、PGMのことは全て話した筈だ。なのに、ここまでして責め立てられなければならぬのは彼自身不愉快だった。ジャッカーカーは吐き捨てるような声で、リーゼを怒鳴りつけようとするが、ルーカスに宥められる。

二人が大人げない行動をしている内に、ミソラが何かに気がつき彼らに知らせた。

「あれがトラックじゃないんですか？」

ミソラが指さす方向にルーカスも顔を向けた。確かにリアルライザーのトラックがあつた。おそらく、その中にもオーパーツが積み込まれているだろう。ただ、一つだけ問題があつた。ナイトメアの数が多い事と、それを仕切る司令官らしき、すらりと背の高い男の姿があつたからだ。その存在に気付いたルーカスは、冷戦さながらのジャッカーとリーゼに報告する。

「おい、二人とも聞け！アルカスがいる。奴に見つかったら厄介だ。なんとか凌ぐぞ」

その時だつた。黄色の電気エネルギーが、球状になつて飛んできた。すぐさま、四人は防御態勢に入るが、エネルギーボールは隠れていった障害物もろとも破壊し、四人とも違う方向に飛ばされる。

「ふん！」ざかしい真似をしやがつて、捕えろ！」

『『はつ！』』

片手のグローブに電気が貯まつたアルカスは、部下のナイトメア二人にルーカス達を捕えるよう命令した。爆発の衝撃でルーカス以外は気を失つている。そのルーカスは、骨折した左手を気にしながら、無我夢中でライフル状のレグサガンを連射する。

『『ぐふつ！…うつ！…あつ！…グあつ！…』』

ナイトメア二体とも唐突な攻撃に防御態勢をとれず、電波変換は解除される。

「ちつ、役立たずめ」

アルカスは舌打ちすると、大きな苛立ちの足音で疲れ切ったルーカスに近付く。ルーカスはレグサガンで抵抗しようとするが、アルカスの左手で銃を弾かれ、電気エネルギーの貯まつた右手のグローブで顔を思いつきり殴られた。たださえ、殴られるとダメージが大きい上に、電気エネルギーも併せて喰らつたのだ。ルーカスは、もう、立ちあがる気力すらなかつた。アルカスは、軍用バトルカードのソードを出し、とどめを刺そうとする。

「バトルカード、ファイアーソード！」

レッドジョーカーのまま、スバルは間一髪でアルカスの攻撃を阻止した。

「何！？」

不貞腐れた顔をしたアルカスは、その腕力でファイアーソードを弾き飛ばそうとするが、圧倒的なジョーカーの力に憚れた。アルカスは、態勢を立て直すため、距離をとる。スバルは、MAX状態のロックバスターでアルカスを狙い撃つが、軍用のバトルカードは強力ですべて剣の内側で防御される。

『隊長、スピアの搬入完了しました』

ナイトメアの一体が、彼の無線機越しで言つた。アルカスは、同じく軍用バトルカードであるバリアを用い、トラックの方へ向かつていぐ。

「待て！」

「待てと言われて待つ敵はいないぞロックマン！」

アルカスは、挑発するだけして手持ちのレグサガンから煙幕弾を撃つて、オーパーツと共に何処かに行ってしまった。

第25話、アルカス（後書き）

感想、評価、お待ちしております。

## 第26話、残された選択肢（前書き）

お久しぶりです。本格的に、夏休みに入ったので、いよいよ連投週間に入りたいと思います。まずは、流星を二回連続でどうぞ！

## 第26話、残された選択肢

先日の戦いから、一日過ぎた夕方、皆は、再びミーティングルームに、集まっていた。ルーカスは、アルカスとの戦闘で、飛ばされた衝撃で、左腕を骨折しているので、ギブスをしている。おまけに、アルカスから顔を殴られていた。顔中に痣があちら、こちらにあつて、見るからに痛々しい。

「ゲホゲホ、トラックに積み込まれたオーパーツは、貿易港に運び込まれた。そう言ってたな、リーゼ」

ルーカスは咳き込みながら、リーゼが持ってきた情報を、再び彼女に確認する。リーゼは、自分の持ってきた情報と、ルーカスが言ったことが正しいと、無言で頷いた。

「次に、オーパーツが行くのは、恐らく敵の本拠地である、離島だな。そうなると、再び、オーパーツを奪うのは難しい。残された選択肢は、貿易港の倉庫内に、厳重保管されているそれを、この前のように潜入して奪うか、こちらが負けを認めるかだ。だが、俺は、負けを認める気はない」

いつもの囮々しさは、空の彼方に消えていて、体中の痛みが、彼の気力を奪っていく。しかし、話すだけでも苦痛なのに、持つて逝かれそうな自分の信念を、貫き通している。彼の雄姿は、スバルの心中に一つ一つ刻み込まれていった。

ルーカスの言う貿易港は、先日向かつた病院のあるサンエル市の、市街地を抜けた先の山岳地帯通り、渓谷を抜け、山をいくつか越えた海辺の貿易で栄えていた町の中にある。貿易港は、海外からの

輸入された品、もしくは、海外へ輸出するための品が行きかうターミナルだ。終末の日を迎えて以来、各国からの要請は来なくなつた現在は、ボスニア領内にある離島のグレゴダ島との連絡用の船しか出ていない。

そのグレゴダ島は、KPMのジン率いる部隊が、新政府に黙つて、そこに居を構えている。新政府が知つてるのは、KPMが、国家援助という目的で、ここ（ボスニア）に来ているという事だけだ。しかし、前も言つたと思うが、国家援助は表向きで、DESTROYERの被害を逃れたKPMのお偉方は、世界で生き残つた国と、その国民を支配しようと企んでいる。実を言つと、DESTROYERの発射は、KPMの腐りきつた上層部が、世界を我が物にせんがために、ソ連に工作員を送り、機械の誤作動という嘘を被せて、世界を滅ぼし、生き残りを統合する。そう言つ目的で、発射されたのだ。要するに、破滅を引き起こした張本人は、世界平和を守るために創られた軍隊ということになる。

世界を終わらせた後、指で数えられる程度になつた国々に、軍をおくること。しかし、そのためには、軍を動かすための、正当な理由が必要だつた。連中が各部隊に出した命令は、国家援助ではなく國家を柔軟的に支配することだつた。結局は、支配欲に囚われた、KPMのお偉方が引き起こした、ジレンマなのだ。

グレゴダ島は、以前は、うつそうと茂つているジャングルと、野生生物の楽園だつたが、KPMによつて要塞が建てられてからは、その数は減少している。だが、革命によつて新しくできた新政府は、グレゴダ島に、KPMが要塞を建てたという事実は知らず、純粹にKPMを信じ、政策やら何やらは、彼らに任せっきりという状態になつてゐる。つまり、今まで通り、グレゴダ島は、誰も住んでいない無人島だと、新政府は思い込んでいる。結局、新政府は何も知らないという事だ。

話を元に戻す。ルーカスが言った「残された選択肢」というのは二つ、しつこいが、三つのオーパーツを、再び奪い取るか、負けを認めるかだ。彼は、辛い体の状態でも「負けは認めない」と言った。そのルーカスに、反論する者など誰一人としていなかつた。

「・・・反論はない様だな。よし、じゃあ、今回の作戦について説明する。今回は、港にある何処かの倉庫に保管されているオーパーツを、奪うことだ。まあ、その点は、前の時と変わりないな。今回は、ジャッカーが改修を加えてくれたステルスPGMを用いるから、敵に発見されることはないだろう。だが、油断は禁物だ。港の、目立つ所を爆破して、警備網をかく乱せる、つまり、「陽動」だ。これが成功すれば、見つかって、敵が襲つてきても、無事に突破することが出来るだろう。この前みたいに、激戦になることはない、ということだ。爆破工作を行うのは、ジャッカーとリーゼ、オーパーツの方は、スバルとミソラだ。本来なら、俺も作戦に加わりたいところだが、生憎、出られそうにない。ということで、俺は、ここで、指揮を執る。すまんな。俺からは異常だ。何か質問は？」

大抵、「質問はないですか?」と言つて、張りきつて手を擧げる人間は、小学校低学年でない限り少ない。スバルとミソラは、もうすぐ中学生だ。やはり、他人の目という物は、気になるだろう。単に手を擧げたくなかつたのか、それとも、質問事項など無かつたのか、誰も手を擧げなかつた。という訳でもないようだ。

「おい、ルーカス」

ジャッカーが手を擧げて言つた。

「何だ?」

「港には、どうやって行くんだ？港に近付けば近付くほど、警備は厳重になる。現に、渓谷には検問所が設置されているからな」

ジャッカーの情報は、恐らく、ＫＰＭのネットワークに潜り込んで、見つけてきた物だらう。流石は、「ジャッカー」だ。

「問題ない。港までには、港に送られるための食糧が、山ほど積まれていて、港の中に潜伏するから、容易に行けるはずだ」

トラックは、食糧が、配給制になつていて、この国には欠かせない「元給食センター」にある。現在は、市民の一日分の食事と、ＫＰＭの隊員たちの食糧を配給する施設になつていて、

「なるほど？」しかし、検問所は、チームF（FOXTROT）が指揮している。場合によつては、あいつが出るかもしれないぞ」

ジャッカーの言つたことにルーカスは、頷きながら、「ああ、あいつね」とつぶやいた。

スバルとミソラには、「あいつ」という物が何なのか分からぬ。無論、彼らのウイザードも同じだ。

以心伝心なのか、スバルが、他三人の疑問を、代表としてルーカスに聞いた。

「あの、あいつって誰ですか？」

突然の質問に、ルーカスは、驚いた表情を見せる。

「ああ、スバル……あの、あいつって言つるのは……」

「ウインディ・ハリケーン。チームFの所属で、特殊部隊であるチ  
ームXにも所属している。風使いだ。空中を自由に動き回っては、  
敵をかく乱し、空からの爆撃や、風を舞い起し、敵からの攻撃の弾  
道を変えたりする。得意戦法は、その大きな翼で、敵を飛ばし、弱  
った所で爆撃や、斬撃で追い打ちをかける。状況次第では、敵の体  
を持ち上げ、地面に叩きつけたり、高度な場所から、下に落とした  
りといった方法もとる。かなりの強敵だ」

ルーカスがたじろいでいる間に、ジャッカーが、全て説明してしま  
つた。スバルの方は、ルーカスの事は気にせず、納得したという顔  
をしている。そして、ジャッカーに質問する。

「攻略法はあるんですか？」

「ああ、勿論。奴は、風を舞い起して、遠距離から飛んできた攻撃  
の、弾道を逸らして、敵の不意を突いてくる。遠距離系の攻撃は、  
まず効果がない。奴が近づいて来た時に、ソードで斬りつけるのが、  
得策だが、タイミングが、非常にシビアだ。よって、奴には、こい  
つを使え」

そう言つと、ジャッカーは、懷からバトルカードを取り出し、スバ  
ルに投げて渡した。

「これは？」

「スパイムネットだ。蜘蛛のようなウイルスであるスパイムの、高  
い粘着力を持つネットを、追尾型ミサイルの中に容れ込んだバトル  
カードだ。ロックオンして、ミサイルを発射すると、弾道が変えら  
れても、追尾型だから、しつこく追いかける。その上、ミサイルが

破壊されれば、そこからネットが飛び出て、相手の動きを封じる。その間に、でかい物を一つ、ブチまかすんだ。そうすれば、勝利への扉が開ける」

ジャッカーが、バトルカードの説明をし終えると、ルーカスが、咳払いしながら、話の遅れを取り戻してきた。

「ゴホン！ とりあえず、今日はこれで終わりだ。出発は、三日後。それまでに、各自、準備を整えておくこと。いいね！」

## 第27話、夕日の見える浜辺にて

スバルとミソラが、もう一つの世界に連れて来られて随分と経つた。彼らの住んでいた世界と、今、住んでいる世界との時間差は、ほとんど無い。彼らが、居なくなつた以来、サテラポリスと、WAXAは協力して、二人の捜査を続けているが、今の所、手がかりが全くつかめず、時間だけが、進んでいるという状態だった。

「くそつ、一体、どうなつているんだ！何故、手がかりが一つもないんだ！」

WAXAの57階にある指令室は、朝から大忙しだ。いつまで経つても、手がかりなしの状況に、一人の男性研究員が、悪態を吐く。

「もう無理だ。この状況で、スバル君たちを見つけるなんて・・・」

もう一人の研究員が、諦めたかのように頃垂れる。だが、その時。

「諦めてはいかん。可能性がある限り、それを信じるんだ！スバル君の言葉だ」

WAXA長官が、頃垂れた研究員そう言って励ました。彼の後ろには、ヨイリー博士もいる。

研究員は、その言葉に元気づけられたのか、立ちあがると、こひ言つた。

「そうですね。スバル君が助けを求めているんだ。きっと、諦めずに。大人の俺がしつかりしなきや！」

励された研究員は、再び自分の持ち場に戻り、捜査に参加した。捜査は、スバル達の住むコダマタウンの監視カメラの映像を、過去の記録を見て、スバル達が消えた直後に、何があったのか。それを探るのがWAXAの役割だ。サテラポリスは、現実世界で、聞き込み捜査を行つたり、電波世界で、一人の残した残留電波をさぐつたりと言う感じで、大規模な捜査が行われていた。しかし、前列でも述べたが、未だに、手がかりはつかめていない。

WAXA長官と、ヨイリー博士が、何やら話し込んでいた。後ろから、若々しいが、はつらつさが欠けた声が、二人の話を遮つた。二人が、後ろを見ると、そこには、松葉づえ姿だが、傍らには、うまい棒を持っているシドウと、そのウィザードであるアシッド。さらには、その後ろに、親友スバルとミソラが心配で、ここにのとこり眠つてないのか、田の下にクマが出来かけている委員長四人組と、スバルの母親である星河あかねが居た。恐らく、彼らは、シドウが、指令室に向かう際に、ばつたり会つたというところだ。

「すいません長官。遅くなつてしまつて」

最近まで、ずっと寝た切りだったシドウは、長官とヨイリー博士に詫びると、苦笑いを見せた。だが、ヨイリー博士は、「まだ寝てないダメよ。シドウちゃん」というが、「問題ない」という表情を作つて、ヨイリーの心配する隙を無くした。

「それより、用件は何だね？」

「はい、丁度、俺が完成したプログラムを渡しに行く途中に、このビジライザーで、たまたま、スバルとミソラが、ウイルスの大群と戦つているのを発見し、加勢して、その時の場を凌ぎました。そして、プログラムの説明を終えて、帰る途中に、コダマタウンで、車

が炎上しているとの通報が入ったので、向かつてみると、一年前に見たムー大陸の、電波兵士がいました。ですが、それらは、既にスバルとミンラが片づけた後で、俺の出番はありませんでした

シドウは、そこまで言つと、何故か、苦い表情になつた。まさかとは思つが、「ヒーローは遅れて現れる」といつ自分のポリシーに従つて、戦闘に参戦できなかつたのを、まだ、悔んでいるのだろうか。シドウも、まだまだ、半人前と言つたところだ。

「続ける」

「はい、そこで、スバル達と雑談している間に、いつの間にやら、俺の後ろに、見たこともない、ボロボロのマントを着た銀髪の青年が立つていたんです。その青年は、こちらの質問に答えようとせず、俺を白パト扱いにして、そこをどかし、彼が、指を鳴らすと、スバルとミンラの下に、黒い穴が空き、一人はその中に吸い込まれていき、アシッドが言つには、二人の反応が消えたらしく、俺の頭に、最悪の状況が、よぎつて、その青年に飛びかかりましたが、一瞬で、無力化されて、気を失いました。ここまで、この前、話した通りです。病院に入院している間、色々と調べてみたのですが、そこで、ある奇妙なことに気がつきました」

「奇妙なこと?」

シドウの言葉が、気がかりだつたのか長官は、彼に向けて疑問符を飛ばした。

「はい、どうやら、過去にも、そういう事例があつたようです。過去と言つても、一百年前の話ですが、その時も、今回と同じように、空中に開いた亀裂の中に、吸い込まれていつたようで、そして、吸

い込まれていった者たちが見た世界を、もう一つの世界、ビオンド  
ードと呼んだそうです

「ビオンドード……」

一方、こちらは、もう一つの世界、ビオンドード。

ミソラは、出発前日となつた夕方に、スバルと共に、上のボロ母  
屋を出て、カリブに沈む夕日の美しさに、感嘆していた。

「きれいだね。スバル君」

「うん、星空を見るのも良いけど、夕日を見るのも良いな」

一人は、浜の上に座り込んでいた。静かな波の音が、一人の状態を、  
ロマンチックにしている。

ミソラは、前々からスバルに、言いたい事があるのだ。スバルの方  
も、それは、察知しているようだが、未だに、友達以上、恋人未満  
といった状態だ。二人とも、いい加減に蹴りを付けたかった。だが、  
緊張してしまつて、その一步が出せずにいた。しかし、今日、ミソ  
ラがここに呼び出したのは、スバルに思いを伝えるためだ。ミソラ  
は、顔を赤らめながら、意を決する。

「あのや、スバル君！」

「何？」

二人は、顔を見合わせる。スバルの綺麗ない瞳に見つめられ、ミンラの顔はより一層赤くなる。

（やつぱり、だめだ。言えない）

「どうしたの…ミンラちゃん？」

トマトよりも赤いのではないか、といつくりのミンラに、スバルは、疑問を抱ぐが、すぐに、それを察知し、若干、赤くなるスバルであった。

「へ？あ、ああ、いや、あの」

誰しもそうだが、思い人の前では、素直に自分を表現できないものだ。それは、そこにいるスバルとミンラにも、同じことが言える。そのため、ミンラは、かなり勿体ぶつているが、これ以上、先延ばしにするわけにもいかない。勇気を出した。その言葉を述べようとした。

「あのね。スバル君…・・・実は」

「好きだよー」

スバルが、予想外にも、自分からそうついついたので、ミンラは、唖然とする。

「ミンラちゃんのこと…・・・」

この時ミソラは、若干、涙ぐんだ。嬉しさのあまりに、言葉に出来なかつた。だが、やはり、思いは伝えるべきだ。

「私も、スバル君のこと……好きだよ」

まだ冷えていない顔の赤らみが、スバルには、それが、かわいく見えた。スバルは、無言で、ミソラの温かい体を抱きしめた。ミソラは、それを嫌がることなく受け入れた。

「…………」

数分間、抱き合つたままの沈黙が続くと、ミソラが、口を開いた。

「ねえ、スバル君」

「何？」

「キスして」

ミソラは、スバルが恥ずかしがることを承知で言つた。彼女は、スバルが驚いたり、慌てたりするさまを見るのが好きなのだ。だが、スバルは、そういうふた素振りを見せなかつた。

「いいよ」

二人の唇が重なり合つた。

一人の様子は、ボロ母屋から、ずっと眺められていた。

「ああ、青春つて良いもんだな。ゲフツ」

ジャッカーは、先程、町から買ってきていたビールを飲みながら、そう言った。見た所、かなり酔っている。

「ほどほどにしておけよ。明日は、出発なんだからな」

ルーカスは、一人の様子を、まるで展望台から、綺麗な街を眺めるかのようにして言った。

## 第27話、夕日の見える浜辺にて（後書き）

今日の流星の投稿は終了です。

詳細は、活動報告で、追つて説明します。

感想、評価、お待ちしております。

## 第28話、好きの隙（前書き）

まず、先に謝らせていただきます。昨日は、突然の事情<sup>オヤフロゲ</sup>にともない。更新できませんでした。申し訳ありません。

スバル達は、港に輸送されるためのトラックを探すため、元給食センターに向かつてた。施設は、山の中もあり、そこに行くにはジープに乗らなければならぬ。ジャッカーとリーゼの二人は、揺れる上に、石油臭い旧世代の車両に慣れているが、スバルとミソラは、石油車両に乗った経験が、ほとんどないので、揺れの強さと石油臭さに、乗り物酔いしていた。

「おい、大丈夫か？」

二人の様子を気にかけたジャッカーが、後部座席を向いた。

「だ、大丈夫……です」

スバルは、無理に笑顔を見せながらそう言つたが、とてもではないが、体の方はかなりダウンしている。ミソラも乗り物酔いの状態だが、スバルほどダウンはしていないようだ。歌手という役柄上、そういうことに慣れているのかもしない。石油車両に乗るのは、今回で二回目だ。それも関係しているだろう。

スバルは、今にも、朝食べた目玉焼きを戻しそうだ。（食事中の方、失礼）ウォーロックは、そういう相棒の背中をさすつている。言葉はガサツだが、行動には思いやりがあるようだ。

「酔い止め飲む？ 丁度、ドリンク薬を二瓶持つているけど

二人に気を使って、リーゼが自分の持つていた酔い止めを二人に渡そうと、それを持つて差し出すと、失礼ながら、スバルは、何も言わずに強引に掴み取ると、瓶のふたを開け、酔い止めを流し込んだ。

「ふ、ふう、少し、楽になつた。あ、リーゼさん。さつきは、すいません。ありがとうございました」

「いいのよ。元気になつてくれて良かつたわ」  
樂になつたスバルは、安堵の息を吐くと、先の無礼を詫びる。

リーゼは、スバルに愛想笑いを送る。対する彼は、その笑顔に少し、赤らむ。それを見逃さないミソラではない。

「ああっ！スバル君赤くなつてる……！」

「ええっ！？あ、『めん』ミソラちゃん」

スバルは、どうして良いか分からず、とりあえず謝った。だが、それだけでミソラが許すと思つたら、大間違いだ。

「じゃあ、キス！」

「……へー？」

ミソラの行動に驚かされたのか、彼女以外の全員が呆けてしまつ。特にジャッカーは、運転しながら飲んでいたボスニアア製のコーヒー豆を使って精製したコーヒーを、吹き出し、リーゼに怒鳴られる。

「恋人同士だからいいでしょ？」

「どうやばかったと、お見受けする。ミソラは、ちゃんと感謝の言葉を述べてから、それを貰つた」

ミソラの発言に、スバルとミソラが出来ているということを知らなかつたリーゼは、再び驚く。ちなみに、知らなかつたのはリーゼだけだ。あのウォーロックですら知つていて、同じ女性であるリーゼが知らなかつたというのは以外だつたのだらう。「えつ！ 知らなかつたの？」という視線を皆から送られる。それはさて置き、スバルは、するか否かの選択を迫られる。視線を感じるかもしないが、やつてしまえば、それで終わりだ。やらなかつたら、ミソラとの関係は危うくなるかもしれない。

「や、やつぱり。やらないとダメなの？」

「うん」

スバルは、少し期待したが、即答をされてしまった。スバルに逃げ場はない。

「やるなら今のうちはだ。そろそろ、マーキングポイントに到着する

「青春は一回きりなんだから。やつちやいなさい。」

ジャッカーは、一見、冷静そうに見えるが、言葉ではスバルを後押ししている。リーゼは、なにやら張りきついている。女性は恋愛がらみが好きなものなのだ。

「じゃあ、いくよ」

スバルは、緊張しており、言葉から行動から何やらが震えている。ミソラは、無言で頷き、身構える。一息吐いて心を落ち着かせると、ゆっくりと、赤いそれに自分のものを近付ける。

『おい、スバル。そんなに緊張……ぐふつ』

空氣壊しの破壊者デストロイヤーは、ハープによつて、その言葉を阻止される。相変わらずの一人、というところだ。

二人の唇が、あと数ミリとなつたその時だ。

「おい、そこのジープ止まれ！」

オードグリーンの迷彩服を着たような容姿をした男数人が、ジャッカーナーの操るジープの前に立ち塞がつた。手にはレグサガンを持つている。

当然、二人の状態は、1ミリも動いていなく、維持されたままだ。

「まずい、KPMの隊員だ。まさか、こんな所にまで警備が及んでいたとはな」

以外と言いたげなジャッカーナーの顔には、若干、焦りも見える。この前のKPMの隊員との装備が違う。廃ビルに展開していたのはナイトメア。ムーの電波兵士を強化し、バトルウイザードにアップさせた物だ。オードグリーンの迷彩服のよつた装備はグレイ・ウォリアーだ。装備は、旧世代のイグザム・グライジャに比べて、アップした点は、まず、ウイザードが人格を持っていること。人格プログラムを埋め込んだことで、シンクロ率は格段に向上した。もう一つは、装甲の強化だ。イグザムの装甲は、一見、堅そうに見えるが、それでも無かつた。それに比べグレイは、装甲の形は変えず装甲の素材を変えただけで、防御力を上げることに成功した。そのため、イグザムとの姿形はそのままだ。そして、忘れてはならないのが、武装の向上だ。イグザムの欠点は、バトルカードの読み込みの遅さだ。戦闘では、一瞬の隙が命取りになる。これを改善するため、ウイザードの人格プログラムが導入され、カードの読み込みがあがり、戦

闘がよりスピーディに行えるようになった。しかし、人格プログラムがあるからといって、完全というわけではない。やはり、まだコンマ一秒の差がある。その差を埋めるために開発されたのが、ナイトメアだ。その武装と、装甲から近距離戦がメインとなっているが、バトルカードの読み込みは、上がった。しかし、そこで問題が出てきた。元電波兵士ということもあってか、人間の方の、兵士の感情が制御できず、好戦的になってしまふのだ。酷い場合は、コンバットハイになることもあるのだ。

一向は、ジャッカー手作りのステルスPGMをオンにし、ジャッカーは、<sup>ゴーストインジブル</sup>GI状態で車を止め、彼らは、ジープを乗り捨て、茂みに隠れる。

「ん！？だ、誰も居ない」

見事、GIに騙されているKPMの隊員たちは、どうしてよいか分からず立ち往生している。

「今のうちだ。マーキングポイントに向かう……って、え！？」

さつきのこともあつてか、欲求不満だったミソラは、一瞬の隙を突いて、スバルの唇を奪っていた。スバルは、何が何なのか分からず、オドオドしている。当然、そんなわけで皆からの視線を浴びる。ちなみに、GIは、特定の人物しか見える様、設定されている。

「ちょ、ちょい、おい！」

ジャッカーも慌て模様だ。

## 第28話、好きの隙（後書き）

次は、12時頃を田舎に更新する予定です。

## 第29話、敵か味方か（前書き）

遅れています。

来週から、定期的に、金土で更新します。

## 第29話、敵か味方か

マーキングポイントに到着した一向は、ルーカスとの通信役であるリーゼが、ハンターからルーカス宛てに電話する。やがて、コール音が止み、画面にルーカスの顔が映し出される。リーゼは、その状態を皆のハンターにセンドした。

『どうやら、ポイントに着いたようだな。そこから西の方角にブロック塀があるのが分かるか？そこの塀の下部分に穴が空いているだろ？そこから中に入れる。その後は、輸送されるためのトラックを探すんだ。いいな』

状況も状況なので、誰一人喋らない。皆が無言で頷くことで、ルーカスへの返答となつた。

『よし、チームを二手に分けよう。リーゼとスバルがWチーム。ジヤッカーとミソラがBチームだ。常に連絡できるように、ハンターの通信は全員と繋いでおけ。こちらからは以上。では各自、行動を開始してくれ』

リーゼはスバルを導きながら、施設内を探索する。元給食センターということもあって、学校の給食室から漂つてくるのと同様、おいしい匂いがスバルの鼻孔をつつく。もし、ここにゴン太がいたなら、作戦の障害になるだろう。「腹、減つた」とか言って、漂つ

てくる匂いの元に、よだれを垂らしながら向かっていくはずだ。無論、スバルもこの匂いに釣られそうになるが、高まる感情を強引に抑制する。

「トラックは、ここ」の倉庫内にどこにあるはず……でも、途方もなく探してては時間の無駄。だったら、トラックが何処に向かうか記された書類を探せばいいはず。スバル、いい?・書類を探すわよ。長引くと思うけど大丈夫?」

リーゼは、さつきまでハンターで通信をとつていたジャッカーとの、話した内容を殆ど変えずに、スバルに伝える。書類を探すなんて、スバルからしてみれば書類という類を見たことがない。22XX年にまでなると、紙を使った書類は過去の技術。唯一、使われているのは由緒正しき表彰状くらいだ。

しかし、幾ら理由づけても活路は見出せない。結局は、やるしかないのだ。書類という言葉につまずきながらも、スバルは「大丈夫です。この程度なら」と頼もしいことを言ってくれた。どうも、最近のスバルは、レッドジョーカーに変身して以来、自分が、今、どのような状況にあるのか、自覚が芽生えたようだ。

「頼もしいこと言つてくれるじゃない! フュー、フュー」

ふざけている場合ではないのだが、リーゼは左肘でスバルの脇腹を軽く突つつきながら茶化した。対するスバルは、その茶化しと、笑顔に照れて赤くなり、思わず顔が解けてしまつ。ここにミソラが居合わせたら、飛び蹴り物だ。

一方、ジャッカーとミソラのBチームはトラックが沢山並んでいる同施設の車庫内で待機していた。彼らの役割は、チームWが持ってきた情報を元に<sup>ターゲット</sup>対象であるトラックを探しあてて、チームWの二人をリードすることだ。トラックの車庫内は、懸命に働く従業員の姿と、警備するKPM隊員らで溢れている。車庫内は、学校の講堂以上に広い。元々は、車庫ではなかつたらしいが、需要が高まるなかで、トラック車庫は次第と広くなつていき、このように大きくなつたわけだ。大きい分、隠れる場所はいくらでもある。しかし、開けた構造になつているため、隠れた所で直ぐに見つかってしまうだろう。その二人は、GIを使い、敵の目を欺きながら車庫内の片隅で待機している。

「なあ、ミソラ」

今まで無言の空氣だつた二人間は、ジャッカーが口を開いたことでがらりと変わつた。

「何ですか？」

「スバルのことを守つてやつてくれ。あいつ、あんな風に明るく振舞つているが、実際は結構悩んでいる。この前の廃ビルのときだつて、お前の知らない所で酷く抱え込んでいた。あいつのことを好きならフォローしてやれ・・・」いつ言つセリフって父親が言つよな普通・・・

ミソラはスバルのことが好きだ。スバルもミソラのことが好きだ。だが、今までは単純に「好き」なだけだつた。低い恋愛感情だつたのだ。今のスバルにとって必要なのは、「愛」だ。突然、<sup>ヒオントード</sup>異世界に連れて来られて、親や友人とも離れ離れになつた。そこに唯一居たのが、ミソラだ。無論、あの三人も今となつては一人の保護者みた

いなものが、眞の父親、母親ではない。親の愛から離れてしまったのだ。ミソラならその心境が分かるはずだ。両親と離れ離れになる辛さが。せめて、恋人同士ではなくここにいる間だけ、恋人以上になつて欲しい。ジャッカーはそう言いたかったのだ。彼女以外に、ここに友人はいない。絆のつながりを重視するスバルにとつてそれは、きつい物だ。だが、恋人が一人いる。それだけでも十分なのだ。ジャッカーから話を受けたミソラは、決心した。スバルにとつてのかけがえのない恋人。いや、恋人以上にならうと。

その頃、Wチームの二人は事務室にこつそり入り込み、書類をあさつていた。他の人物が見たら、書類が勝手に宙を舞つているのに驚きを隠せず当然だろう。

「ううん。やっぱりないなー」

如何にも萎えますといふ顔をしながらリーゼは、持つていった書類を机に投げつけた。その衝撃で何枚かの書類がひらりと地面に落ちた。先に事務室で仕事をしていた事務員は、幽霊でもいるのではないかと恐怖している。流石は、ジャッカー特製のゴーストインビジブルだ。

「やついえば、地下室には行ってないですね。そこに行ってみましょつよ」

ネガティブな考えをよぎらせていくリーゼに、スバルは励ましも込めた言葉を発する。

「つして、一人は地下に向かうことになった。

その地下に向かう道の途中だった。思わず声を上げてしまつ程の出来事が起つた。

GIのお陰で見つからないので、余裕に歩いてくる一人。一人の思考は、別の所に行つていた。その時だ。

警報音が施設中に流れ出し、アナウンスが入る。

『監獄内の捕虜が脱走！警戒態勢に入る。非戦闘員は退避し、隊員は、各自戦闘配置に付け！！』

そのアナウンスの直後、上の天井が崩れ何者が降りてきた。その爆発の衝撃で、GIの効果が無効となる。降りてきた物の正体は、

「ソ、ソロー何で君がここにー！？」

スバルは驚愕のあまりに、情けなく腰をぬかしてしまつている。

『てめえ、また出できやがつてー今度は何だー』

ウォーロックがウィザードオンになり、唸つていてる。

そのソロは、地面にはいつくばっている。体には幾つもの傷跡もあり痛そうだ。

彼は、無言で立ちあがると、数秒間立ちつくし、やがて地面に倒れ込み気を失つてしまつ。

「ちょっと、あなた大丈夫？」

何も知らないリーゼは、ソロに立ちあむ。

「何故こんな所に、とりあえず助けよつ」

スバルは、そう言ひながら彼に立ちよつた。

リーゼは、ハンターを取り出しジャッカーと無線をとつている。

『了解、捕虜の回収だな。それと、探していたトラックだが、こちらで見つけた』

「えー? どうやつて?」

『奥の方に、ローテ・ショーン表があった。混乱に乗じてそのトラックに乗り込んだ。さつと来い』

第29話、敵か味方か（後書き）

いよいよ、次回はボス戦？です　ww

### 第30話、ウインディ・ハリケーン

ジャッカーは、スバルとリーゼをトラックまで案内し、その中に乗せた。倒れたソロは、トラックの中に入っていた空の木箱の中に隠し、見つからないように細工した。このトラックは、貿易港まで直行する。身を任せていれば、港までは楽に行けるはず。行き先の途中に検問所があるが、G.I.を使えば難なく通り抜けられる。この前のように失敗することは許されない。オーパーツを奪い取る機会は、これで最後だからだ。

幽<sup>ゴースト</sup>靈状態で、一向が暫く待機していると、やがて、何も知らないトラックの運転手が操縦席に乗り込み、ギアを押した。

リアルライザーのトラックは石油車両と違つて、揺れもなく、排気ガスが出ないため環境にも優しい。ナビに道を設定するだけで後は、車が勝手に動いてくれる。運転手の仕事は、ギアやブレーキをかけることと、安全の確認だ。運転手の給料が下がつたのは、少し問題だが、安全性では明らかに、従来の車両より優れている。何事も安全第一だ。

トラックがセンターを過ぎてから、何時間か経つた。今まで休みなく走り続けていたトラックは、突然、停止した。壁に耳を当てて

見ると、鳥や虫達の鳴き声や、水の流れる音が聞こえる。だが、それだけではない。人の足音や声が、わずかながら聞き取れる。どうやら、例の検問所に到着したようだ。今まで無言だった四人の雰囲気は、更に重くなり、息を殺す。いくらG.I.があるとはいえ、気配を勘付かれる可能性だつてある。それから、しつこく中を探索され、ソロが発見され、そしては、最悪の状態になる。ということだ。

「確認させて貰うぞ！」

グレイ・ウォリアーに電波変換している男たち三人が、トラックのドアを開け、中に入り込んできた。一番手前にいる男が隊長らしく、後ろについている部下に、あれこれと命令している。一方、トラックの運転手は、余裕な顔でタバコを吸っている。電子タバコだ。つくづく、何も知らないということが、どれだけ安全で、危険なのかということを思わされる。

話を戻すが、ソロを隠した木箱は、特殊な技術を用いてG.I.をコードイングしている。見つかることはないだろう。

そうして時間が過ぎて行き、誰一人見つかることはなかつた。無論、木箱もだ。しかし、隊員たちがトラックの中から出て行こうとしたその刹那だつた。

「えつー!？」

スバルのG.I.の効果時間が切れて、ロックマンの姿を彼らにさらけ出してしまつた。両者に、一瞬の沈黙が走る。しかし、その時間も長くは続かなかつた。

「ロ、ロックマンだ!! 捕えろ!!」

「はつー!!」

隊長が、スバルを指をさし、部下に罵声に近い声で命令した。部下二人は、バトルカード「ソード」を装備して、向かつてきただ。

「ロックバスター！」

とつさにスバルは、ロックバスターで一人を仰け反らせた。その隙に、奥からG.Iを解いたジャッカーが、バトルカード「マンティスマダガーリー」で、仰け反つた一人を切り裂く。

「「うわっーー！」」

彼らは断末魔を上げ、その強靭な攻撃に電波変換が解除される。そして、生身の人間が、気絶した状態で倒れていた。

ここで説明してい置かなければいけないことが一つある。電波変換についてだが、これは、スバル達の住む世界には無い機能があつて、デリートされるのを防ぐため、強度な負荷が体にかかると、強制的に電波変換が解除させられる「セーフティシステム」という物がある。デリートというものは、電波体が消滅し、また、その人間も死亡する事を言つ。デリートされれば、電波体は残留電波を使っての復元が可能だが、人間の場合は完全にあの世に逝つてしまつてるので、死者を蘇えさせるなんて、不可能だ。それゆえのシステムだ。両者が生き残つていれば、何時でも戦闘参加は可能だ。いかにも、合理的な手段だと言える。しかし、体にそれなりの負荷がかかる訳だから、解除されたあとは、人間もウイザードも気絶状態になる。

施設内から、どんどんと新手が出てくる。ざつと二十人程度だろうか。いくらなんでも、これだけの敵を一掃するのは難しい。

「捕えろ！捕えるんだ！ここで奴らを逃がしたら、我々に転機

は無い！」

チームFは、全部隊の中で一番戦闘力が低い。よって、今まで捨て駒同然の扱いだった。隊長は、捨て駒から一刻も早く脱したいはずだ。だから、血眼になつてロックマンを探し、そして今、罵声を上げながら命令しているのだ。だが、これも立派な戦い。敵に情をかけるわけにはいかない。ジャッカーは、バトルカード「クサムラステージ」を使って、道を草むらに変えた。

「今だスバル！」

「喰らえ！ ヒートグレネード！ …」

スバルは、火属性のバトルカード「ヒートグレネード」を使って草むらを炎上させた。木属性は、火属性に弱い。喰らうと通常より倍のダメージを受ける。当然、そこに居合わせた隊員たちもだ。

「ギャ――――あちイ、あちイ――つあ――――――！」

炎の痛みが、KPMの隊員たちを襲つた。自分の体が炎上する痛みは、普通の体でいる時と同じだ。セーフティシステムのお陰で、辛うじて命ある。ウイザードも同様だ。

「・・・・・」

スバルは、炎上する草むらを見つめ、押し黙つていた。隊員達には、何も悪気はないはず。彼らには、帰りを待つてゐる者達がいるはず。それが、家族であれ、恋人であれ、友人であれ、それら全ての者達は、悲しみを背負うことになる。スバルは、自分の手で行われたその行為が信じられなかつた。今まで、戦つてきた者達は、悪に満ち

溢れたというわけではないが、それなりだった。しかし、今回はないの罪もない兵士たちを・・・

「心配するな、あいつらは生きてるよ。たぶんね」

ジャッカーが、半ば泣き態のスバルを励ます。隊員たちを殺したのではない。しかし、彼らには、KPMの隊員たちには、それなりに覚悟はあつただろう。

「さあ、先を行くぞ・・・といつ訳にもいかないか」

あまりにも衝撃的な出来事に、トランクはジャッカー達を置いて先に行ってしまった。こうなると、ウェーブロードを使って行くしかないだろ。ジャッカーを含む四人は、非常に、げんなりとした。

「おやおや、増援要請がかかったので来てみれば、こんな状況ですか」

「「「「...」」」

何時の間にやら、自分達の後ろに、翼の生えた悪魔のような姿をした電波体がいた。全く気付かなかつた。周波数すら感じることが無かつた。その悪魔は、ブルーの体に黒い翼、頭にはバイザーがついている。左腕には、「ワインディアタック」のような大きな扇子が備えられている。その扇子は、どうやら、収納が可能なようだ。腰には、ライフル状のレグサガンである。そんな彼は、空中に浮いてロックマンを見下ろしている。

「はじめてまして、こんにちは。私はワインディ・ハリケーン。以後、お見知りおきを。早速ですがロックマン

「えつ！？僕？」

「あなたの他に誰がいますか？お手並み拝見と行きましょうか。もし、あなたが逃げようとするならば」

そういうてウインディは、ミンラ達を指さした。

「スバル君！！」

針状のピットが数機、三人を囲んでいた。恐らくウインディから射出されたものだろう。

「どうなるか・・・分かっていますよね

不敵な笑みを浮かべる彼に、スバルは苦虫を噛み碎いたような表情になつた。

「くつー！ソラちゃん達は関係ないだろー！」

「関係無いはずないでしょ。彼らはあなたの味方、つまり、私の敵です。敵を駆逐するのは当然の話。違いますか？」

目的が何であるかと戦いは戦い。ウインディの言つていることは、まさしく正論だ。敵か味方かで全てが決まるのだ。敵なら殺すまで「こう」となる。

「さて、お喋りはここまで！殺りましょ。」<sup>や</sup>

そう言つてウインディは、自分の翼を羽ばたかせ、スバルに向かつ

てきた。

対するスバルも身構える。

「ウヨーブバトル・ライド・オン！！」

スバルはバトルカード「マッドバルカン」を使って、ウインディに狙いを定めて脅威を放った。しかし、破壊した手ごたえは無かつた。

「当たりませんよ！」

ウインディは、前にジャッカーが言っていた「翼の舞い起した風によって弾道を変える」という戦法を使つたのだ。それにより、バルカンの弾丸は一発もヒットしなかつたのだ。

「くそつー！」

「今度は、こちらから行きますよ。ウインドスラッシュ！」

ウインディは、強力な風を巻き起こした。そして、それが強靭なものとなり、スバルの体を切り裂いた。まるでカマイタチのようだ。

「うつー！あつー！」

『大丈夫か！スバル！』

見かねたウォーロックが、安否を問う。この程度の攻撃なら、なんとか凌げそうだ。

「大丈夫だよ」

「喋っている暇がありますか?」

『「つーーー」』

ワインディは、余裕そうな表情を浮かべながら、攻撃で態勢が崩れかけたロックマンに、猛スピードで突進してきた。

「バトルカード、ロングソードーー！」

向くつてくる敵を向かい撃つため、スバルはロングソードを装備した。ジャッカーからのアドバイス通りの方法だ。タイミングはシビアかもしれないが、攻撃するだけした方が攻撃しないより幾らかましだ。

「それで、私を斬れますかな?」

「舐めるなー！」

ソードで斬撃を繰り出すとするが、やはり避けられてしまう。

「うつーーー！」

ワインディは、スバルの両肩を両足で鷲掴みにし、地面に叩きつけた。

「ああっ！－！」

思いつきり地面に叩きつけられたのだ。痛みを感じないはずがない。さつきまで、悠然としていた自然の渓谷の風景は一変していた。近接も、遠距離もだめだった。他に方法があるとれば、バトルカードの性能に頼るしかない。

「バトルカード、スペイムネット！」

この前、ジャッカーから貰ったバトルカードだ。軍用なだけに威力も高く、使い勝手もいい。ランチャーになつた右腕を、ウインディに向けロックオンする。標準が定まると意識を集中させた。あのウインディのことだ。ミサイルは簡単に破壊されてしまうだろう。しかし、この能力は、ミサイルが本命ではない。中に入っているネットを使って、敵の動きを封じるのが目的だ。いくら颶爽とする彼でも、これには敵わないはず。

「喰らえ！－！」

スバルは叫び、ミサイルを発射した。飛翔体を追いかけるミサイルに驚いたウインディだが、何のことはなく扇子でそれを破壊した。しかし、そこからネットが飛び出し、彼の身動きを封じる。思惑通りだ。

「なつ！何ですと！馬鹿な！」

ウインディが手古摺つていてる間に、ロックマンは、レッドジョーカーにファイナライズし、NFBを繰り出す為、ノイズを貯めた。

「くつ！－！何だ？この蜘蛛の巣のような網は斬れないぞ！」

「ロック、ノイズ率は？」

『200パーセントだ。行けるぞ』

スバルは結果に満足し、無言で頷いた。

「ノイズフォースピッグバン！レッドガイアイレイザー！」

問答無用のレーザーに、ワインディは圧倒され、電波変換は解除されたように見えた。だが、現実はそういうまくは行かなかつた。流石に、チームXの隊員が、この程度でやられるとは思えない。攻撃が振りかかる前に、扇子でスペイムのネットを自力で斬り裂いて、見事に抜けだしていた。その結果にジャッカーは驚愕した。当然だろうが、あのスペイムのネットを切り裂くなど有り得ない。これが特殊部隊チームXの実力ということなのだ。

「しかし、良くやつてくれましたね。私をここまで本氣にして、楽しませてくれます。オーバーシステム、作動！」

「ん？」

ワインディの雰囲気が一変し、攻撃的になつた。スピードが上がり、背中のブースターが点火した。オーバーシステム。これは、ウイザードの本来の力を引き出すものだ。特殊部隊チームXのウイザードは他のイグザムやグレイ、ライガと比べて性能が上だ。しかし、その性能がゆえに、人体に影響が掛り過ぎるのだ。そのためのオーバーシステムということになる。一定時間、能力全てを開放することができるこのシステムは、人間自体をも覚醒させる。そのオーバードライブについていけなかつた。レッドジョーカーで

は機動力が弱い。ワインディからは、「おトヅセ」という汚名を着せられるほどだ。

『おい、スバル。作戦変更だ。ブラックエースに変身するぞ』

「どうして？」

『ブラックエースのほうが機動力は上だ。奴を倒すなら、ブラックエースの方がついて行けるはずだ』

「じゃあ」として、ロックマンが気に食わなかつたのか、ワインディは顔をグレーにした。

「ほつ、私の前で作戦会議でもしているのですか？ ふつ、無駄ですよ。そんなことしても勝てるはず無いのに。止めましょうよ無駄な抵抗は。大人しく投降してください」

スバルは、ワインディをキツと睨みつけ、ブラックエースに変身した。無言で剣を抜き、ワインディに立ち向かう。

「はあ、いらっしゃつても無駄ですよ！」

対するワインディもバトルカード「ソード」を構えて、スバルと鎧つぱせり合いになつた。始めはワインディが優勢だつたが、だんだんとワインディのソードにひびが入つてきて、終にはソードは折られてしまった。

「な、なんと！？」

態勢を立て直すため、ワインディはスバルから離れた。全速力で圧

倒的にスバルと距離の差をつけた気がしたが、実際はブラックエースの方が速く、すぐに追いつかれてしまった。

「速いですね、それ

「ブラックエースを舐めるな！」

今度は、今までミソラ達を取り囲んでいたピットで、スバルにビーム攻撃を繰り出した。しかし、スバルは、ソードで全て防いだ。

「ビーム攻撃を全て回避したか。ならば、これはどうだブラックディ・トルネード」

ウインディが回転すると、巨大な龍巻が巻き起こり、周辺の物を巻き込んで行った。

「ブラックホールエナジー！！」

向かってくる龍巻に対しスバルは、手のひらに小さなエネルギーボールを作り、それを龍巻に投げつける。そしてその龍巻は、そのボールの中へ消えていき、終いにはボールは消滅した。

「まつ、まさか！我が最大の技、ブラックディ・トルネードが敗れたといつのかー！」

「今度こそノイズフォースビッグバン！！ブラックエンドギヤラクシー！！！」

お馴染みの必殺技、ブラックエンドギヤラクシーを繰り出した。ウインディはその脅威から逃れようと、全速力で逃走するが、ブラック

クホールの中に飲み込まれていった。

「おのれ、ロックマン！！たとえ私が敗れようと、他の者達があなたを、きっときっと捕えるでしょう。そして、そして・・・フツ、フフフフフフフフ！！ハハハハハ！！！」

### 第31話、感じる・・・（前書き）

今、思つと、もう31話なんですね～。  
なんか、再びこの小説を振り返つてみると、中学校の頃の思い出や、  
受験勉強に追われていたあの頃が浮かび上がつてきますね～  
サブタイトルは、変な意味ではありません。勘違いしないよつて（  
笑）

トラック運転手が恐怖のあまりに、トラック」と逃げてしまったため、渓谷からの移動は徒步ということになった。正確には、ウエーブロードの上を走つていくのだから、さほどの時間は掛らない。移動もトラックの中に居た時よりかは、スピードィに行ける筈だ。ステルスPGMのお陰で、ウエーブロードを通つても周波数が特定されることはないから、身を心配する必要もない。しかしそれなら、わざわざ危険を冒してまで、初めからトラックを捕まえる必要など無かつただろう。と言いたくなるかもしないが、重要なのは、スピードではない。港では隠密行動が主となるため、不要な戦闘は避けたい。いくらG.I.があるからといつても、制限時間がある。そうなれば、戦闘は免れないだろう。先のウインディとの戦いは、偶然と偶然が重なつて起こつた事にしか過ぎない。要するに、計算外だつたということだ。

スバル達は、無人となつた検問所の施設で暫く休憩してから港に向かうこととした。スバル自身、戦闘の疲れも癒えていないうだろ。それに、皆、ずっとトラックの中に乗つていて体が固まつている。少しの運動が必要だ。しかし、休憩が必要とはいえ、長居はできない。いずれ、敵の増援が、ここにやつてくるだろうから。

「しかし、予想外だつた。まさか、あのネットを切り裂く者がいるとは・・・いや、違う。予想外なんかじやない。全く、俺は馬鹿だ」

ジャッカーは、先の戦闘での驚愕の事実を呟いた。それだけ、衝撃的だつたのだろう。スパイムネットは、元々のバトルカードのレベルから、彼がカスタマイズを加え、攻撃しやすいようにしていたし、ネットも通常よりも粘着力を上げていた。正直、彼の頭の中には、スバルがスパイムネットを使ってウインディ・ハリケーンを倒す姿

が映像化されていた。勝算しかなかつたと言つてもいいほど、彼には自信があつたのだ。ところが、それを、いとも簡単に破られてしまい、怒りどころか憎しみを感じるくらいだ。自分の甘さと不甲斐無さに。落ち着いて冷静に考えれば、あのチームXの隊員が、あれほどシヨボイ攻撃で倒せるはずなどないのだ。それを、勝利に置き換えていた自分は、馬鹿としか言いようがない。

「過ぎたことを言つても仕方ないですよ。結局、勝てたんだからそれでいいじゃないですか」

見かねたミソラが、ジャッカーを慰める。しかし、彼は慰めなど求めていない。慰めを受けても、自分が惨めになるだけだ。彼が欲しいのは結果だ。無論、スバルが勝利したのは喜ぶべき結果だ。ジャッカーも、ミソラやリーゼに混ざつて彼を称賛した。しかし、自分の技術を使って、勝利したという結果が欲しいのだ。自分の技術がスバルの助けになつて欲しいのだ。ジャッカーは、何を隠そう兵器開発者だ。結果が欲しいのは研究者の性である。しかし、現実は甘くない。ジャッカーの理想の結果など、そう簡単には舞い込んでは来ない。ただ、準備して待つしかないのだ。

「・・・ そなのかもしれない。だが、俺が欲しいのは」

「しつ！ 静かにして！」

ジャッカーの言葉は、リーゼによつて遮られた。リーゼは壁に張り付き、窓から外の様子をうかがつてゐる。その険悪な表情から、何かが起こつてゐることが予想できる。

「敵の増援部隊よ。思つたより行動が速いわね」

「それだけ俺達を逃したくないのだろう。急いで、敵に見つかると厄介だ」

コーヒーのマグカップや、皿やらを元あつた場所に直し、G.I.を起動させ、全員が大わらわでその場から立ち去った。ウェーブロードを使って行けば、港までそう時間はかかるないはずだ。

当然だが、スバル達の存在に気付くＫＰＭの隊員などいる筈もなかつた。

スバルは、ウェーブロードに上ると、その感覚の悪さに驚いた。以前、この世界に迷い込んできた時に見たウェーブロードは脆そうだった。実際、見た目通りだった。歩くよりスピードが出るのは当然の話だが、スバル達の世界の物と比べ、スピードが出ない。それに、道幅が狭く一人しか通れそうにない。ちょっと派手な動きをすると、つり橋の様にぐらりと傾く。戦闘になればどういう結果になるか知れている。

『うわっ！－何だこのウェーブロードは！？スバル、落ちないように気をつけろよ』

「うん。ウォーロックもね」

『俺が落ちるわけないだろ！』

ウォーロックは、電波の力で宙に浮いている。空を飛ぶことは出来ないが、周波数変換による瞬間移動なら可能だ。

「喋っている暇はない。急ぐぞ！」

話している一人に緊張感の無さを感じたのか、ジャッカーは注意して急かした。

港に着いたのは三時間後だった。渋谷を出たのは夕暮れ時、本来なら五時間はかかる道のりを三時間で、しかもウイルスやウイザードに見つかることなく来れたのは奇跡と言える。G.Iの効果が斬れるという事態が起こりはしたが、手前の良いジャッカーが用意した予備のエナジーのお陰で何とか凌ぐことが出来た。そして、ようやくやつて来た貿易港。G.Iフル稼働中で、皆はウェーブロードの上で港を見下ろす形となっている。そんな四人は自分のハンターから、ルーカスと音声通信を取つっていた。

『よし。ようやくここまでたどり着いたな。リーゼとジャッカーは、保険として陽動作戦を行い、俺の指示に従いながら、ダイナマイトを使って爆破騒ぎを起こし、警備網を攪乱してくれ。スバルとミソラは、オーパーツが保管されている倉庫を見つけ出し、それを奪取してくれ。恐らく、オーパーツを奪うことが出来るのは今回が最後だと考えていい。各員、気を抜くな！幸運を祈る』

通信はそこで切れた。これからは本腰を入れることになる四人は、少し緊張した面持ちだ。リーゼとジャッカーは自分の役割を果たす

為、スバル、ミンラと別れた。

ジャッカーは、貿易港の警備詰所に近い倉庫に着いた。

「「」にダイナマイトを設置すればいいんだな？」

『ああ、発見されなによつにな』

「わあつてらあ

いちいち返答するのが面倒くさくなつたのか、ジャッカーの口調は投げ槍調になつた。リアルライザーのダイナマイトを取り出し、倉庫の側面に設置する。この辺の倉庫群は今は使われていないうで、従業員の姿は無く、巡回している警備電波体しかいない。

「設置終了した。」れより集合ポイントに向かつ

『了解』

ジャッカーと別れ、リーゼは廃棄されたタンカーの前に来ていた。リアルライザーが普及して以来、石油燃料を使用するタンカーは、全般的に廃棄された。今は、乗り心地も良く、安全度も高いリアルライザーの輸送船に世代交代している。

「「」にダイナマイトを設置するのね」

『ああ、ジャッカーは既に任務を終えて集合地点に向かつている。急いでくれ』

「こちこちつりさー！黙れ！…』

何かと皆から酷い扱いを受けるルーカスだった。

「感じるよ。あの感覚・・・」

「スバル君・・・」

所変わつて、スバルは、自分の感覚を頼りに進んで行く。そして、着いた先は、コンテナターミナルに近い場所にある倉庫だった。あの感覚、あの感じ、それぞれの種族の思いや願い、そして憎しみが詰まった遺産。<sup>オバッ</sup> 懐かしい感覚。短い時間だったが共に戦つた。忘れる筈もない。スバルは、その感覚に引き寄せらるかのように、その場所にたどり着いた。

### 第32話、敗北と苦汁

スバルは今、倉庫の前にいる。コンテナター・ミナルに近いこの場所では、G.I.を使わなくとも積み上げられたコンテナ群がスバルとミソラを隠してくれるだろう。だが、念には念を入れG.I.は起動したままにする。

この倉庫の中から感じる波長から懐かしさが湧き起こつてくる。スバルは、その場に茫然と立ち尽くしていた。その感覚が、スバルを魅了し、そうさせているのだ。ミソラが声をかけても、返事は無い。ウォーロックさえもが茫然としている。

「ちょっとスバル君！…スバル君！…スバル…！」

パチッと、手と頬がぶつかり合つ音が港内に響き渡つた。現在もまだ、従業員は作業を続けている。機械音や、コンテナなどしがぶつかり合う音などで、その響はかき消されてしまい、誰もその音に気づく者などいなかつた。ただし、スバルとウォーロックを除いてはの話だが。

「イテツ！あれつ！？僕どうしてここに？」

「覚えていないの？」

どうやらスバルは、この倉庫前に来るまでの自分の記憶が無いらしい。酔っ払いでもあるまいし、ましてや記憶喪失でも無い。波長に魅了され続けていた彼はその何とも言えない感覚に脳が集中してしまい、記憶を刻み込むことすら忘れていたようだ。人間の記憶という物は、常に刻み込まれ、そして、何時でも管理されている。その管理を放棄してしまうほどの力だ。よほどの物だと推測がいく。

『どうやら俺達は、オーパーツに惹かれ過ぎていたようで、ここにくるまでの記憶が全くと言つていいくほどの白紙だ。この感覚、実際に飲み込んだことのある俺なら分かるぜ』

一年前の夏休み、ミソラと二人でロッポンドーヒルズの博物館に行つた時の話だ。展示されていたベルセルクの剣が、不可抗力によつてソロに持つて行かれそうになつていた時、とつさにウォーロックが剣を噛んでその場凌ぎをしたがために、飲み込んでしまい、一時はどうなるかと大変だった。

「その思い出。懐かしいね」

『ああ・・・』

二人が昔の戦いの思い出に感慨にふけつていると、スバルとミソラのハンターに通信が入つた。通信の送信元はルーカスだつた。

『おい何やつてんだよ！持ち場を離れるなつて言つたじやないか！』

『！』

ルーカスは物凄い陰相で画面越しではあるが、二人を怒鳴りつけた。この作戦では、リーゼとジャッカーがダイナマイトを設置した後、二人は撤収。ポイントで起爆ボタンを押し、ダイナマイトを発火。その混乱に乗じて倉庫に向かう。ということだった。これは、G.Iの効果が切れた時のための保険ということだった。それに、撤収する際にも混乱のお陰で脱出行動も楽に行えるからだ。

「えーと、あの、すいません。僕の所為で・・・」

スバルは、自分を責めながらルー・カスに謝罪した。まるで、親にでも怒られたかのように。それを見ていたミソラは、スバルに助け舟を出した。

「いえ、私の所為です。私があそこでスバル君を止めていれば」

先に先にと歩いていくスバルに、まるで同調するかのようにしていたミソラにも責任はある。ルー・カスは、申し訳なさそうに謝る二人を更に問い合わせることとは、彼の人間としての性がそれを許さなかつた。

『だあーーーもうー謝らなくていいから、謝る必要なんてないからーさつさとオーパーツを奪つて帰つてこいー気をつけろよー』

言葉ではそう言つてはいるが、中々と優しく、良い奴だ。田常の会話からも、そういうことが予想できる。

オーパーツが保管されている倉庫の扉には、ロックが掛つてはいる。そのロックは「倉庫のロックの電腦」にアクセスし、その中で解除行為を行わなければ、扉が開かないという仕組みになつていて。空を見上げればウェーブロードが浮いていて、そのウェーブロードは倉庫の電腦に繋がっていることから、ウェーブロードから電腦内にアクセスできるという仕組みであることが考えられる。早速、二人は周波数を変換させ、ウェーブロード上に上がる。その刹那、

「ここには反対方面にある倉庫群の中の一部が、爆発した。リーゼとジャッカーの仕業だ。この爆発を見ていた近くの警備兵は、慌ただしく倉庫の方方面に走つて行つた。

「これで探索が楽になるね。ロック、電腦内にアクセスできる?」

『無理だ。アクセスロックが掛つていて』

倉庫内にはオーパーツが保管されているのだ。そう簡単には通してくれないだろ?』

「ロック、何とかならない?」

『お、俺に言われてもな~』

スバルは、相棒のウォーロックに、この状況を開いてくれという視線を送つてゐる。対するウォーロックは、自分にはどうもないことを頼んでくるので、どうしていい物かと、返答に困つていた。

「ルーカスさんに電話したら?」

今までの悪戦苦闘をあつたりと言ひのけるように、ミソラは呟いた。その何気ない一言が、彼らの助け船になつた。

『「その手があつたか!」』

スバルとウォーロックの声がはもつた。普通に考へていれば気付きそうな物なのだが、オーパーツに引き寄せられている所為なのか、通常の思考が出来なくなつてしまつていたのかもしれない。スバル

は、右腕を顔の位置まで持つてみると、通信ボタンを押した。ルーカス宛てだ。しばらく、コール音が鳴り響く。やがて、コーヒーマグカップを持ったルーカスの顔が映し出された。さつきは持つていなかつたが、のどが渴いたのかもしれない。実は、彼は結構なコーヒーの愛好家である。

『どうした？スバル』

「オーパーツが保管されている倉庫の前に来ているですが、倉庫の扉にロックが掛っているです。ロックを開けるためには、電腦内からロックを解除しないといけないんです。そのアクセス権限を持つていないんで、なんとかなりませんか？」

スバルから話を受けたルーカスは、よく刑事ドラマなどで主人公がやるポーズをしながら思考を張り巡らせた。何秒か考えた後、「聞いた！」とでも言つかのように、手をポンと叩いて言った。

『この前、ジャッカーガーアクセス解除プログラムを作つて、それを俺に渡して来たんだつた。忘れてた。よし、それをメールに添付して送ろう』

そう言つてルーカスは、一方的に通信を切つた。思い出したという興奮のあまりに、周りが見えなくなつてしまつていていたのだろう。興奮して周りが見えなくなつてしまつたのは、彼の直すべきポイントだ。歴史の話になつて興奮してしまつのが、その例だ。通信が終了して何分か経つた後、アクセス解除プログラムが添付された本文なしのメールが送られてきた。

「これで大丈夫かな？」

スバルは、アクセスポイントに近付いた。普通ならアクセスロックのホップアップが右腕に表示されるのだが、アクセス解除されて、アクセスを問うホップアップが表示された。

「行こう、ミソラちゃん！」

「うん、行こうー。」

ミソラから送られてきた愛想笑いに、心が躍ったスバルだった。二人の様子を見ていたウォーロックは、俺を忘れるな。という視線を送り、口を開こうとしたが、ハープの真空飛び膝蹴りで遮れてしまつた。ウォーロックの空気が読めない性格は、一向に治る気配を見せない。

電腦内に入ると、強制的にG.Iが解除されてしまった。その自体にロックマンとハープノートは、驚愕した。一人で顔を見合せている。

「なつ、何でG.Iが？」

驚愕したスバルの顔から出た一声は、それだった。

『時間切れでは無いようだな。どうやら、何らかの理由でG.Iが強制解除されてしまったようだな』

ウォーロックは、自分の憶測を一人に語つた。その瞬間、ジャッカーに対する怒りが一人と一体の心に湧きあがつてきた。普通、そういうことは伝えておくべき事だ。忘れていたと笑つて言えるほどの

物ではない。だが、彼のことだ。「すまん、忘れてた」と二コ一コしながら言つだらう。その彼の姿が彼らの頭のに映し出され、一人と一体は、諦めの溜め息を吐いた。

「かつ、考えていても仕方がないよ。速く、ロックを解除して帰ろう」「う

「そうだね。でも、こういうことは早めに言つてほしいよ」

呆れ調でスバルはミソラに言つと、彼女は愛想笑いを返すが、その笑いにはジャッカーに対する怒りとあきらめが入り混じつて、なんだか、ルナのようなドス黒いオーラが出ていた。それにスバルが身震いしたのは言つまでもない。

氣を取り直して、一向は奥に進んで行く。G.Iの保護が無いため、人目には注意していたのだが、やはり、一体のウイルスに発見されてしまう。

「テキ、ハックエン！ デリート！」

「つ！ ロックバスター！」

つるはしを振り上げて攻撃しようとしてきたウイルスに、とつさの反応でスバルはロックバスターを放つた。つるはしが地面に接するよりも、ロックバスターがウイルスを射ぬくほうが速く、ウイルスは、うめき声を上げる暇もなく、デリートされた。

「ふう～」

「大丈夫？ スバル君」

肝を冷やして汗を出していたスバルを、安否を問い合わせながらソラは、彼の額の汗を拭った。スバルの頬は自然と赤くなる。そうやって、二人の顔はどんどん近くなつていき、そして、唇が重なる。こんな状況下でいい度胸だ。

『お、おいーそんなことすつ、ブハツー!?』

『あんたは黙つてなさいー。』

遮ろうとしたウォーロックをハープは、またも真空飛び膝蹴りをお見舞いし黙らせた。その後、戦闘を混ぜながらも、ロックシステムを破壊して倉庫の扉を開けた。

倉庫の扉前、リアルライザーの扉は、やけに鉄臭く、所々に錆が付着している。そういうモチーフらしい。電波の力で何でも作れるようになつたわけだから、雰囲気は大事だ。

「こよにょ、だね」

『ああ・・・』

一向は緊張した面持ちだが、何処となく胸を膨らませているように見える。それもそのはず、オーパーツさえあれば、元の世界へ帰るのだから。胸を膨らませているのは、頭の中で、元の世界へ帰つたら最初に何をしようかと考えているからだろう。よくある思考パ

ターンだ。皆の期待を背負つて、スバルは、扉に手を当てる。だが、その時だつた。

「止まれ！」

ふと、後ろから声をかけられた。相手に恐怖心を植え付けさせるような、低くて重い声だ。スバルが後ろを振り返ると、なんと、そこにはスバル達をこの世界へ連れてきた張本人が立つていた。天然がかかつた銀髪、漆黒の瞳、そして、何者も寄せ付けぬ気迫。ボロボロの「コード」を羽織つた謎の青年だ。

「ヤレ」で何をしているのだ？ ロックマン？

ギラリとスバルの顔を睨みつけながら、その男は近付いてくる。その様に、ミソラは次第と二人から距離を取る態勢になってしまった。

「！」の倉庫の中の物を盗んで何をする気だ？ 開市にでも売るのか？

「・・・・・」

スバルの心を恐怖心が支配してしまつていて、声が出ない。今まで感じたことの無い恐怖だつた。まるで、蛇に睨みつけられた蛙のような感覚だ。

「はつ！ 全く、お前みたいな犯罪者がいるからこんな！」時世だ

「・・・・ち、違う」

霸氣を出している青年の、あまりの恐怖心に声すら出さない、といったスバルだが、やつとのことで出た一聲だつた。

「なにが違うんだ」

「ほ、僕は・・・何も、してない」

事実だ。廃ビルの時の隊員たちに言った通り、彼は何も悪事をふるつてはいない。むしろ、その逆だ。悪を行う物を倒し、隣に居る大事な人の笑顔を守る。彼の所業が、どう伝わっているのかは知らないが、彼が犯罪者のはずがない。

「勝手にほざいてる。ブラックリストの事実は覆せない。ついて来て貰うぞ」

青年は、そう言ってスバルを強引に連れて行こうとした。その刹那、音符の攻撃が青年に向かつて飛んできた。

「つ！」

青年はスバルを押し倒し、防御態勢を取る。その攻撃の衝撃で、コートがずれ落ちる。彼の体が外にされけ出してしまった。すぐさま男は電波変換する。眩い光が辺りを包みこむと、一人の屈強な戦士が登場した。体は、白と黒が入り混じっていて、顔にはグレーのバイザーを装着している。両腕の上手首にはソードが飛び出すように装置が施され、隙間部分がある。マキシマムソードという物だ。ミソラからの攻撃が止むと、両手首からソードが飛び出る。そして、ミソラに向かつて行つた。

「スバルくん！ 今のうちに逃げて！」

「えつ…？ でも、ミソラちゃんは…」

「いいから速く！」

ミソラは、ギターでソードからの攻撃を受けとめながら言った。スバルを逃がす為だ。青年もとい、ＫＰＭの狙いはスバルだ。彼を逃がすという策は妥当だといえる。

「必ず、帰ってきてよ！」

「当たり前じゃん。私は、スバルの恋人だよ」

状況も状況であつてか、ミソラがスバルの名前を呼び捨てした。やはり、呼び捨ての方が恋人という感じはでる。だが、そんな悠長なことを言つている場合ではない。現に、力ではミソラより男の方が上だ。じりじりと、後ろの方に追いやられていく。スバルは踊り出したくなる心境を押さえて、頷くだけし、撤収ポイントへと向かつた。今、オーパーツを取るほどの時間が無い。とりあえず、一旦退くべきだ。

「奴はいい仲間を持つたものだな」

「えつ！？・・・ぐふつ！…！」

スバルが行つてから暫く経つた後、男はそう呟いた。男の予想外の発言に瞬時、ミソラは呆ける。その隙を男は見逃さなかつた。左腕のソードを直し、ミソラの腹部を思いつきり殴つた。ミソラが倒れ、彼女が気絶したのを確認すると、ロックマンの後を追つた。

その後、スバルは猛スピードで走り、撤収ポイントの近くに来ていた。そこは、沢山のコンテナが山積みになつていてトラックや、フオークリフト、クレーンなどがあり、爆発して沈みかけの無人の輸送船と、無傷の輸送船、一隻がある。俗に言う、コンテナターミナルという奴だ。このエリアには、入っ子一人居ない。陽動がバレたのか、全員、退避しているようだ。

「もう、ここまで来れば大丈夫だろ？」

『ああ・・・ん？スバル、あの野郎の周波数を感じる、近付いてきてるぞ。気をつけろ！』

スバルは、近くのコンテナに隠れようと辺りを見渡す。隠れられそうな所は沢山ある。一つ、空になつたコンテナが開きっぱなしになつているのを見つけた。その中に隠れようとしたが、遅かった。

「ここにいたか！ロックマン」

スバルの後ろのウエーブロードに、あの男が立つていた。

「つ！お前が、ここに来たといつことば、ミソラちゃんを・・・許さないぞ！」

さつき、男から感じた恐怖心は消え失せ、今はただ、ミソラを手に掛けた彼が許せなかつた。しかし、完全に恐怖心が消えたわけではない。その心境を押さえこんでいるのだ。

「お前、とは失礼な。俺はロゼットだ。電波変換時はロゼット・マキシマム。特殊部隊チームXの隊長だ」

「どうだつていい！バトルカード、マッドバルカン！」

スバルは、バトルカード、マッドバルカンを装備し、その脅威の銃口をロゼットに向けた。しかし、ロゼットは、近くのコンテナを使つて三段跳びをし、バルカンの銃弾から逃れた。そしてスバルの方に降り立つた。バルカンを撃ちながら、スバルはロゼットを目で追うが、彼の次の行動が頭の中によぎつた。そのため、彼が後方に降り立つたと同時に、すぐさま彼の方向へ振り向き距離を取つた。そして、近接戦闘に備え、新たなバトルカードを読み込もうとするが。

「バトルカードを読み込ませていい暇があるのか？」

「えつー・うわー！」

ロゼットはマキシマムソードを装備し、地面を蹴つてスバルの方に一瞬で近付き、彼の体を斬りつけた。スバルは、その攻撃の威力を有効活用するため、一度、アクロバティックに空中で一回転。そして、地面に降り立つ。だが、ロゼットはスバルの行動を予想していたようだ。

「バトルカード、ショットガン」

「ぐはーー！」

軍用バトルカードである「ショットガン」をロゼットは読み込ませ

ていた。そして、その猛威を振るう。マキシマムソードは、バトルカードとの併用が可能なようだ。普通のバトルカードでは自分の手が変換される。だが、マキシマムソードはソード自体が手首についている装置の小さな隙間部分からでているので、手は変換されていない。従って、バトルカードの併用が可能になる。

スバルは、ショットガンの威力によつて後方に吹つ飛んでしまう。  
その痛みが体に迸るが、

その痛みに時間を食うていい暇はない。体中の痛みを押さえこんで、立ちあがつた。ロゼットは、ショットガンを撃つた位置から微動だにしていない。

「戦闘力は高いようだが、なんとも哀れだな」

「くつ、ロツクバスター！！」

何発も、何発も撃った。だが、そのビームがロゼットの体を貫くことは無く、全てソードで受け止められてしまう。そうやって、じりじりと一人の距離が縮まっていった。

「もう止める。無駄だ」

「バトルカード、キヤノン、キヤノン、キヤノン！ ギヤラクシア  
ドバンス、インパクトキヤノン！！」

ロゼットの言葉を無視し、スバルはギャラクシー・アドバンスであるインパクトキヤノンを放つたが、軽く避けられてしまつ。

「バトルカード、スタンハンド！」

「ハハ、まあまあまあまあ……」

ロゼットは、マニーハンドのようなバトルカードを装備し、手を地面につきつける。すると、スバルのいる位置に地面から一本の手が生えてきて、それに足を掴まれる。それと同時に、スバルの体に何百万ボルトの電流が流れた。当然だが、それなりの電撃が流れれば、気絶してしまう。スバルの電波変換が解除されると、ロゼットは、彼の小さな体を抱え、ハンターを持ち、何処かへと消えて行つた。ロゼット、特殊部隊チームXの隊長は、この陽動作戦を予想していた。ルーカスと親しい中にあつた彼は、彼がこの状況でどのような作戦を練るか、だいたいの察しがいつていた。警備員をわざと、陽動にはまったく見せ、誰も居なくなつたと同時に、ロゼットが探<sup>クリア</sup>索するというのだ。

第32話、敗北と苦汁（後書き）

第3章、～END～

### 第33話、君だけを（前書き）

お久しぶりです。

長々と更新できずすいませんでした。

### 第33話、君だけを

港での戦闘から二日が経つたが、未だスバルが離島の何処に居るのか掴めぬ状態だった。それどころか、その離島に渡ることすらできぬ状態だ。離島には、船かウェーブロードを使って渡るのが普通だ。もう一つの手段として、ノイズウェーブがあるがKPMの部隊が占拠していいジャッカーお手製のステルスPGMでも潜入は厳しい。なぜなら、ステルスPGMにはノイズの耐性が無い。PGMにノイズが干渉した場合、当然だが、正常な作動が望めなくなる。

余談だが、ステルスPGMのGIは電腦内にアクセスすると効果が無効になる。ステルスPGMも万能ではないということだ。

「・・・・・！」

ミソラは、ベッドからガバッと起きると、辺りを見渡した。そこはプレール湾海底施設の医務室だった。ロゼットとの戦闘により気を失っていたらしい。何箇所か擦り傷があるが、ガーゼによる処置が施されていた。

『気がついたのねミソラ』

「ハープ……」

相棒のハープが目覚めたミソラにハンターから声をかけてきた。ハープの面持ちは何故か暗い。

「スバル君は？」

ミソラがその言葉を発すると、ハープはその顔を更に暗くし、無言で首を横に振った。

「・・・そう・・・」

ミソラはハープの仕草を見て重い声を発した。彼を思つ気持ちが、彼女の心境を重くした。

彼女は自分を、自分のことを呪つた。彼を守ることが出来なかつた自分を。今までは、彼に守られて生きてきた。だから、せめてもの恩を返したかった。出会ってくれた恩、一緒に戦ってくれた恩、今まで守つてくれた恩、そして、自分のことを好きになつてくれた恩。それらの恩を返したかったのだ。だが、返すどころか、敵の手に渡してしまった。後悔と、自分への憎しみが募るばかりだ。

同時刻、ボスニア離島の某所

そこには治療室の様だ。沢山の医療機器と薬剤がある。そして、酸素マスクを取り付けられ、眠っているスバルの姿。そして、その姿をガラス越しから眺めている一人の男が居た。

「星河スバルの様子はどうだ？」

「見ての通り、未だに目覚めぬままです。相当、身体的にも精神的にもショックが大きかつたのでしょうか？」

ジンは、白衣を着た医員と話し込んでいた。内容は、先日捕獲したスバルについてだ。

「とてもではありませんが、尋問は無理でしそうな。身体も心も安定していませんので」

「回復するのを待つしかない。こうとか・・・」こんな小さな少年が犯罪者とは、とても思えん」

そう言って、ジンは腕組みをする。そして、その行動に呼応するかのように医員は答える。

「全くです。でも、上層部の命令には逆らえない。でしょ?」

「ああ、やつてこむ」とと云つてゐるところが矛盾しているよ。何のための平和を守る軍隊なんだか」

ジンは、嘆きにも聞き取れる言葉を溜め息と共に吐き出し、ガラス越しのスバルの小さ過ぎる身体を見つめ直す。

SIDE : スバル

僕は、何も無い空間に居る。何も無い、無だ・・・・・いや、これは夢だ。だが、夢だと分かつていても、まるで自分が虚空の空間に居るようを感じる。宇宙の果て? 死後の世界? 分からない。ただ此処には、光は無く。その光を光と認識する他の命も無い。た

だ、自分一人。寂しくポツンと立つてゐる。

「これが、『無』なのか・・・」

そこには、相棒のウォーロックも、げらげら笑うゴン太も、パンパン怒る委員長も、懸命に背伸びをするキザマロも、につこり笑うツカサも、睨みつけるソロも、うまい棒をサクサクいわせるシドウも、爽やかに振り向くルーカスも、作業中に眼鏡をクイッ、とあげるジヤツカーも、温かみを感じるリーゼも、美味しいカレーを作つてくれる母のあかねも、強く、そして気高く自分を包み込む父の大吾も、そして、いつも隣で微笑んでいたミソラも、誰も居ない。本当に自分一人だ。確かに、前にソロが言つていた孤独とはこのようなものなのだろうか？・・・・いや、そんな『孤独』とは比べ物にならない。ただ、無限に続く宇宙の虚空中に、浮いているかのような、そんな錯覚を覚える。

僕は辺りを見渡した。星はどこだろう、銀河はどこだろう、太陽系はどこだろう、地球はどこだろう、日本はどこだろう、『ダマタウン』はどこだろう、僕の家はどこだろう・・・・忘れないように、僕は単身歩き出した。行く宛てもないのに。ただ、闇の中を歩く。そうやっても何も変わらないのに。

「・・・・・・・・!？」あの光は?

気がつくと、僕は眩い光に包まれて・・・・!――

「久しぶりだね、ウォーロック。何年ぶりかな？」

あれは、大人の僕？

『さあな、一々覚えていない』

「ふつ、相変わらずだな。ミソラは元気？」

『元気なわけないだろ？ お前が宇宙に行つて、そしていつして…』

「フロンティア？」

『さつきから、僕は何を言つているんだ。本当に僕なのか？

『笑えない冗談だ！ その服は何だ、その仮面は何だ、その椅子はどうだ、お前の部下たちは何だ！』

「僕の、いや、俺の軍隊だ」

「僕の軍隊？ どういってんだ？」

『ふざけるな！ 何でこんなこと』

「僕の息子のリュウセイは元気かい？」

『まるで、昔のお前を見てこよみづな感じだ』

「・・・そう、それは良かつた

『もひ、昔みたいに戻ることは・・・』

「出来ない、する気はない」

『何故だ？何度も地球を救つたお前が

「俺は、この星の闇を見た。皆がブラザーバンドで繋がれる？戦争は、分かりあえないから起らせる？違う。人類が利益を求める限り、戦争は終わらない」

違う、そんなこと、そんなこと言ひちゃいけないんだ！

「恐らく、これからも人類は過ちを繰り返す。これ以上、人と人が争うのは見たくない。だから、僕は、いや、俺はフロンティアとなつたんだ・・・・・・」

ああ、僕の、僕は、一体！？こんな悲しすぎる・・・僕が離れてゆく、ああ、ああ！？

「・・・・？」

あの赤い服にギターは、ミソラちゃん？ビリして？

「・・・き・・・けを」

えつ！？何で言つているんだ、聞こえない。聞こえないよ。

「・・・きみ・けを」

お願ひだよ。声を、声を聞かせて！！

「君だけを、君だけを待つてる」

「！」

僕は、暗闇から抜けだすと、そこには何処かの治療室だった。

SIDE・//ソラ

私は、プレール湾の、あの夕陽が綺麗な砂浜に来ていた。ここは、スバル君に、私の素直な気持ちを伝えた場所。伝えられた場所の方がいいかな？でも、そのスバル君は、今は居ない。

「スバル君・・・君だけを・・・君だけを待つている」

### 第33話、君だけを（後書き）

初めて、こんな書きませんでした。  
感想くれると嬉しいです。  
それではまた

## 第3・4話、混沌とした世界へ（前書き）

長々と更新できずすこません。

テスト勉強やら風邪をひくやらで色々ありまして、更新できずすこ  
ました。

### 第3・4話、混沌とした世界へ

夕方になつて、ミソラ、ジャッカ、リーゼの三人は、ルーカスに呼びかけられ、ブリーフィングルームに集合するように言われた。どうやら、スバルについてらしい。

「あら、ミソラー！ 偶然ね」

ミソラがブリーフィングルームの自動ドアの前に立つた時、後ろから彼女の名を呼ぶ声がした。ミソラが後ろを振り向くと、そこには愛想笑いを浮かべているリーゼが立つていた。

「あー、リーゼさん。今までどこに行つてたんですか？」

今朝方、ミソラが目覚めて朝食を摂りに此処へ行つたときには、既にどこかに出かけていたのカリーゼの姿は見当たらず、ルーカスとジャッカがビールを飲みながら談笑している姿があつた。その時ミソラが、「朝っぱらからお酒？」と思ったのは言つまでも無いことである。

「ヤボ用よ。私、こゝ見えても忙しいの。イ・ロ・イ・ロとね」

「なつ、何か変な意味で聞こえるんですが……」

「うして、廊下でばつたり会つたミソラとリーゼの二人は、他愛もない話を交わしながら部屋に入つていつた。

部屋の中にはジャッカーとルーカスが、またビールを飲みながら喋っていた。彼らは朝から夕方までずっと飲んでいた様だ。酒好きなのは理解できるが、度が過ぎていて。

「おっ、リーゼ帰ったのか」

ジャッカーはリーゼ声をかけるが、案の定、彼は無視されてしまう。最近、ジャッカーは彼女の冷たい反応に慣れてしまい、無視されようが、殴られようが、どうでもよくなってしまっていた。

「お帰り。リーゼ」

「ただいま。ルーカス」

今度はルーカスが笑みを混ぜながら話しかけると、ジャッカーの時と違つて、まるで太陽のように輝いた笑顔を返した。リーゼはルーカスとは異常な程に仲が良いが、ジャッカーとの仲は、まるで冬のシベリアの寒さのように冷えている。ジャッカーとリーゼは昔のことでは々とあるようだ。

「まあ、腰かけな。外は暑かつたろう?」

「ものす」くね。やっぱり、ボスマニアの気候は暑苦しいわ

今まで笑顔で振舞つていたリーゼだが、少し疲れていたようだ。ルーカスが座るように言つと、遠慮なく最前の椅子に座つた。

彼女が言つた、気候が暑苦しいというのはいまいち意味が分からぬが、リーゼが言いたいのは湿気と気温が高く、暑いということであろう。全く、リーゼの語彙能力が低い所為で要らない行を作つてしまつた。

「察しながらよ作者一氣を遣つてやつたのよー。」

「お前に氣を遣われんでもやつてこけるわ、ダメー。」

「こや、作者蝶じ過ぎでしょ。やつこいつとは後書きでしてトカニ  
「ア」

「めん、ミソリ。お前に悪氣は無いけど、少し黙つて。これは俺  
とコーザの問題だか。」

「何よ、ダメでありますー。あなたの方が、ダメなのよー。」

「古いわ、古すぎるわ。あー、なんか時代感じるなー。幼稚園生ぐら  
いかなー

「あんそり、話しを始めたいんだけど……準備はーい? リーザ。後、  
作者は黙つてる」

俺には当たり酷いんだなルーカスーもついいわ。好きにじる。勝手  
にやつてる。お前らのことなんか知るか。

「んで、気を取り直してスバルのことなんだけど、ロゼットに連れ去られてから、もう一週間くらい経つ。こうなつてくると、スバルの精神面メンタルが心配だ。ＫＰＭの連中は妙に正義感強いから悪人は絶対にゆるさない。彼がどういう扱いを受けるか、そんなのは考えなくとも分かる……」

ルーカスは浮かない顔だつた。昨日、アルカスから受けた傷はほとんど完治していて、ギブスも取れていが、骨折した左腕の動きは、幾らかぎこちない。

「なあルーカス。あいつを助け出す為に離島に渡る方法は無いのか？」

まるでルーカスに、救いを求めるかのようにして、ジャッカーは言った。彼だつてスバルを離島から救い出したいのだ。あんな変貌の地に、少年を一人にしておくは訳にはいかない。

恐らく、スバルは一人で投獄されているだろう。なぜなら、ウォーロックは研究のために、スバルとは別の場所に隔離されている可能性があるからだ。彼らが、そのような所業を行うのは、ロックマンにはオーパーツを使用した経歴があり、その痕跡が残っているとすれば、ウィザードの方だからだ。ＫＰＭの研究班がそれを見逃すはずがない。

「無い訳ではない。ただ非常に危険だ」

「危険だらうが何だらうが今は行くしかないだらう」

ジャッカーの言つていることは妥当だ。今、彼を助けなければ、スバルが別の国へと搬送されてしまう可能性がある。救出に向かうのなら早い方が良い。

「……ノイズウェーブを使う」

「…」

前にも述べたが、この国のノイズウェーブはKPMによって占領、管轄されている。彼らが来る前は、犯罪者やウイルスなどの巣窟だつたが、それらはKPMの部隊によって、ことごとく殲滅されてしまった。今では、ノイズウェーブの中央エリアに警備基地が造られていて、ノイズウェーブに許可証無しに入り込んだ者は、問答無用に銃殺される。

「離島に繋がるウェーブロードは無い。連絡船も全て港から出航していて、離島に行くにはノイズウェーブを遣う以外に方法は無いんだ」

驚きの表情を浮かべる三人を、ルーカスは落ち着かせるようにして言った。

「俺の創ったステルスPGMの中にあるGIは、電腦世界では効果が發揮できない。それはノイズウェーブでも同じことだ。しかし、電腦世界と違つてノイズウェーブでは何が起こるか分からぬ。なるほど、お前が「危険」というわけだ」

ジャッカーは、ただ単に、事実を語ると自分の見解を述べる。

GIが電腦世界で使用できないのは、電腦世界にGIが適応できないからだ。普通、電波体は、電波世界と電腦世界を行つたり来たりできるが、それは人間の体と同じように適応能力があるからだ。当たり前だが、電波世界と電腦世界は空間そのものが違う。移動には、電波体そのものの電波情報を書き変えねばならないのだ。その

適応能力がG.I.には無い。ヨイリー博士の創ったエースPGM、及び、メテオPGMにも、電腦世界へ適応できるよう設定されていた。しかし、ジャッカーの創ったステルスPGMは完全なオリジナルではない。実は、ゴーストインビジブルという考えは、KPMのサーバーから盗み出した物だったのだ。その情報には、電腦世界へと適応するための方法は書かれていなかつた。ジャッカーは仕方なしに、G.I.に電腦世界への適応能力を施さないまま、ステルスPGMを彼らに渡したのだ。

「他に方法が無いんだ。分かってくれ」

「ノイズウェーブを使うのは分かつた。しかし誰が行くんだ、その混沌とした世界に？」

現状ではノイズウェーブを使わなければ、離島に渡ることが出来ない。ジャッカーはそのことは了承できたようだ。しかし、ここで出てきた問題は、誰がノイズウェーブを渡るかということだ。ノイズウェーブの中は、当然だがノイズが密集している。ミソラもとい、ハープ・ノートはメテオPGMがあるため、ノイズの影響は受けないだろうが、残りの三人は違う。イグザム・グラージャのままでノイズウェーブに侵入した場合、無傷で済むはずがない。ミソラの持つているメテオPGMを他に使い回せば問題は無いかも知れないが。

「わっ、私が行きます！」

ジャッカーの一言に沈黙していた皆の空気を壊したのは、ミソラだった。

「はあ！？ ミソラ、お前自分がなに言つてんのか分かつてんのか？」

ミソラの発言にルーカスは、怒声に近い声をあげた。しかし、ミソラの瞳はゆるぎない。

「スバル君は私たちの助けを必要としてるんです。今、行かなくてどうするんですか」

「だからってお前が行くことはないだろつ。ミソラ、気持ちは分かれるが……」

ミソラは懸命になつてルーカスを説得するが、そのルーカスは中々答えをくれない。

『ポロロロン。私からもお願ひするわ！ あんなガサツで空氣壊しども一様、仲間なのでね』

ハープもミソラの説得に加わった。ハープもミソラとは、一緒に修羅場を潜り抜けてきた最高のパートナーだ。彼女の恋人を助け出したいという思いを素直に受け止め、そして彼女の思いを形にする。それが、ウィザードとしてのハープの役目だ。ちなみに、上のハープのセリフはウォーロックのことだ。

「私も！ 夫のサポートをするのが妻の役目でしょ！ ねつ、ミソラ？」

「いや、まだ結婚はしてないんですが、フレザー友達であり彼氏であるスバル君を放つてはおけません！」

とうとう、ミソラの説得にリーゼが加わってしまった。最終的にルーカスは、女性陣を相手にしてしまう形になつて、少し、頭が重

くなつた。

「……お前らが、そんなに言つのなら分かつた。許可してやる」  
ルーカスも女性を相手にはしたくないらしく、結局、OKを出してしまつた。しかし、彼の許可にジャッカーは反発した。

「本氣がルーカス！ ミソラ一人でノイズウェーブに侵入するなんて自殺行為に等しいぞ！」

「落ち着けジャッカー。今の彼女ならやつてくれるさ。分かるだろうお前にも？ あのオーラが」

恋人を救いたい。その思いがルーカスにOKを出させた。そして恋人を思う気持ちがルーカスにはオーラになつて見えたのである。

「ここは彼女を信じよう

「……好きにしろ」

ルーカスがジャッckerに笑顔交じりで言つと、そのジャッckerは吐き捨てるよろこびにして答えた。

「じゃあ、出発は明日ね。各自準備しておくよつ」

ルーカスがそう言つと、皆、部屋から出でていき浴室へと戻つた。  
出発は明日。ミソラにとつては眠れない夜になることが確定だつた。

「そう言えば、ソロはどうしたんですか？」

ミソラが自室への帰り際にリーゼに質問した。港行きのトラックの中にソロを隠してはおいたが、その後、ワインディ・ハリケーンとの戦闘で生き別れになってしまった。

「大丈夫、ジャッカーが回収しておいたみたい。トラックを見つけ出すのは結構苦労したそうよ。そう言えば、気絶していたミソラを運んだのもジャッカーだったわね」

「そうだったんですね。私、ロゼットにやられて気絶していたから分からなくなくて……」

そう言つてミソラは気分を落とした。

「まあ、心配することはないんじゃない？　一人の彼、ソロつていう名前なのね。かなり傷だらけだったけど、身体の方は頑丈なようね」

「今、ソロはどうに居るんですか？」

ジャッカーが回収したなら海底施設に居る筈だが、ミソラは一度も彼をここで見ていない。疑問に思つて当然だ。

「病院に居るわよ。あれだけの怪我を負つてたから、とてもこの医務室の設備じゃ足りなくつて」

「病院の人達、大丈夫でしょうか？」

普通ならソロの体のことを心配するものだが、このミンラの質問は少しおかしい。リーゼは不思議に思い、彼女に問いかけた。

「何で？」

「いえ、ソロ、結構気難しいから……」

第3・4話、混沌とした世界へ（後書き）

次回は、今週以内になると想ひます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0267p/>

---

流星のロックマンX～もう一つの世界へ～

2011年11月17日20時54分発行